TATSUMI MOOK

GO NAGAI
All His Works

DIRECTED BY DYNAMIC PRODUCTION INC., / GO NAGAI

GO NAGAI
30th ANNIVERSARY

ILLUSTRATION FIGURE-TOYS VISUAL WORK CHARACTERS COMIC WORK

TATSUMI MOOK

GO NAGAI
30th ANNIVERSARY

GO NAGAI All His Works

DIRECTED BY DYNAMIC PRODUCTION INC. / GO NAGAI

ILLUSTRATION FIGURE-TOYS VISUAL WORK CHARACTERS COMIC WORK

GO NAGAI
30th ANNIVERSARY

GO NAGAI All His Works

DIRECTED BY DYNAMIC PRODUCTION INC., / GO NAGAI

ILLUSTRATION FIGURE-TOYS VISUAL WORK CHARACTERS COMIC WORK

この本には、私のイマジネーションのエキスが30年分詰まっています。無我夢中でマンガと取り組んできた苦闘、楽闘、快闘、格闘の日々が結晶となって提示されています。

掲載されている絵の一点一点に、私の思いが反映されています。創作することの楽しさも苦しさも、キャラクターの表情の一つ一つに込められています。

この本を通して、私のイマジネーションの世界を皆様に共有して頂くことが出来れば、この上無く幸せです。

永井豪

GO NAGAI All His Works

Contents

FEATURES

CHAPTERS

INTERVIEW

ILLUSTRATION

[Bloodshed]

30th Anniversary
lithographs
2 sep '97 - 6 sep '97
BUNGEISHUNJU GALLERY
GINZA TOKYO

ILLUSTRATION

[Metamorphosis]

[機神]

大都社 1996

大都社 1996

Mazinger Z

マジンガーZ

集英社

集英社 1973

Great Mazinger

グレートマジンガー

大都社　1986

大都社　1986

大都社　1986

ILLUSTRATION

UFO ROBOT Grendizer

UFOロボ グレンダイザー

立風書房　1981

立風書房　1981

DEVILMAN

デビルマン

バンダイ　1990

講談社　1986

DEVILMAN
デビルマン

講談社　1987

メディアワークス　1990

日本文芸社

講談社　1978

VIOLENCE JACK
バイオレンスジャック

日本文芸社　1989

徳間書店 1978

MAŌ DANTE

魔王ダンテ

SUSANO Ō DENSETSU

凄ノ王伝説

角川書店　1985

角川書店　1985

角川書店　1983

JUSHIN RIGER

獣神ライガー

勁文社 1990

DOSU RYU

Omorai kun
オモライくん

朝日ソノラマ　1980

Maro
まろ

勁文社　1989

Kikkai kun
キッカイくん

朝日ソノラマ　1973

Abashiri Ikka

あばしり一家

秋田書店

秋田書店　1985

秋田書店　1985

Burai The Kid
無頼 ザ キッド

角川書店 1991

Gakuen Taikutsu Otoko
ガクエン退屈男

講談社

Kekkō Kamen
けっこう仮面

集英社 1990

Maboroshi Panty
まぼろしパンティ

集英社

Tsubasa No Hito
翼の人

角川書店 1986

DEVILMAN LADY

デビルマンレディ

ORON
KUN

中央公論社　1992

CUTEY HONEY

キューティーハニー

東映ビデオ

集英社　1977

HARENCHI GAKUEN

ハレンチ学園

集英社　1972

角川書店　1988

SHUTEN DŌJI

手天童子

講談社　1977

角川書店　1988

角川書店　1989

角川書店　1988

SHUTEN DŌJI

手天童子

講談社　1986

角川書店　1988

石ノ森章太郎

「永井豪はオキテ破りである」

少年時代がある人なら、誰もが一度は憧れた永遠のヒーロー・仮面ライダー生みの親にして、我らが豪ちゃん。永井豪育ての親でもある石ノ森章太郎氏。あまたある名作の原点は、ここにあったといっても過言ではない——。

——30ン年前ですか、永井さんが先生の元を訪れた時のことは覚えてらっしゃいますか。風呂敷ひとつで伺ったということですが。

石ノ森　そりゃあ覚えてるさ。その風呂敷包みの中身が、全部原稿なんだよな、マンガの。アシスタント希望のコでも、自分が描いたキャラクターを4、5枚持ってくればいいほうなんだ。けど、彼の場合はちゃんとしたストーリーになっているものを何本も持ってきた。量もすごいが完成度も抜群だったね。もう最初から違ってた。

——心構えみたいなものが、ですか。

石ノ森　そうそう。積極的に難しい部分をやりたがったりね。難しいことを面白がれるようなコは、飲み込みも早いし、グングン上達していった。豪ちゃんはその見本みたいなものだったな。

——先生からご覧になって、特に際立っていたのはどんな部分でしょう。

石ノ森　アシスタントとして、まずは線の引き方から勉強しなけりゃいけない。普通はそれに1年くらいかかるんだよ。それからキチッとしたバックを描かせるようになる。大概はここまでで2、3年は経ってるんだ。でも豪ちゃんの場合はウチに来るまでに、自分でそこまでの過程を済ませていた。何が際立っていたかって、能力だよ。

——何かアドバイスはされました？

石ノ森　普段からボクはアレコレいわないほうだから。手伝いしていれば、その人の構成の仕方とか、構図の取り方とか、直接見れるじゃない。それ自体がすごく勉強なんだよ。いかに盗み取るか、だと思うんだ。

——永井さんに盗まれたというか、伝わっているなあ、と思う部分はあります？

石ノ森　伝えたというより、ふたりは同じ感性のなかで、ものを探していると思うんだ。

——おふたりとも手塚治虫さんの影響を受けておられる、というのもその理由のひとつでしょうか。

石ノ森　そうだろうね。豪ちゃんも手塚治虫のマンガが好きだっていってたし、ボクも手塚マンガで育ったから、感性が似てくるんでしょう。手塚治虫の世界を、さらにバリエーションを増やして描こうとしたのがボクなんだけど、そのマンガ家のところへ弟子入りにきたんだからさ。豪ちゃんは、それをもっと増幅させようという気概があったろうと思うんだよね。

——先生の作品には、仮面ライダーやサイボーグ００９といった、心に『負』を背負って戦うヒーローが多く登場されますよね。異形のものであるが故の苦悩を持っているような。永井さんのデビルマンや鬼には、ある部分で石ノ森先生の影響が表れていると思うんですが。

石ノ森　ボクも当時にしては、割と新しいマンガを描いてたつもりなんだけど、彼もその精神は一生懸命取り入れようとしていたんじゃないかなあ。ただボクの場合はさ、オブラートに包んで、できるだけまろやかに表現してたんだけど、豪ちゃんはマンガをもっとシビアに、リアルにしたいと考えていたと思うんだ。

——同じ影のあるヒーローが主人公でも、たとえば「人間なんて」っていうセリフが、石ノ森先生だったらつぶやくような感じになると思うんですが、永井さんだとバーストのフキダシに入っている。というイメージはあります。

石ノ森　同じものを描こうとしていても、表現法にはそれだけの差があるということだろうな。モチーフによっても表現の仕方は変わってくるし。我々の世代のマンガ家だと、まだまだ自己規制をかけているところがあるんだよ。つまりタブーとされていたテーマがいくつかあって、そこへは踏み込まないでおこう、とか。

——シモネタや残酷なシーンですか。

石ノ森　うん。ちょうどその頃、仲間のマンガ家たちと新漫画党っていう会を作っていたんだ。ルールを少し破った、新しいマンガを描こうという連中の会。でもまだルールに縛られていたわけだ。児童マンガはかくあるべきっていうね。だからそのルールを破れば、かなりマンガが新しくなるって思いはあった。あってもやらなかったんだけど、豪ちゃんたちの世代には、それが不満なんだ。そこで一歩踏み出さないと、新しいことは何もできないって気持ちが、随分あったと思うよ。ギャグマンガにでも、その一線を踏み越えようとしていた形跡が見られるからね。

——おかげで当時のＰＴＡからは、そうとうキツい攻撃を受けましたが。

石ノ森　ちょうどマンガが持っているパワーみたいなものが、認められ始めた頃なんだよね。だからＰＴＡや社会学者たちが豪ちゃんを非難したのさ。社会全体がマンガを敵視していた時に登場しただろ、豪ちゃんは。スケープゴートだったんだろうね。まあ、そうなりやすいテーマではあったけど(笑)。

——出る杭は打たれる、ですか。

石ノ森　でも豪ちゃんがタブーを破ってくれたおかげで、マンガのジャンルが一気にブワァーッと広がった気がするんだ。しかも青年漫画誌が、その直後くらいに世に出てきた。それによってセックスとか宗教とか、マンガでやっちゃマズイって、ぼくらも社会全体も考えていたものが全部自由になった。だから、豪ちゃんが描いてたようなマンガには、必然性があったんだよ。ちょっと早かっただけでさ。

——やっぱり、女性の裸は描いてみたいモチーフなんでしょうか。

石ノ森　いや、裸っていうよりタブーを破ったマンガを描きたいと、みんな思ってたわけさ。なかなかやれなかったからね、やりたいと思っても。で、豪ちゃんはそれを簡単にやっちゃったと。彼はさ、読者の目を自分の世界に引っ張ってくる表現方法をもってるんだよ。ボクがつぶやくところを向こうは絶叫させちゃうって、さっきあなたがいっていたけれども、それは確かにあって。ボクらは照れるところでも、彼は照れずにできちゃう。その違いなんだろうね。

PROFILE　本名:小野寺章太郎。1938年1月25日生。
1954年『二級天使』でデビュー。
その後『サイボーグ009』『仮面ライダー』などを世に送り出した
日本を代表するマンガ家のひとり。永井豪の師でもある。

F I G U R E - T O Y S

Figure-Toys

Characters which Go Nagai created has been made into several hundred kinds of figure toys.
The oldest is Mazinger Z which was made out of die cast,
and recently many figure toy artists have started to make original figure toys of Devilman, etc.
Characters that were born more than 20 years ago are now very popular among the young generation.
That is the charm and attractiveness Go's characters have.

30th ANNIVERSARY GARAGE KIT

シレーヌ・空魔の舞(VOLKS)
造形：圓句昭浩

Figure-Toys

o several ... nds of f...

figure toys of Dev... etc.

...opular among the young gener...

...cast,

...make the orig... figure toys ... etc.

...are now very ... generation,

igure

Figure-Toys

s been made in

ade ou ca

and recently many toy ave sta

Cahar acters that born n 20 years ag

and at is the ch and ess his character

▲ 原作版

▲ 空山版

▲ KS 原作版

▲ 空山版

Figure-Toys

▲VOLKS ボスボロット

▲VOLKS ゴッドマジンガー

▲MAX FACTORY グレンダイザー

▲MAX FACTORY マジンガーZ

▲MAX FACTORY
グレートマジンガー

▲ポピー　超合金マジンガーZ

▲ポピー　超合金マジンガーZ　Gold Legs ☆

◀ポピー　超合金マジンガーZ　3rd

◀ポピー　超合金グレンダイザー

Figure-Toys

▼ポピー　超合金グレンダイザー
&UFOスペイザー

▲ポピー　超合金グレートマジンガー

☆斉藤和典コレクション1
『超合金大百科』（誠文堂新光社）
PHOTO:岡田初彦

UFOロボ グレンダイザー

宇宙科学基地

Figure-Toys

The oldest is MazingerZ which was made out of die

tly many figur ... ave started to

▲FABIANPLASTICA(ITALY)
GRANDE MAZINGA

▲FABIANPLASTICA(ITALY) GOLDORAK ジオラマ

▲FABIANPLASTICA(ITALY)
GOLDORAK

▲ユタカ キャラクターピンズ

TALK BETWEEN

永井豪＆安彦良和

マンガの、そしてアニメの世界で伝説を造ったふたり。
同じ世界の住人であり、ともにＳＦ作家クラブに在籍しながら
こうして対談のテーブルにつくのは意外にも初めて。
日頃の交流のなかではできない、濃密な会話を楽しめたようだ。

「タブーの意味を知って、破らなくちゃって」(永井)

「極論すると永井豪はいいけど、他はやめろってことかな」(安彦)

純情永井少年が毒を覚えた理由

安彦：なにかで見たんだけど、３つ４つで手塚先生に狂ったっていうのは本当なの(笑)?つまんないこときくけど、その時はまだ当然字は読めないんですよね？

永井：読めなかった。絵だけ見て(笑)。

安彦：絵だけ見て、それでものめりこんじゃった。

永井：そう。それから、上の兄貴にストーリーを何度も何度も読んでもらって、ああ、そういうストーリーなんだって。

●永井さんの兄弟はみなさん絵が好きだったみたいですよね。

永井：うん。みんな絵は描きます。すぐ上の泰宇が一番上手だったな。僕が一生懸命描いてると「そうじゃねえんだよ」ってさらさらっと描いてくれる。これが、ものすごく上手なの。もう悔しくてしょうがない。別に努力しないでも描けるタイプだったみたいで、それ以上は絵に執着しなかったみたい。僕は悔しいから、どんどんムキになって。それが結局こういう結果になってしまいました(笑)。

●安彦先生も兄弟はたくさんいらっしゃるんですか?

安彦：男兄弟が少ないんですよ。兄貴と僕二人で。あと上に女が。絵のようなものを描いたのは、僕と一番下の妹、７番目８番目。小さい頃は妹とね、イチャイチャと遊んでは絵を描いて。バレリーナの絵とかね(笑)。「どうだ」とかいって。妹とは仲よかった。

●永井先生の作品を見て、最初どんな印象をもたれました？

安彦：豪さんのマンガを始めてみたのは、学生の頃だったかな。少年マガジンを読む大学生が社会現象として話題だった頃。友だちのアパートとか行くと、マガジンが積んであって。その頃に読んだ『オモライくん』とか『キッカイくん』とか、あのあたりが初めて。かわいらしい軽い絵なんだけど、油断ならないなあっていう印象を持ったんですね。見た目は非常に優しくてかわいらしくて。でも毒があるっていう。その辺が非常におもしろいなあって。あの頃一番若手でしょう？

永井：そうですね。当時はデビューできた新人が少なかったんですよ。赤塚先生のギャグが全盛時代だったんで、割り込めたのは、ジョージ秋山さんと僕ぐらいだったんですよ。

安彦：ああいう毒っていうのは、自分でも意識してるんですか？　意識してない？

永井：ボク、根ははすっごい素直だったんですよ。家は貧しかったんだけど、まるでお坊っちゃんみたいな育て方してくれて。

安彦：放任されてた？

永井：放任もされてたけど、あれは絶対お金持ちの家の育て方じゃないかという。

安彦：お坊っちゃんが４人も５人もいて、親は大変だったね。

永井：大変だったと思う。戦争前はすごくお金持ちだったんだけど、戦争で上海から引き上げて資産を全部なくしちゃって。ずいぶん苦労したんだろうけど、子どもには全然そういうそぶりを見せないタイプで。そのおかげで、根はすごく素直な人間なんですよね。なんですけど、多分ねえ、毒がついたとしたら、いっちゃまずいかもしれませんが(笑)、石ノ森先生のところで(笑)、想像を絶するアシスタント生活を送って、それでいろんなストレスがたまって…

安彦：根性が曲がって。

永井：そこまではいいませんけど、相当なストレスがたまったと思いますね。とにかく、石ノ森先生自身のペースがめちゃくちゃに早くて、追いつかない。おまけに自分の分描いたらフッとどっか行っちゃうし。

安彦：チーフでしたっけ？

永井：チーフで。そもそも石ノ森先生のところに入ってしばらくしたら、先輩が全員いなくなったんですよ。僕ひとりの時が2、3ヶ月続いて。いきなり月250ページ。アシスタントひとりで。

安彦：ひとりのチーフだったんだ。じゃあ、めちゃくちゃ忙しかったでしょ？

永井：ええ。編集とはしょっちゅう喧嘩するし、自分の寝る時間はないし。月のうち２、３週間は、２時間睡眠がずっと続くんですよ。食事以外では、トイレでやっと息つけるぐらい。

安彦：それだけ描けたっていうのはすごい。最初からアシスタントでやろうなんて気じゃなくて、デビューしようと思ってたから、かなり質の高いもの描いてたんだね。

永井：一時的には石ノ森先生の絵を描いてて、自分の絵を崩しちゃったんですよね。で、だんだん戻ってきたというか。でも一回崩れたおかげで、幅が広くなったんですよ。

安彦：手塚先生のところに行ったりは？

永井：石ノ森先生のところに行く前に、手塚先生に会いに行ったんです。原稿持って。そうしたら、先生は大阪出張でいないっていうんで、別の人が見てくれたんですけど。会いに行く前日に夢に見てね、虫プロの庭に小屋みたいのがあって、その中から石ノ森先生がこっちこい、こっちこいってやってるの。何で石ノ森先生が出てくるんだろうって思って。手塚先生に会えなくて、その夢のこと思い出してね。そうしたらアシスタントになれたという。

安彦：夢に出てきた石ノ森先生というのは、普通の顔で？

永井：そうじゃないんです。手だけなんだけど石ノ森先生ってわかったんです。

安彦：石ノ森先生は意識してた？

永井：好きでしたよ、もちろん。手塚先生と絵柄が似てたし、手塚先生に次いで好きでした。

安彦：石ノ森先生って連載開始の頃は、さあ描くぞっていう雰囲気が非常に色濃くあって、ある意味すごく恐いんだよね。

永井：飽きっぽいのか知らないけど、新連載だとやたら力はいるんですよ。

安彦：それ感じた。石ノ森さんて、すっごいおもしろいって思ったもん、ある種思わせぶりな、最初のパワーが。

永井：かなり実験してるんですよね、コマ割りとか。場面作りなんかでも人のやらないようなことをさっとやっちゃう。それも軽々と。天才なんだろうなって思うんだけど。全然苦労した気配見せないで、さらさらっと。

安彦：あれ、この人死んじゃったの？　ってことなんかを、さらっとやってくれちゃう。あ、これは描いていいんだっていう。子ども心に恐いなって。すごいクールな人だと思った。

永井：作り方はよくわかりましたよね。マンガはこういう風に作っていくんだなって。先生はなんにも教えてくれない人なんですね。勝手に勉強すればっていう感じで。座り机で背景なんか描いてると、上からのぞき込んで立ち直れないような皮肉を言うんですよ。スポーツカーの絵を見て「お、コッペパンか」って(笑)。スポーツカーだ！　ってのに、ひどい。

マンガは影響力を“持っている”

安彦：手塚さん以前と以後っていうのはよく挙げられるけど、永井豪以前と以後というのも、結構大きい気がするんですね。

永井：ああ、そうかもしれない。貸本なんて見てるとヌードが出てたから、描いちゃいけないなんて露とも思わなかったんですよね。単行本とメジャーな雑誌の違いとかいう意識がない人間なんでね、ヌードは出していいもんだと思ってたし。それが時代劇のギャグマンガで、ちょっと女の子に水着の格好させたら、すごく編集に怒られたんですよね。「それはタブーだ」って。何がタブーなんだろうって。「時代劇に水着はおかしい」って。おかしくたってファッションだからいいだろうって。いろんなことといって抵抗して喧嘩になったりして、そういうのでタブーってわかってきたんです。あ、これは破らなきゃいけないって。

安彦：わかってきたら、確信犯的に破った？

永井：確信犯ですね。『ハレンチ学園』なんかは完全に確信犯。これをやったら騒ぎになるぞって。

●石ノ森部屋でも性格ゆがんでますけど、『ハレンチ学園』でも性格ゆがみましたよね。

永井：それはあると思う。

安彦：きっと問題ある家庭に育ったんだろうって。

永井：当時は本当に、何で？っていうくらい叩かれて。作品評とかはしょうがないって思ってたけど、しまいには人格攻撃とか家庭環境攻撃になってくると…。でも、ボクとしては名前が挙がればいいやってところもあって、どんどん書けなんて思ってたんです。いくら書かれてもそういう意味では落ち込まなかったけど、ものすごくストレスはたまってたと思う。だからストーリーマンガを描けるようになって、『魔王ダンテ』のときにドンッて破壊願望が出てきたんだと思うんです。担当者はびっくりしてね、「豪さんは人間許せなくなってるんじゃないですか」って。ドキッとして、そこですごく反省してね、人間は許してもいいんだというふうに思って、気が楽になったことがあるんです。そのひとことで救われたっていう。『デビルマン』のときは、自分自身の毒も、割と整理されてるんだよね。『魔王ダンテ』よりは。『魔王ダンテ』はモロ出てきたから。ストーリーも構成も考えないで描いてたんで。

安彦：でも傷つけた者が、自分も傷つくんだよね、永井さんのは。それもひどく傷ついて、徹底的に痛みを感じる。善玉も鬼も悪人も。これから先は、ちょっと豪さんと考え方違うかもしれないけど。よく、いいじゃないか、何を描いたって、それを読んだからって子どもが不良に

なるわけじゃない、影響受けるわけじゃない、っていう論理があるけど、それは違うと思うんですね。

永井：影響受けると思いますよ。

安彦：あ、そう思う？

永井：ボクはだから、最終的なところで自分なりのモラルは一応守ってるんですよね。一線は常に、考えてはいるんです。

安彦：影響は与えているぞ、と？　それなら非常に納得できる。

永井：『凄ノ王』の中でレイプシーン描いて、その時に編集部に怒りの電話も手紙もたくさん来たんですね。でもそれによって人がどれだけ傷つくかを描くためのレイプシーンなんだから、途中でごちゃごちゃいわずに、最後まで作品を見て欲しい、というつもりで描いていたし。復讐によって主人公もまた傷ついていくということが、作品を通しての一つのテーマだったんだよね。

安彦：暴力やセックス、特にアブノーマルセックスみたいなものは、パワーといっていいのかわかんないけど、持ってるわけじゃないですか。

永井：ええ、一種の異様なね。

安彦：あぶない力はあぶない力として、簡単に開放しちゃいけない部分があるんだよね。たとえば、今どき3歳の子でもおしりさわられたら、「ヘンタイ」っていったりする。みんな風俗化しちゃうでしょ。パターン化した風俗なんだよね。見た目では永井豪よりももっと過激なものは溢れているんだけど、永井豪が最初に掟破りをしたときの活力は、今はないなって。

永井：それはないですね。

安彦：出版コードみたいな話じゃなくてさ。そうなると、その先続かないんだよね。できればそんな話はしたくないし。

永井：昔からそういうのと常に戦ってきたんだけど,最近戦う必要がなくなってきたっていうのがあるよね。戦わなくてもみんな描いてるという。

安彦：無理矢理整理すると、永井豪はいいけど、他はやめろ、ということかな。極端に言うと。豪さんは、編集者に「もっと、もっと」って挑発されたりはしない？

永井：『ハレンチ学園』の当時でもありましたけど、最近でもありますね。毎週でも毎号でも警視庁と掛け合うから、あぶない線ギリギリでやってくれっていわれてね。えー、だいじょうぶかなあ、と思いながらギャグっぽくごまかしごまかし描いてたんだけど、あるとき…(小声で)浣腸系？　をちょっとギャグで使ったのね。そうしたら突然連載切られてしまって。それはすごく編集長の嫌いな部分だったらしくてさ(笑)。みんなそれぞれ、いやな部分はあるんだなって思って。自分のタブーはそれぞれあって、それでいて他のタブーは侵せ侵せといって。

安彦：でも、編集サイドとの戦いは結構あったでしょう。『バイオレンスジャック』とか。

永井：『バイオレンスジャック』で少年の首切ったとき、絶対やめてくれって。毎日だんだん人が増えていくのね、最初は担当で、その次副編で、その次編集長で、その次局長連れて来るって。だんだん人数が増えてきて、5人6人対1人で討論して、結局ジャックの本質的なところが変わっちゃうからって、押し通したんですけど。そしたらページ減らされちゃったし。

対決!?マジンガー対ライディーン

安彦：ボクにとっては、そういう掟破りの永井豪ももちろんそうなんだけど、アニメ始めてからの、メジャーの代表としての永井豪が、圧倒的だったね。特に虫プロを出てから。

永井：虫プロで何やってたの？

安彦：『あしたのジョー』とか『ムーミン』とか。『ムーミン』は僕もやったけど。末期の、手塚アニメをやらなくなってからの虫プロ。で、そこをやめて、その残党が今のサンライズっていう会社の前身をつくって、ロボットアニメを始めたの。ロボットアニメはスポンサー見つければ、なんでもやれるわけ。だからいいな、おもしろいなって思って。その頃が要するに、マジンガー以降の永井アニメ向かうところ敵なし状態。東映とダイナミックがつるんで通った後は、ぺんぺん草も生えない、っていわれてた（笑）不毛地帯で、マイナーな作品をつくってた。そのころの永井豪が、なんたって大きいですね、印象としては。だから、今日にしても「ちょっと話しに来てくんない」って編集さんにいわれて、え、俺が何で豪さんと？って(笑)。身分が違いすぎる。

永井：身分なんか違わないよ（笑）。

安彦：とにかく、永井豪=メジャーだったね。作品のラインナップ見るとすごいなあって思う。何をどうやって見せようかっていう、手練手管のところで、全部やられちゃたという。ライディーンをやってる頃、永井さんは何をやってないだろう、みたいな話し合いをよくしてた。

●安彦先生も、『勇者ライディーン』や『機動戦士ガンダム』などのデザインもやられてるわけですが。

永井：すごく刺激になってましたよ。ライディーンの敵の要塞が手の形を使ってて、あれはやられたな、とか。要塞にしろ何にしろ、年がら年中知恵しぼってたから、まだその手が残ってたか、とか(笑)。

安彦：僕はデザイナーっていうよりも、アニメ演出家だったから、作業スタッフだったのね、言いだしっぺじゃなくて。今もずっとそうなんだけど、人にああしろ、こうしろというのがどうもいえない。作画監督やってても、「これ、直して」っていえない。「いいよ、俺が直す」っていってしまう。豪さんが「メインはいまだに自分で入れてるよ」って聞いて、感動したんだけど。

永井：さすがに、脇役とかはお願いしたりしてます。20代の頃は全部ペン入れまでしてたんですけどね。

安彦：ひとつうらやましいのは、永井ファミリーというか、永井ブラザーズというか、チーム

ワークがすごいよね。

永井：アシスタント時代にある意味で辛い思いをしたので、自分のアシスタントは大事にしようって意識が最初から強かったんです。幸運にも仲よくなって、一緒に歩んでくれる人たちって、結構多くいて。みんなマンガが好きでいてくれて。

安彦：大所帯を切り盛りしてもやっていく手法っていうのは、石ノ森教室の成果なのかな？

永井：そうだと思います。

安彦：お山の大将とか好きだった？

永井：自分ではひとりで1日1ページぐらいコツコツやるマンガ家になるつもりでいたんです。それが石ノ森先生のところで考えが変わっちゃって。石ノ森先生って特殊だったんだけど、僕にとっては唯一のお手本だから、石ノ森先生に近い量産作家にならないと、マンガ家としてやっていけないんだって思いこんじゃったの。だから自然とそれを受けついじゃった。

一本の線に隠れたマンガの魔力

安彦：マンガって、特に最近の2次元コンプレックスみたいなところで再認識されてるよね。線画の持ってるパワーとかインパクトが、バカにしたもんじゃないぜ、っていう。線画のパワーってさ、表現が稚拙だろうが演出方法がどうだろうが、本来的に魔力を持ってるんだよね。

永井：その魔力が嬉しいんですよね。それを使って、キャラクターにどれだけ命を与えられるか、いつも考えますよ。ストーリー以外の部分でどんなことをしてるかを、読者にどうやって想像させるかって、そこまで考えますもん。

永井氏秘蔵、デビュー前の習作にしばし見入るふたり。師・石ノ森章太郎の影響が色濃い作品など、興味深いものが多く残っている

安彦：線画の魔力っていったときに、暗黙のうちに手塚さんの、って思ってて、劇画の人に怒られちゃうんだけど。ただ劇画でも、池上(遼一)さんとかってすごく魅力的ですよね。

永井：池上さんは、劇画なんだけど、どっか線に色気があるね。ちょっとファジイな部分ていうかマンガ的な要素を持ってますよね。

安彦：香港のマンガはおなじみでしょ？　香港のマンガってバリバリに劇画タッチなんだけど、日本のマンガ家というと池上遼一の名前が決まり切ったように出てくる。あれはなんだろう。彼らにとってもファジイな魅力あるのかな。

永井：そうでしょうね。でも安彦さんも香港ではすごく影響を与えてる。よく聞きますよ。

安彦：何で俺なの？　っていうのは非常にわからないんですけど。豪さんの線も非常に色っぽいですよね。高橋留美子を見たときに同じように思ったんですね。非常にとっつきやすくて、手軽な色っぽさがあるんだけど、あぶねえな、こいつ、って。全然知らなくても第一印象でどーんと入ってくる。

永井：安彦さんの絵は魅力ありますよ。ものすごくうらやましいって思うのは、省略のうまさ。線のいるところといらないところを、すごくわかってる人だなあって思うんですね。線でいろんなものを感じさせる、リアルなものを感じさせることができる、きれいな絵だなあって。

安彦：ひとつに怠け者だから、余分なものを描けないという。

永井：いやあ、でもああいう風に描けたら、もう少し、と思うことがずいぶんありますよ。安彦さんは、最少の労力で、最大のものを見せることができる人だなあと。

安彦：よう手抜きをしているなあ、と。

永井：(笑) そういうわけじゃないですよ。僕なんか、ちょっと描きすぎる。省略でもっと感じさせることができたらいいのにな、って思うことがずいぶんありますよね。

安彦：物理的にアシスタントがいないということもあるだろうし、もう一つ、大友(克洋)さんと話したときにへーっと思ったんだけど、ボク目が悪いんですよ。豪さんは？

永井：僕も近眼です。大友さんは目がよすぎるんですよね。2.5くらいある(笑)。

安彦：ああ、そうか、だから描くのかって。見えちゃうんですね。

永井：それは大きいと思う。

安彦：それで、納得しちゃって。あれがどうなってて機械がどうなんて、見えないから描こうという気にもならない。見えちゃう人は、気が済まないだろうからねえ。

永井：ボクは目が悪いけど、アブナイものは見えてしまうという。『手天童子』を描いているときなんて、鬼が周りにパーッときちゃうんですよね。スタッフまで気持ち悪くなっちゃって、早く連載終わらせてください、なんてお願いされたり。

●安彦先生も日本の神話をテーマにされてたりしますが、周囲にそういう霊的なことは起こりますか？

安彦：いや。鈍感なんで。お参りにはいったことありますけど。出雲の熊野大社とかね。スサノオさんを描いたりしたんで、ちょっと気になって。だからお社造るのって、そういうことだと思います、祟らないでくださいって。

永井：福を授けてください、じゃなくてね。立派な神殿を建てて、囲ってしまっている。ここにいてください、っていうことですよね。

安彦：豪さんもそろそろ囲ったほうがいいかな。

永井：いや、ボクはまだまだ。

安彦：崇っちゃうんだ。

永井：崇ります(笑)。

石川　賢

「永井豪はモーツァルトである」

[illegible]——。ダイナミックプロの太陽が永井豪ならば、月にあたるのが石川賢であろう。
太陽によって輝きを覚え、ときに太陽へも影響を与え、そして太陽の灼熱を誰よりも知る存在。
師であり盟友の"豪ちゃん"を、氏は月のようにたおやかに語ってくれた。

——永井さんとの出会いはいつですか？

石川　漫画家になろうと上京してきた頃、2人の新人がデビューしてね。それが、永井豪とジョージ秋山。当時、デビューする新人ってあまりいなかったんですよ。そのなかで2人は際立ってましたね。アシスタントにつくんだったら、大御所より新人の方がいいかなって思ってたから、最初、豪ちゃんのところに行ったんですよ。そしたら「いいよ」って言ってくれてね。それから、かれこれ28年のつきあいになるかな。

——お会いした時は、どんな印象でした?

石川　この人が永井豪かな？　って思うくらい、子どもっぽかった。ファンの子が入ってきたって思ったぐらいだったから（笑)。『ハレンチ学園』を見た感じでは、スケベおやじをイメージしていたからね。

——その時原稿を持っていかれたと思うんですが、永井さんの反応はいかがでした?

石川　すごく喜んでくれた覚えがあるんです。おもしろいって。当時、俺自身ギャグマンガを描いたことなかったんですね。永井豪のところに行くから、少しギャグっぽい方がいいだろうと思って、描き下ろしを持っていったから、すごく不安だった。でも結構ウケてくれて、すぐ採用が決まったんですよ。

——永井さんから、アドバイスみたいなものはありました？

石川　デビューする時は、豪ちゃんにアイデア的な部分とかでずいぶん助けてもらいました。ギャグマンガでデビューしたんだけど、自分はギャグマンガにそんなに自信がないんですよね。そもそもは白土三平が好きで、内容も絵も白土風に偏っちゃってるところがあったんだけど、豪ちゃんも白土三平が好きで、よく理解してくれましたよ。結局、永井マンガと白土マンガが融合した感じにはなっていったんじゃないかな。『桃太郎地獄変』は、自分でも一番好きな作品なんだけど、そういう部分が出ていますよ。

——石川先生ご自身のジャンルがひろがった、と。

石川 永井豪のところに来て、ラッキーだったなって思います。豪ちゃんに会わなかったら、ＳＦやギャグというスタンスはあまり考えなかったと思う。時空ものなんかは完璧にそうですよ。豪ちゃんに会ったからこそできたといえますね。

——永井さんには驚かされる部分も多かったかと思うんです。特に『ハレンチ学園』を描かれていた時のパワーとか。一番近くでご覧になっていかがでした？

石川　変な言い方かもしれないけど、当時の豪ちゃんの考え方には脂がのってましたね。マンガを展開させていくパワーがすごかった。えっ、こんなことやるの？　あんなことやるの？　って毎回毎回驚かされてましたよ。『ハレンチ学園』のＰＴＡとのもめごとにも屈しないバイタリティがあって、タブーをどんどん破っていきましたからね。本当にハラハラしました。『あばしり一家』で残酷な殺し方を描くと、出版社から「やめてくれ」ってクレームがきて。ところが豪ちゃんは屈しない。「自分はこういう意図で、こう描いてんだから、絶対曲げない」って、編集者とやり合うんですよ。それを見てて、こっちはまだ新人だし、こりゃマズイなぁ、困っちゃったなぁ（笑）って。豪ちゃんは、編集者と対抗してるというより、世間と対抗している部分が多分にあったんじゃないかな。信念を持って自分の描きたいものを描く姿は、作家として素敵ですよ。

——反面、すごくユニークな面も持ってらっしゃる方ですよね。

石川　『ガクエン退屈男』を手伝ってた時に、喫茶店で豪ちゃんが「実は身堂竜馬は殺人鬼なんだ」っていうんですよ。それには本当にびっくりして、え!?　って。あ、やっぱりすごい！　やっぱり常識外れてるってね。身堂竜馬といえば、美男でしょ。そういう考え方もあるんだって思いましたよ。豪ちゃん、最初から計算してたか知らんけど（笑)、マンガのおもしろさはここにあるんだなって、ね。

——永井さんは霊的な逸話も多いですよね。石川先生はどうですか、そういう体験は多いですか。

石川　俺はないです(笑)。マンガ家って仕事が辛くなると、どこかに逃げ道を見つけたいというところがあってね。ひどい人は逃げちゃったり、他の人のせいにしたり。それを豪ちゃんは、そういう超常現象のせいにするんだなっていうのが俺の感想なんだけど(笑)。本人は、大まじめで「お化けが来て、仕事の邪魔をする」ってね。旅館に泊まったりすると、「夜中にお化けを見た。ここじゃ仕事ができないから、帰る」って(笑)。

——最近だと永井さんとはサムライワールドシリーズでご一緒に描かれてますよね。

石川　作者は永井豪でも、ダイナミックプロ作品っていえるかもしれないね。『豪談　児雷也』をはじめ、僕も下描きで参加している作品があります。個人的には、サムライワールドシリーズみたいにダイナミックプロにいるいろんな人が集まって一緒に仕事をするの、好きなんですよ。マンガ家が集まって、みんなで面白く仕事しようというのがね。豪ちゃんのダイナミックプロ観もそこにあるんじゃないかなと思うんだよね。昔は、みんなでひとつの作品をやってみようって考え方が相当強かったから。

——永井豪先生の作品の中で一番好きなものは？

石川　『手天童子』ですね。話がきれいにまとまっているし、マンガとして、というか絵的なものとして、あれだけいろんな要素を違和感なく入れたという点でね。あの作品はすごい。あと、作品じゃないけど豪ちゃんの描く目の表情が好きだな。優しさから厳しさまで幅があるんですよ。『デビルマン』なんかは、怒りの表情はすごいですから。

——永井さんと28年間おつきあいしてきて、今のお二人の関係はどう変わりました？

石川　最初は弟子だったけど、最近は、よきライバルかな？　ん—、でもやっぱり弟子かな(笑)？ ま、仲間っていう意識も強いですね。豪ちゃんをひとことでいうと、やっぱり天才だよね。あの人がモーツァルトだとすると、俺がサリエリかな(笑)。

PROFILE　1948年6月28日生。
1969年にアシスタントとしてダイナミックプロダクションに入社。
翌年『それゆけコンバット』でデビュー。
TV 放映もされた『ゲッターロボ』シリーズも手掛ける永井豪の右腕。

VISUAL WORK

T.V. ANIMATION

巨大ロボットアニメの礎を築いた。もしもこの世にホバーパイルダーがなかったら、
あの作品もあの映画も、主人公とロボットが合体できずにいたかもしれない。
戦う女を描いた。どこまでも美しく、あくまでも強く。自らの力で、自らの方法で悪に立ち向かう女を。
永井豪が創り上げたアニメーションの世界には、今もなお脈々と熱き血が流れている。

MAZINGER Z

放映／昭和47年12月3日～49年9月1日
ＣＸ系　全92本
原作／永井豪とダイナミックプロ　企画／春日東、別所孝治、横山賢二、有賀健　脚本／高久進、藤川圭介ほか　演出／芹川有吾、勝田稔男、勝間田具治ほか　作画監督／羽根章悦、落合正宗、中村一夫、上村栄司、若林哲弘、森下圭介ほか　美術／辻忠直、内川文広、山崎誠ほか　音楽／渡辺宙明　製作／東映（動画）、旭通信社

マジンガーZ

恐るべき機械獣軍団を操り、世界制服に乗り出した悪の科学者Dr.ヘル。そのゆく手に敢然と立ちはだかった鉄(くろがね)の城こそ、ヘルの野望を阻止せんと兜十蔵博士が密かに開発し、孫の甲児へと託したスーパーロボット・マジンガーZだった！　日本のテレビアニメに“巨大ロボット物”というジャンルを確立したパイオニアであると同時に、’70年代の東映動画に“永井豪の時代”をもたらす決定打ともなった作品。永井豪の斬新なデザイン感覚に支えられた各種メカ設定、時にその開発過程にまで踏み込んで描かれたロケットパンチ、ジェットスクランダーなど魅力的な装備の数々。それらを駆使した全く新しいロボットバトルの映像は子どもたちの心を虜にした。“ジャンボマシンダー”や“超合金”など、作品世界と有機的に結びついた玩具の大ヒットも特筆されるべき出来事だった。

38話「謎のロボット　ミネルバX」

マジンガーZのパートナーとして設計されながら、戦う宿命を背負わされたミネルバX。ロボットの悲恋劇ともいえる異色の展開が人気を読んだ屈指の名作で、ロマン派・芹川有吾の演出力が映像の隅々にまでみなぎっていた。アニメブーム期にはたびたび情報誌や上映会で紹介され、ついには専用のイメージソングも作られたほど。

67話「泣くな甲児！　十字架にかけた命」

38話と対をなす芹川悲恋ものの名編。甲児暗殺のために遣わされたアンドロイドの少女えりか。人間になることを願う彼女は、甲児の優しさに触れるうち、次第に心を揺らしてゆく。女性のしなやかな仕草を描かせたらピカいちの名監督・若林哲弘の独壇場といえる回。凶弾に舞う十字架と甲児の涙が、多くのファンの心に刻印を残した。

豪さんの不思議メカデザイン

マジンガーシリーズを作り上げた当時のスタッフが語る、巨大ロボット黎明期。空にそびえる鉄(くろがね)の城は、こうして生まれていった——。

東映動画／アートディレクター **辻忠直**

1941年東京生まれ。1961年東映動画入社。『マジンガーZ』に美術デザイナーとして参加。以後、『ゲッターロボ』『ゲッターロボG』『UFOロボグレンダイザー』などロボットものを担当する。現在は東映動画のチーフプロデューサー、アートディレクターとして活躍。最近では『ドラゴンボールGT』の美術を手掛ける。

マジンガーZは[illegible]バイクと合体するよう[illegible]れていた。左下のイラストは企画初期のバイク型パイルダー。そして下[illegible]パイルダーと合体した"エネルガーZ"。一度は流されたが、弓さやかが操るダイアナン[illegible]で。この設定は生かされることになる。

東映動画が巨大ロボットアニメから遠ざかって何年になるのだろうか。

作品リストを調べてみると、1977年のテレビ朝日放映『超人戦隊バラタック』が最後だった(厳密にいえば1991年にローカル局制作の『ゲッターロボ號』がある)。この作品も僕が美術を担当したのだが、振り返ってみると何故かしらロボットものが多かった。

美術デザイナーとしてのデビュー作品が『マジンガーZ』だった。企画書をもらったとき、タイトルを『マシンガンZ』と読み間違えてしまったことを思い出す。マジンガー以後、『ゲッターロボ』『ゲッターロボG』『UFOロボグレンダイザー』と永井豪ロボットものを担当したが、当初は内心では美術設定の少ないファンシーものの方が楽でいいのに、と思ったりもしたものだ。

当時担当した作品の美術設定は散逸して、今は手元にほとんど残っていない。横山さん(現・東映動画製作担当)からお借りした資料をあらためて読んでみる。懐かしさは当然あるが、それと同時にキャラクターから古さというか、時代の流れをまったく感じられないことに驚かされる。豪さん独特のフォルムとタッチが未だに新鮮。今のアニメキャラクターには類形的なタイプが多くなっているから、そんなことを感じるのだろうか。

■巨大ロボットアニメの黎明期

巨大ロボといえば、リモコンで操縦する『鉄人28号』だけだった頃、アニメはマンガ映画と一括りされていた。それがカラーテレビの普及でアニメ番組はゴールデンタイムに放映されるまでになる。1972年の12月に放送が始まった『マジンガーZ』の前後は『ガッチャマン』『サザエさん』であった。

『デビルマン』に続く永井豪作品の第二弾として『マジンガーZ』が決定して、制作準備に入ったのは放送が始まる4、5ヵ月前だったと記憶している。ストーリー設定は出来上がっていたが、キャラクターや美術設定は決定稿ではなく、豪さんのラフスケッチの段階であった。

スタートはマンガとアニメが同時だったように記憶している。マンガからアニメ化に向けた決めごと作業はたくさんあるので、スケジュールのことを考えると間に合うのかと青ざめた。

その頃の東映動画は魔法もの路線が多く、メカが得意なスタッフが思うようにいたわけではない。そんなこともあって、メカ絡みの美術デザインは何でもやった。タイトル文字のデザインに始まってキャラクターの色指定、美術ボード、美術設定など。特に美術設定はとめどもなくあって、ディテールまで描き込めなかった。しかし、この苦労が後の『ゲッター』や『グレンダイザー』作品に活かされたかと思う。巨大ロボであるマジンガーも、登場する人物キャラも、とにかくユニークなデザインだが、特筆すべきはドクター・ヘル以下の悪側の強烈な個性を持ったキャラクター群だ。この個性派軍団に見劣りしない背景画面を創るには、意識を集中せざるを得ない箇所があった。常に闘いの場となる光子力研究所である。設定条件は富士山麓にある青木ヶ原、ジャパニュームを採掘して光子力エネルギーに変換するプラント施設などが置かれている。美術デザインとして、設定条件よりも建物のフォルムを優先させて考えた。富士山に負けないフォルムなら、同じシルエットでいけば、とデザインした。研究所のデザインコンセプトは豪さんやスタッフには伝えず、外観スケッチや内部断面図の段階で提出した。NGが出なかったのは時間的な余裕がなかったせいもあるのだと思う。

一番悩んだのはマジンガーの格納庫だった。画面的には一番絵になるシーンなので、格納庫の扉が開いて出て来るのでは平凡すぎる。地下格納庫にすることは決めていたが、アイディアがなかなかでてこなかった。ある時、ふと映画の「十戒」のように水を割って出現するのはどうだろうか、と閃いた。ちょうどその頃、現在の新宿副都心がある淀橋浄水場が、再開発のために取り壊されるという記事と写真が新聞や雑誌に出ており、ヒントにさせていただいた。

永井豪作品で培った巨大ロボットアニメのスピリッツはいまも忘れてはいない。今度とお化けはなかなか出ないというが、それを承知の上で永井豪の巨大ロボットアニメは、ぜひ復活してほしい。そしてその時は、ぜひスタッフとして加えていただきたいと思っている。

GREAT MAZINGER

グレートマジンガー

「マジンガーZ」のヒットを受けて企画、製作されたシリーズ第2弾。強大なミケーネ帝国の復活を予見した兜十蔵博士が、かねてより息子の剣蔵に開発させていた偉大な勇者グレートマジンガー。超合金ニューZの装甲を持つ新スーパーロボットを操縦するのは、戦闘プロフェッショナルとして訓練を受けてきた孤児の剣鉄也だ。鋭角的なイメージが強調されたグレートのデザイン、機械[illegible]の能力をはるかに上回る戦闘獣の設定など、前作をしのぐハードなドラマ展開が印象的な作品となった。ストーリーの先取り情報や、ロボットジュニアのデザイン募集など、雑誌メディアとのタイアップ[illegible]の成功に加え、前作から継続する各種玩具の売れ行きも好調で、「マジンガー」ブームはここにピークを迎えることとなる。なお、本作の企画段階のタイトルは「ゴッドマジンガー」であった。

放映／昭和49年9月8日～50年9月28日 CX系、全56本
原作／永井豪とダイナミックプロ　企画／春日東、別所孝治、横山賢二　脚本／高久進、藤川圭介、安藤豊弘　演出／[illegible]田具治、大谷恒清、明比正行、山吉康夫ほか　作画監督／森下圭介、鹿島恒保、[illegible]野皓、森利夫、我妻宏、白土武ほか　美術／浦田又治、山崎誠、鶴岡孝夫ほか　音楽／渡辺宙明　製作／[illegible]（動画）、旭通信社

「マジンガーZ」の最終回を事実上の1話としてスタートした本作だが、その世界観や人物の内面はより過酷さが強調されたものとなった。剣哲也、炎ジュン、兜剣造それぞれが抱く孤児や混血、サイボーグとしてのコンプレックスの描写もそのひとつで、特に初期はこれらキャラクターの内面を掘り下げた佳作エピソードが続出した。

56話「平和の[illegible]よ　勇者の頭上に鳴り[illegible]!!」

ミケーネとの最終決戦を描いたラスト4話はファンの血がたぎる力作だった。53、55話では兜甲児、弓さやかがそれぞれ帰国、夢のダブルマジンガーに加え、レギュラーロボットも勢揃いして戦いに参加。だが、兜剣造博士の死と剣哲也の重傷という痛みと重みを私たちに伝えてくれた。

UFOロボ　グレンダイザー

劇場版「宇宙円盤大戦争」をパイロットフィルムとし、これに兜甲児のレギュラー復活などさまざまな改善、再構成が行われて実現した「マジンガー」シリーズ第3弾。フリード星の王子デュークフリード（宇門大介）が、第2の故郷である地球の平和を守るため、グレンダイザーとともに宿敵のベガ星連合軍に挑んでいく。キャラデザインは「ゲッターロボ」の小松原一男が担当。中盤、視聴率的には若干苦戦したが、3クール目以降導入されたダイザーチームの設定、さらに荒木伸吾が姫野美智とともにデザインしたデュークの妹マリアの登場などが功を奏し、最終的に74話にわたるロングラン作品として成功を収めた。本作は後にヨーロッパへと輸出されたが、「ゴルドラック」のタイトルで放送されたフランスでは子どもたちの心をつかんで空前のヒットを記録した。

放映／昭和50年10月5日～52年2月27日　ＣＸ系　全74本
原作／永井豪とダイナミックプロ　企画／春日東、別所孝治、勝田稔男　脚本／上原正三、藤川圭介ほか　ディレクター／勝間田具治、小湊洋市ほか　キャラクターデザイン／小松原一男、荒木伸吾　作画監督／小松原一男、森下圭介、森利夫、荒木伸吾ほか　デザイナー／辻忠直、伊藤岩光、湊秀信ほか　音楽／菊池俊輔
製作／東映（動画）、旭通信社

UFO ROBOT GRENDIZER

25話「大空に輝く愛の花」
63話「雪に消えた少女キリカ」

「マジンガーZ」における前述の芹川演出回のように、女性キャラクターに焦点をおいて戦いのなかの悲しみを浮かび上がらせた異色作品は「グレンダイザー」のなかにも登場した。演出・勝間田具治、作画監督・荒木伸吾のコンビが手がけた25、63、72話はいずれもアニメファンにとって忘れられないエピソードだ。デュークの幼なじみナイーダ、デュークに亡き兄の姿を重ねる科学者キリカ、デュークを慕うベガ星王女ルビーナ。これらのゲストヒロインのデザインはいずれも、荒木プロに入社して間もない姫野美智の手によるものだった。

DEVILMAN

デビルマン

ヒマラヤの氷の中で長き眠りについていた悪魔デーモン族が地球支配のために復活。だが、先兵となったデビルマンは、高校生・不動明の身体と同化したことから人の愛の素晴らしさを知り、恋人である牧村美樹を守るために自ら裏切り者となる道を選ぶ。永井豪原作による初のテレビアニメ。「魔王ダンテ」のアニメ化企画に、当時一世を風靡していた変身物の要素が加えられ、よりヒーロー性の強い作品として結実したもの。永井氏による雑誌連載はアニメ製作と同時進行で行われたため、基本設定の一部を除いて両者の物語展開は大幅に異なっている。製作は東映動画。辻真先の脚本をもとに、勝間田具治。小松原一男ら「タイガーマスク」スタッフが手腕を奮い、アクション色豊かでかつ不気味さの漂う名編が続出した。テレビアニメとしては異例の夜8時30分からの放映も話題となった。

放映／昭和47年7月8日～昭和48年4月7日
ＮＥＴ系　全39[illegible]
原作／永井豪　企画／有賀健、[illegible]義文　脚本／辻真先、山崎忠[illegible]、高久進　演出／勝間田具二、明比正行、白根[illegible]重、西沢信孝、設楽[illegible]、新田義方、落合正宗、山口秀憲ほか　作画監督／小松原一男、白土武、森利夫、荒木伸吾ほか　美術／福本智雄、浦田又治、遠藤重義、秦秀信ほか　音楽／三沢郷　製作／ＮＥＴ、東映（動画）

当初、ドロドロとした怪奇性が顕著だった本作に対し。視聴者からは「残酷で暗い」という反響も多く寄せられた。そのため。明るいギャグ性を加味しようとスタッフが26話から登場させたのが妖獣ララだ（写真は27話）。永井氏デザインによる老婆の妖獣が原形になったこのキャラは。名コメディリリーフとして作品後半に不可欠な存在となった。

39話「妖獣ゴッド　神の[illegible]」

最終話では、ついに不動明が美樹の前でデビルマンに変身！　だが、ヒーローの正体がバレる=別れ、という図式にならないところが本作のスゴさだった。「どんな格好になったって、中身は同じ明くんじゃない?」美樹の言葉が“愛”の勝利を物語る。ちなみに本放映時。東京ではこの回が未放映になったのは有名な話。

CUTEY HONEY

キューティーハニー

聖チャペル学園に通う美少女・如月ハニー。だが、彼女の正体こそ、体内の空中元素固定装置で瞬時にしてさまざまなコスチュームへと変身するスーパーアンドロイド・キューティーハニーだった。装置を狙う犯罪組織“豹の爪”に父を殺されたその日から、ハニーの[illegible]にして過酷な戦いは開始された……。“少女版多羅尾伴内”という東映動画側の企画をもとに永井豪氏が原作を担当。SF的な設定を加味しながら練り上げられた作品。「デビルマン」同様、放映が土曜夜8時30分だったこともあり、変身時にヌードになる大胆な描写が導入され、注目を浴びた。永井氏の絵柄をうまく消化してデザインをこなした荒木伸吾、舞台装置的でシュールな美術設定を生み出した浦田又治らの活躍も目覚ましかった。特にOVAやテレビで続編やリメイクがつくられれるなど、根強い人気を持つ作品。

放映／昭和48年10月13日～昭和49年3月30日 ＮＥＴ系 全25話
原作／永井豪とダイナミックプロ 企画／勝田稔男 脚本／辻真先、高久進、藤川桂介 演出／勝間田具治、設楽[illegible]、葛西治、大貫信夫、小湊洋市、宮崎一哉、白土武ほか 作画監督／荒木伸吾、菊池城二、上村栄司、小泉謙三、宇田川一[illegible]ほか 美術／浦田又治、伊藤英治、井岡雅宏、伊藤岩光 音楽／渡辺岳夫 製作／ＮＥＴ、東映（動画）

その他の永井豪作品

◯**Xボンバー（実写）**
（フジ系　1980年10月～1981年3月）
◯**鋼鉄ジーグ**
（NET系　1975年10月～1976年8月）
◯**サイコアーマーゴーバリアン**
（テレビ東京系　1983年7月～1983年12月）
◯**キューティーハニーF**
（テレビ朝日系　1997年2月～放映中）
◯**サイボット ロボッチ**
（テレビ東京系　1982年10月～1983年6月）

"DORORON" ENMA-KUN

ドロロンえん魔くん

閻魔大王の甥っ子のえん魔くん、名門雪女家の息女・雪子姫、情報屋のカパエル。彼らは地獄の掟を破る妖怪を取り締まるため、妖怪パトロール隊として派遣された3人組だ。街にスモッグがたちこめ、川の汚水が悪臭を放つ公害日本は、まさに妖怪たちの楽園なのだ……。東映動画が「ゲゲゲの鬼太郎」に代わる独自の妖怪アニメを企画して永井豪氏に発注した作品。人物配置や主役声優などに「鬼太郎」との共通点がみられるが、アクの強いキャラクターは永井氏ならではのもの。特に雪子姫は、そのミニスカート状の着物の魅力もあって男性ファンの絶大な人気を集めた。環境問題や人間の排他主義など、社会派的な視点での意欲作が数多く生まれた作品でもあり、「長靴をはいた猫」の名匠・矢吹公郎がその任にあたった。

放映／昭和48年10月4日～昭和49年3月28日　CX系　全25話
原作／永井豪とダイナミックプロ　企画／別所孝治、旗野義文　脚本／辻真先、山崎忠昭、雪室俊一、上原正三　チーフディレクター／矢吹公郎、森下圭介、山吉康夫、永樹凡人、生頼昭憲、川田武憲、落合正宗ほか　作画監督／白土武、白川忠志、森利夫、大貫信夫、野田卓雄ほか　美術／福本智雄、遠藤重義、下川忠海、山崎誠　音楽／筒井広志　製作／フジテレビ、東映動画

LITTLE WITCH TICKLE

魔女っ子チックル

イタズラが過ぎたため絵本の中に閉じ込められていた魔女っ子のチックルは、偶然その絵本を手に入れた11歳の少女チーコによって助け出される。人間界へとやってきたチックルは、お父さんやお母さんに魔法をかけてチーコと双子だと思い込ませることに成功。ラッキーペア、チックルとチーコの新しい生活が始まった。ダイナミックプロの持込み企画をもとに、東映本社テレビ部が製作した唯一の"魔女っ子もの"アニメ。原作とメインキャラの原案を永井豪氏が手がけ、作画監修を「タイガーマスク」で知られる木村圭市郎が担当。ただし、キャラクターの顔立ちにややキツい印象があったため、中盤からデザイン修正が行われている。ワーナー・ブラザースのキャラクター、トゥーティが友情出演(!?)する変わり種のエンディングもファンの間で語り草になった。

放映／昭和53年3月6日～昭和54年1月29日　ANB系　全45話
原作／永井豪、ダイナミックプロ　プロデューサー／碓氷夕焼、松永英、飯島敬、小野耕人　脚本／田村多津夫、曽田博久ほか　チーフディレクター／久岡敬史　演出／坂田透、高木厚炎ほか　作画監督／木村圭市朗、森下圭介　美術設定／加藤清　音楽／渡辺岳夫　制作協力／ネオ・メディアプロダクション、風プロダクション、日本サンライズ　製作／テレビ朝日、東映(本社)、大広

JUSHIN RIGER

獣神ライガー

百万年前、善神アーガマによって鬼ヶ岩に封じられた邪神ドラゴ。その封印を解き、全世界を手中に収めんとするドラゴ帝国の猛攻が開始された。善神の血を受け継ぐ少年・大牙剣は自らの使命に目覚め、アーガマの分身であるバイオアーマー・獣神ライガーと融合、熾烈な戦いの日々が幕を開ける。永井豪氏とタカラの間で進められていた企画にサンライズが参加し、テレビアニメ化が実現した作品。善神と邪神が対立する世界観の構築をはじめ、ライガーのメインキャラのデザイン原案もすべて永井氏が担当。アニメ版のキャラは、この永井原案をもとにスタジオMAXの内田順久がデザインを手がけた。なお、本作品が放映スタートして間もなく、一種のタイアップ企画として新日本プロレスから同名のレスラーがデビュー、現在も獣神サンダーライガーとして活躍している。

放映／平成元年3月11日～平成2年1月27日　ＡＮＢ系　全43話
原作／永井豪　企画・原作協力／サンライズ　企画協力／ダイナミック企画　プロデューサー／今井慎、本名洋一、中川宏徳　脚本／会川昇、高橋義昌　井上敏樹ほか　監督／鹿島典夫　演出／関田修、川瀬敏文ほか　キャラクターデザイン／内田順久　バイオアーマーデザイン／牧野行洋　作画監督／内田順久、山田政紀ほか　美術／岡田有章　製作／名古屋テレビ、東急エージェンシー、サンライズ

GOD MAZINGER

ゴッドマジンガー

超古代の地球。ドラゴニア帝国の攻撃によって滅亡の危機に瀕したムー帝国では、女王アイラ・ムーが時を隔てた未来から少年・火野ヤマトを召還。"選ばれし者"であるヤマトはムーの石像と合体、ここに守護神ゴッドマジンガーが甦った！「グレートマジンガー」の企画時タイトルであり、永井豪氏にとっても愛着の深かった「ゴッドマジンガー」が10年ぶりに陽の目をみることに。本作は当初「マジンガーZ」のリメイク企画だったが、最終的には古代の神というユニークな設定をもつ、まったく新しい"マジンガー"として完成。永井氏は放映に併せて原作単行本も描き下ろしている。製作は東京ムービー新社で、竹内啓雄、平山智など「キャッツ・アイ」を終えたスタッフが多数参加。なおアニメ版では、原作にない"光宿りしもの"の争奪戦が物語の縦糸として折り込まれていた。

放映／昭和59年4月15日～9月30日　ＮＴＶ系　全23話
原作／永井豪　プロデューサー／初川則夫、加藤俊三　シリーズ構成／小野田博之　脚本／辻真先、並木敏、大野木寛、塚本裕美子、星山博之、田口成光　演出／早川よしお、井内秀治、坂野亀吉、井戸端徹、西森明良、伊藤幸松、南敦ほか　キャラクターデザイン／平山智　作画監督／本橋秀之　美術監督／須藤栄子、大野広司、早乙女満　音楽／羽田建太郎　製作／東京ムービー新社

MOVIE 7

番組枠を飛び出し、ふたりのヒーローがひとつのスクリーンに競演する。
そうした設定だけで、子ども心は大きく揺れた。
見たことのないストーリー、強くて怖くて新しいワルモノ……。
永井豪の映画には、日常とは明らかに違う"ハレ"の舞台が必ず用意されていた。

MAZINGER Z vs DEVILMAN

昭和48年7月18日公開
上映時間43分
原作／永井豪とダイナミックプロ　製作／登石雋一　企画／有賀健、勝田稔男、脚本／高久進　演出／勝間田具治　作画監督／角田紘一　原画／奥山玲子、菊池貞雄、木野達児、金山通弘、窪詔之、小松原一男、白土武、中村一夫　美術／浦田又治　背景／勝又激、赤保谷アイ子ほか　音楽／渡辺宙明、三沢郷　製作／東映動画

マジンガーZ対デビルマン

永井豪原作による2大人気テレビ作品のヒーローを競演させたアニメ史上画期的な劇場映画。Dr.ヘルに操られた機械獣軍団およびデーモン族の妖獣たちとマジンガーZ、デビルマンの死闘を描く。以後、この路線は"ヒーロー対決シリーズ"として「東映まんがまつり」に定着。全体のストーリーは永井豪氏がまとめたアウトラインがもとになっており、「マジンガーZ」のテレビシリーズでお馴染みの高久進が脚本を担当。ワイド画面をフルに生かした勝間田具治のレイアウトセンスとアクション演出、角田紘一ほか長編映画班のスタッフが主力を務めた丁寧な作画があいまった結果、劇場アニメならではの見せ場にあふれた秀作となった。本作はまた、ジェットスクランダーによってはばたくマジンガーZの勇姿を、テレビ版に先行して描いた内容ともなっている。

MAZINGER Z vs THE GREAT GENERAL OF THE DARKNESS

マジンガーZ対暗黒大将軍

古代より地底近くに潜伏しながら世界侵略の機をうかがっていたミケーネ帝国がついに野望を実行に移し始めた。暗黒大将軍に率いられた七つの軍団が各国の都市を襲撃。甲児はマジンガーZで発進するが、圧倒的なパワーの戦闘獣たちを相手になすすべもなく破壊されてしまう。その時、甲児の眼前に新たな勇者が出現した……。「マジンガーZ」の劇場映画第2弾。新ヒーロー、グレートマジンガーの登場を、何とテレビシリーズの3ヵ月も先行して描き、本作で劇場初監督を務めた西沢信孝が手腕を発揮、重厚でツボを心得た画面を作り出すことに成功している。なお、テレビ版キャストが未決定だった時期に製作されたこの作品では、剣鉄也役をデビルマンの田中亮一が演じている。

昭和49年7月25日公開　上映時間43分
原作／永井豪とダイナミックプロ　製作／登石雋一　企画／有賀健、旗野義文　脚本／高久進　演出／西沢信孝　作画監督／角田紘一　原画／奥山玲子、森英樹、木野達児、金山通弘、小田克也、阿部隆、小松原一男、森下圭介、小泉謙三ほか　美術監督／辻忠直　背景／下川忠海、勝又激ほか　音楽／渡辺宙明　製作／東映動画

GREAT MAZINGER vs GETTER ROBOT

グレートマジンガー対ゲッターロボ

あらゆる金属を食べて無限に成長を続ける宇宙怪獣ギルギルガンが出現。ゲッターチームは怪獣を操る謎の円盤を追い、グレートマジンガーは怪獣に立ち向かうものの、どちらも力及ばず、撤退を余儀なくされてしまう。強力な宇宙からの侵略者を倒すため、兜・早乙女両博士は2大ロボットによる共同作戦を計画する。永井豪氏と石川賢氏の2大ヒーローを競演させた劇場作品。原作掲載権を持つ出版社も、講談社と小学館それぞれに分かれているため、本作に限り2社の提携が行われた。監督は「グレート」班の明比正行、作画監督は「ゲッター」班の小松原一男が担当。両テレビシリーズのストーリーからは完全に独立した形で登場した怪獣ギルギルガンは、デザインも個性的で、三段階の形状に成長変化する設定など映画的な見せ場も工夫された敵役としてファンの人気も高い。

昭和50年3月21日公開　上映時間30分
原作／永井豪、石川賢とダイナミックプロ　製作／今田智憲　企画／有賀健、横山賢二　脚本／藤川圭介　演出／明比正行　作画監督／小松原一男　原画／森利夫、富永貞義　美術／福本智雄　背景／勝又激、沼井信明、阿部泰三郎　音楽／渡辺宙明、菊池俊輔　製作／東映動画

GREAT MAZINGER vs GETTER ROBOT G
CRUSH IN THE AIR

グレートマジンガー対ゲッターロボG 空中大激突

謎の宇宙船が早乙女研究所を急襲、ムサシは空魔獣グランゲンとの戦いで無残な死を遂げてしまう。続いて、宇宙船を追って羽田空港へと向かったビューナスA、グレートマジンガーもまた結合獣ボング、光波獣ピグドロンの前に苦戦を強いられる。だが、そこへ新メンバーのベンケイとともにゲッターロボGが出現。さらにグレートの新兵器グレートブースターも到着し、両チームの逆襲が開始された。「グレートマジンガー対ゲッターロボ」の続編。ムサシの死と研究所の破滅からゲッターロボGの出撃へといっきに連なるストーリーは、先行して放映されたテレビ版とは異なるドラマチックな展開となった。一方、グレートブースターの登場はテレビ版に先がけたものとなっている。演出の明比正行、作画監督の小松原一男、美術の福本智雄などメインスタッフは前作とほぼ同じ顔ぶれ。

昭和50年7月26日公開　上映時間25分
原作／永井豪、石川賢とダイナミックプロ　製作／今田智憲　企画／有賀健、横山賢二　脚本／藤川桂介　演出／明比正行　作画監督／小松原一男　原画／友永和秀、葛岡博、森利夫　美術／福本智雄　背景／阿部泰三郎、佐藤正行、沼井信朗、鳥本武　音楽／渡辺宙明、菊池俊輔　製作／東映動画

UFO ROBOT GRENDIZER vs GREAT MAZINGER

UFOロボ グレンダイザー対グレートマジンガー

ベガ大王の親衛隊長バレンドスの宇宙船が地球へと飛来。宇門大介に心配をかけまいと単身TFOで出撃する兜甲児だが、不覚にも円盤獣ジンジンに拿捕され、バレンドスにグレートマジンガーの存在を知られてしまった。早速、ロボット博物館からグレートを奪ったバレンドスは、自らそれを操縦してグレンダイザーを襲撃するが……。"ヒーロー対決シリーズ"の中で、本当にヒーローロボット同士の対決がビジュアルとして描かれた異色の劇場作品。全体のストーリーとしては「グレンダイザー」のうちの1エピソードに数えられる内容になっている。劇場版初演出を務めた葛西治の豪快な画面構成、小松原一男、友永和秀ら作画陣によるメリハリの効いた動きの魅力に加え、ロボット博物館という奇抜な設定、グレートの意外な弱点発覚など、マニアックな楽しさが散りばめられた好編。

昭和51年3月20日公開　上映時間27分
原作／永井豪とダイナミックプロ　製作／今田智憲　企画／有賀健、勝田稔男　脚本／藤川圭介　演出／葛西治　作画監督／小松原一男　原画／友永和秀、湖川滋、木下勇喜　美術／伊藤岩光　背景／松本健治、海老沢一男、原田謙一、野崎俊郎　音楽／菊池俊輔、渡辺忠明　製作／東映動画

GRENDIZER GETTER ROBOT G GREAT MAZINGER AGAINST THE HUGE SEA MONSTER

昭和51年7月18日公開　上映時間30分
原作／永井豪とダイナミックプロ　製作／今田智憲　企画／有賀健、小田克也　脚本／高久進　演出／明比正行　作画監督／木野達児　原画／阿部隆、小川明弘、金山通弘、角田紘一、広田全、的場茂夫、森英樹、湖川滋ほか　美術監督／浦田又治　背景／川井憲、高野正道、佐藤正行ほか　音楽／菊池俊輔、渡辺宙明　製作／東映動画

グレンダイザー・ゲッターロボG・グレートマジンガー 決戦!大海獣

太古に死滅したと思われていた海獣ドラゴノサウルスが巨大な姿となって出現、石油コンビナートやタンカーを襲撃する事件が発生した。国防軍の再三の攻撃もまったく歯が立たず、ついに強力なロボット軍団が編成される。グレンダイザー、ゲッターロボG、グレートマジンガー、ダブルスペイザー、ダイアナンA、ビューナスA——。ところが、単独で出撃したボスボロットが過ってドラゴノサウルスに飲み込まれてしまった……。劇場用「マジンガー」シリーズ最終作。3大ヒーローロボットにレディロボットまでが競演するオールスター編で、本作のみの主題歌も作られている。それまで原画として同シリーズに参加してきた木野達児が初の劇場版作画監督を担当。新カメラシステムの導入により、さまざまに工夫された映像処理が登場しているのも見どころのひとつ。

THE WAR OF SPACESHIPS

宇宙円盤大戦争

故郷のフリード星をヤーバン星に滅ぼされ、円盤とロボットの合体メカ・ガッタイガーとともに地球へと移り住んだデュークフリード。そこへ、ヤーバン大王の娘テロンナが円盤部隊とともに飛来、ガッタイガーの引渡しを要求する。だが、父の命のままに非情な作戦を遂行しながらも、彼女の心中は揺らぎつづける。ふたりは幼なじみであり、テロンナは今でもデュークを愛していたのだ……。UFOブームの要素を加味した巨大ロボットものというコンセプトで、東映動画が企画、製作したアニメ。上原正三の原案をもとに、永井豪氏とダイナミックプロが原作とキャラクター原案を担当。戦場で引き裂かれた男女の悲劇的ラブロマンスを、巨匠・芹川有吾が見事に映像化した。子どもたちにも評判だった本作は、同年秋からのテレビシリーズ「UFOロボグレンダイザー」へと発展していった。

昭和50年7月26日公開　上映時間30分
原案／サークル・バーン　原作／永井豪とダイナミックプロ
製作／今田智憲　企画／有賀健、勝田稔男　脚本／上原正三
演出／芹川有吾　作画監督／飯野皓　原画／奥山玲子、阿部隆、
木野達児、的場茂夫、金山通弘ほか　美術設定／辻忠直　美術／内川文広　背景／勝又激、襟立知子ほか　音楽／阿部俊輔
製作／東映動画

小山田圭吾

「永井豪は2本立てである」

**僕の背中に生えてきた黒く大きな翼、とデビルウィングをつけて歌う小山田クン。
永井豪ファンを公言するミュージシャンは多いが、永井豪を先生と呼ぶミュージシャンは少ない。
そんな真性永井豪ファンが愛するGO WORLDは、[illegible]と鬼の[illegible]のなかにあった。**

PROFILE　1969年1月27日生。
1989年フリッパーズギターのリーダーとしてデビュー。
1993年「Cornellus(コーネリアス)」としてソロ活動を開始。
今年8月には最新アルバム「FANTASMA」をリリース。

——小山田さんの入口は『へんちんポコイダー』だというのを、どこかで拝見したことがあるんですけど。

小山田　ポコイダーだったかなあ。『おなり～っボロッ殿だい』って漫画ありませんでしたっけ。割とエログロな感じの。

——ああ、ありましたね。

小山田　漫画はたぶん、それかもしれない。ポコイダーとかボロッ殿とか……そんなシリーズありましたよね。

——でもあの漫画、永井さんじゃないんですよね。

小山田　そうだっけ？

——たしか真樹村正さんがボスのモチーフだけ使って描いていたと思います。

小山田　そうかあ。じゃあポコイダーになるのかな。でも永井豪先生を意識して読んでたんじゃないんですよね、その当時は。今になって考えてみれば、という程度で。

——じゃあ、永井豪、の名前を意識してご覧になったのは……。

小山田　マジンガーZかな、テレビの。漫画はあとになって見ました。

——漫画は、内容がテレビとあんまり違うんで驚きませんでした？

小山田　バンッて切られると血みたいなのがブシュウッって出るようなシーンありましたよね。たぶんオイルって設定なんでしょうけど、あれ血に見えるじゃないですか。ロボットなのになんかスゲエなって、あれがメチャメチャ印象的だな。

——血が出るロボットは、ダイナミックプロのお家芸ですよね。石川賢さんのゲッターロボでも、オイルが血に見えるシーンがありますし。

小山田　テレビと全然違うっていたらデビルマンでしょう。

——デビルマンはやっぱり漫画のイメージが強いですか。

小山田　メチャメチャ衝撃的でしたね。不動明がデビルマンにとりつかれるシーンが印象的で。ヒッピーみたいな人たちが、ドラム叩いたり踊り狂ったりする絵、あれが気に入ってた。あと、サイコジェニーがすごい怖かったのを覚えてます。

——あの体の真ん中に顔がある。

小山田　名前もカッコイイですよね、サイコジェニー。

——どちらかというと、ギャグやエッチより、そっち系が好きだったんですか。

小山田　そうですね。永井先生の作品ではSF方面の方が好きです。短編の『鬼』とか。手塚先生っぽいのがあったりして。結構読んでました。

——永井さん、昔から手塚先生はずっと好きで、影響もかなり受けてるようですよ。

小山田　ボクも手塚先生は好きでした。あと藤子不二雄先生かな。ドラえもん大好きだったし。永井先生と、僕のベスト3はその3人ですね。でも水木しげる先生も好きだしなあ、石ノ森先生も……でも石ノ森先生はテレビの印象が強いけど。

——ギャグ方面はほとんど読んでないですか。

小山田　オモライくんとかは読んでるんですけどね。ギャグって微妙な部分があって、タイミングも大切じゃないですか。時代性とか。

——でも、永井さんのギャグ漫画って、小さい頃はただエッチでよかったんですけど、意味が分かるようになるとまたおもしろい、みたいな。

小山田　うん、ギャグやエッチもあって永井豪だよね、やっぱそっちもあるからいいんだよ、バッチリ2本立てなんだよね。それも魅力なんですよ。

——『けっこう仮面』にでてくる、よその先生のキャラをパロディにしちゃうとかって、もとのキャラ知ってないと笑えないじゃないですか。

小山田　そういうスターシステムの使い方はすごく上手ですよね。バイオレンスジャックってほんと、まんまそうじゃないですか。一番すごいと思ったのが、マジンガーZが盲目の黒人空手家になってでてくるヤツ。

——『鉄(くろがね)の城編』ですか。Zがジム・マジンガって名前ででてくる。

小山田　兜甲児がまだ子どもで、Zに肩車されて「右だ、ハイキック!!」とか指示出してZがスパーンッてやっつけるっていうあの設定。あれはマジで感動した。えん魔くんもハニーも、みんなでてくるでしょう、バイオレンスジャックって。すごい。2種類あるんですよね、ストーリーが。

——ええ。講談社刊と日本文芸社刊と。

小山田　最後ってデビルマンになるんでしたっけ。

——そうですね。

小山田　やっぱデビルマンだね。

——前のアルバム(69 96)出されたときに、背中に羽根付けて歌ってましたよね。やっぱりあれ、デビルウィングなんですか。

小山田　全然デビルウィングです。造ったんですよ、デビルウィング。ディパックに羽根入れといてシャッて、ひもを引くとバッて開くという。くだらない(笑)。

——まだどこかにあるんですか、それ。

小山田　ありますよ、きっと。

——時々思い出して自宅でシャッとか……。

小山田　ないです、それは(笑)。

——羽根はないかもしれませんが、ほかの永井豪ものは持ってます？

小山田　フィギュアは持ってます。デビルマンの"怒りの前進"ってやつ。漫画は、読むと人にあげちゃう性格なんで、あまり手元には残っていないんですよ。あ、でも永井先生にサインいただいた本は大事に持ってます。

——永井さんに会われたんですか。

小山田　某雑誌の自分の連載で、好きな人に会わしてくれるっていわれたんで、じゃあ永井先生に会いたいって。

——どんな方でした？　永井さんは。

小山田　すごくスピリチュアルな人ですね。自分の前世とか来世が見えちゃうときがあるんですって。先々のビジョンが見えるから、それに動かされる、みたいなことをおっしゃってました。だから子ども向けの漫画も描くけど、SFみたいな作品も「これを描かなきゃいけない」っていう使命感みたいなもので描くことがあるって。神秘の方です、永井先生は。

CHARACTERS

left デビルマンTシャツ COSTUME PARADAISE
center キューティーハニーTシャツ TOHMEN
right [illegible]Tシャツ COSTUME PARADAISE

left: デビルマンラグランシャツ NETWORK
center: デビルマンTシャツ COSTUME PARADAISE
right: デビルマンTシャツ ART STORM

デビルマンぬいぐるみ BANPRESTO

①デビルマンTシャツ　COSTUME PARADAISE　②デビルマンTシャツ　COSTUME PARADAISE　③デビルマンTシャツ　COSTUME PARADAISE　④デビルマンTシャツ　NETWORK　⑤デビルマン七分丈シャツ　NETWORK　⑥デビルマンTシャツ　NETWORK　⑦デビルマンTシャツ　BANPRESTO　⑧デビルマンTシャツ　NETWORK　⑨デビルマンTシャツ　NETWORK　⑩デビルマンレディTシャツ　講談社週刊モーニング　⑪デビルマンレディTシャツ　講談社週[illegible]モーニング　⑫ハレンチ学[illegible]Tシャツ　ART STORM　⑬オモライくんTシャツ　ART STORM　⑭キューティーハニーTシャツ　[illegible]　⑮キューティーハニーTシャツ　TOHMEN　⑯キューティーハニーTシャツ　ART [illegible]TORM　⑰キューティーハニーTシャツ　ART STORM　⑱キューティーハニーTシャツ　TOHMEN　⑲キューティーハニーTシャツ　ART STORM　⑳デビルマンTシャツ　BANPRESTO

DYNAMIC OVERSEA GO GO-WEST 海外の永井豪

解説 顔のない巨人 永井豪 フェデリコ・コルビ ダイナミック企画

ヨーロッパで彼ほどメジャーで無名な日本人もいない。
グレンダイザーが100％の視聴率をとりながら作者としての知名度はゼロに近い。永井豪…。
大きな足跡だけを残し、巨人は伝説となった。

『(ヨーロッパで)７月は、新番組を始めるのに最悪の時期だが、７月３日から始まった『ゴルドラック』は特別なのだ。放送開始の１ヶ月後、フランスの全ての子どもたちはそのゴルドラックを最強のヒーローに選び、２ヶ月経ったら、『バットマン』や、『ターザン』など、前世代のヒーローたちは子供の記憶から消えてしまった。３ヶ月目、ゴルドラックの視聴率が１００％に達した。裏番組はもちろん０％。４ヶ月目は、ゴルドラックと両親でどちらが好きか、と子どもたちに聞いたら、全員が「そりゃ、ゴルドラックだろう」と答えるようになった。５ヶ月目は、幸いクリスマスと重なっていたため、フランス中の親はゴルドラック・グッズをプレゼントして子どもたちの[illegible]を取り戻した』

これは、ゴルドラック(=グレンダイザー)を取り上げたフランスの『パリマッチ』誌1979年1月19日号からの引用である。さらには、こうも記されている。

『ゴルドラックの人形(日本ではジャンボマシンダーと呼ばれていた50センチ位のおもちゃ)は、クリスマスの25日前に売り切れ、おもちゃメーカーとのコネがなければ、とんでもない価格のブラックマーケットで買うしかなかった。15年間、子ども番組と商品化権を担当するテレビ局の担当者の話では、こんなに人気が出たキャラクターは初めてだそうである。12月からの1カ月だけで、レコードは40万枚、ポスターは15万枚、コミックが連載されている雑誌は30万部、ステッカーやカードは数百万枚の売上を記録した。(中略)メーカーのマッテル社では、製造が国内の需要に追い付かない上に、イタリアやベルギー、カナダ、スペインでも人気が爆発し、これからは今以上に忙しくなりそうだ。カナダでは、プロフェッショナルリーグのサッカーチームがゴルドラックに改名したほどの人気振りなのだ』

その当時(1978～79)のフランス、イタリア、スペインなどの新聞や雑誌を読んでみたら、必ずこれに似たような内容の記事が載っていたものだ。ひとつだけ違うのは、スペインではグレンダイザーではなく、マジンガーＺに人気が集中しており、ダブルハーケンよりロケットパンチがスペイン中の子どもたちの心を奪ってしまったことくらいか。『マジンガーＺ』は、スペインからさらに南米へと渡っていった。今でも南米コロンビアやヴェネズエラ、アルゼンチンなどにマジンガーのホームページやファンクラブが非常に多い。人気は一向に衰える気配をみせていない。

日本では『新世紀エヴァンゲリオン』やたまごっちが“一部の人たち”の間で人気を集め、成功しているようにも思えるが、ゴルドラックやマジンガーは子供から老人まで、誰もが知っているさらに偉大なキャラクターとして存在していた。それこそ、日本で巻き起こっているさまざまなブームがどんなに大きくとも、それが“一部の人たち”で人気を集めているといわざるを得ないくらいに。今でも20歳以上の人たちの心には、それぞれのゴルドラック物語が刻まれているはずだ。イタリアでは永井豪のロボットアニメはすべて放映され、『鋼鉄ジーグ』から『グレートマジンガー』まで、グレンダイザーと同じくらいのヒーローとして、子どもたちの人気を集めていた。

グレンダイザーやマジンガーが貴重な記憶の一片であるにもかかわらず、それらの国々でも「永井豪」の名前は、驚くほど知られていない。あれだけの作品を輩出した原作者が無名に近いのは、謎といっていい。

それはなぜか。なんと永井豪の名前がクレジットされている作品が、ほとんどなかったのだ。これはグレンダイザーに限ったことではない。『キャンディキャンディ』や『キャプテンハーロック』など、ほかの日本人作家が描いた作品も、アニメ版の製作会社である東映動画が独自に企画したキャラクターとして紹介され（もっともこれは事実誤認が生んだ悲劇であり、東映動画が情報操作したわけでは決してないのだが)、インタビューや特集記事では同社が「輸出を意識して企画段階から白人に見えるようなキャラクターを描いた」とか「動画はすべてコンピュータで処理している」など、根拠のない情報がいくつか公表されたりもしていた。ちなみに「輸出を意識したデザイン」と聞いて「日本人はヨーロッパの文化侵略を図っている」、または「コンピュータで作られたアニメを子供にみせたら、子供たちも機械のようになってしまう」などと日本のアニメに不信感を抱くヨーロッパ人が増え、最終的にはこのような発言が日本アニメ排斥運動に発展するという、皮肉な結果を生んだ。

ヨーロッパでの永井豪は作品ばかりが先行しているが、アメリカでは漫画家、イラストレーターとして高く評価されている。アメリカのコミック誌に描き下ろし作品を掲載した日本人は、おそらく永井豪が初めてではないだろうか。ハリウッドの某大物監督も永井豪の大ファンで、永井豪作品から得たヒントをいくつかの映画に活用していると伝え聞く。

これだけ超人気キャラクターを次々と描きながらも、名前がほとんど知られていない作家は、他にはあまり例をみない。ミッキーマウスの作者を知らない人はいないだろう。生みだしたキャラクターの浸透度が同じことを考えれば、永井豪の名前が出てこないのは不思議というより他ない。'98年は「グレンダイザー・ヨーロッパ上陸20周年」の記念の年にあたる。イベントもヨーロッパ各地で催してゆく予定だ。彼の作品を20年に渡って愛し続けた人たちに、世界一有名な日本人クリエイター・永井豪の名前を覚えて頂きたいと切に願う。

フランス「[illegible]」誌編[illegible]長：[illegible]インタビュー

「私は『ゴルドラック』以上のアニメを知らない」

フランスにおける『ゴルドラック』の人気は、おそらく日本の方々には理解しがたいものだと思います。単なる人気番組の枠を越えて社会現象になりました。従来のテレビアニメは小さい子どもを意識して、あまり刺激がなかったのです。そんな状況を完全に打破したのが『ゴルドラック』でした。主人公のデュークフリードは決して闘いを望まないし、好みません。しかし周りの人たちを守るためには、彼が闘うしかないのです。その姿に子どもたちはカリスマ性を覚えたのでしょう。当時、フランスの子どもたちは誰もがデュークフリードに憧れていました。ヒーローにはいろんなタイプがあると思いますが、デュークフリードはフランス人にとって、確実にヒーローのひとりです。

『ゴルドラック』が成功したために、多くの日本のアニメが紹介されました。『宇宙海賊キャプテン・ハーロック』、『キャンディ・キャンディ』、『キャプテン・フューチャー』(仏題キャプテン・フランム)などは大変人気があったと記憶しています。その後『聖闘士星矢』や『北斗の拳』、『らんま1／2』、『美少女戦士セーラームーン』などが人気キャラクターになりましたが、これもすべて『ゴルドラック』成功の前例がなければ、フランスで紹介されることはなかったでしょう。

こうした日本のアニメを好む熱心なマニアも多くいます。日本と同じように中心は20～30代の男性。ただそのマニアの一般的な評判があまりよくないのも、残念ながら事実です。「大人のくせにまだアニメを見てる」とか、「現実感がない」などといわれています。しかし『ゴルドラック』だけはちょっと状況が違うのです。マニアだけのものではなく、国民のヒーローとして受け入れられているので、現在でもファンは多くいます。

日本のアニメを放映する場合、BGMやストーリーに若干の手直しを加えることがあります。しかし『ゴルドラック』はストーリーもそのまま、BGMも菊池俊輔氏のオリジナルが使われています。オープニングテーマも、歌詞をフランス語に翻訳されただけ。だから日本のファンとほぼ同じものを見ていたわけです。ひとつだけ違っていたのはキャラクターの名前でした。それぞれ星か星座の名前が付けられていて、兜甲児は「アルコール」、団兵衛が「リゲル」になったりして。

グッズも数多く販売されました。たとえば文房具や出版物、アパレル、日本でいうところの超合金やジャンボマシンダーもありましたよ。かなり膨大な数の商品展開なので、売上げや種類はわかりませんが、視聴率なら分かります。『ゴルドラック』は最高視聴率100％を誇る最初で、恐らく最後のテレビ番組でしょう。平均視聴率も70％を越えていたと聞いています。今では信じられないような数字です。これほどまでにダイナミックで、アクションも感動もあるアニメを、私は知りません。

PROFILE [illegible]

主要作品海外放送一覧

タイトル	国名	放送年
マジンガーZ	スペイン	1977
	[illegible]	1978
	中南米	1978
	イタリア	1980
	中近東	1982
	イギリス	1983
	アメリカ	1984
	フランス	1985
グレートマジンガー	イタリア	1979
	[illegible]	1987
グレンダイザー	フランス	1978
	イタリア	1978
	アメリカ	1979
	西ドイツ	1979
	中近東	1979
	中南米	1984
	ギリシャ・キプロス	1985
鋼鉄ジーグ	イタリア	1978
	香港	1981
	フランス	1985
デビルマン	香港	1978
	イタリア	1983
キューティーハニー	香港	1978
	フランス	1988
マシンハヤブサ	イタリア	1978
	フランス	1983
	ギリシャ	1984

コミック海外販売

タイトル	巻数	国名/出版社	発行年度
メモリーグラス	全2巻	台湾 東立出版	[illegible]
ドラグ恐竜剣	全1巻	台湾 東立出版	96
	全1巻	香港 東立出版	96
勇士ダンダン	全1巻	台湾 東立出版	96
UFOロボ グレンダイザー	全2巻	香港 自由人出版	93
	全1巻	イタリア Dynamic Italia	97
	全1巻	フランス Dynamic Visions	97
グレートマジンガー	全7巻	イタリア グラナタプレス	92
	全2巻	[illegible] 自由人出版	93
デビルマン	全2巻	[illegible] キング洋行	82
	全14巻	イタリア グラナタプレス	91
	全3巻	[illegible] 自由人出版	93
	全3巻	イタリア Dynamic Italia	96
	全3巻	フランス Dynamic Visions	97
キューティーハニー	全1巻	香港 自由人出版	[illegible]
マジンガーZ	全7巻	香港 キング洋行	82
	全12巻	イタリア グラナタプレス	91
	全4巻	[illegible] 自由人出版	93
マジンガー	全1巻	アメリカ First Publishing Inc	88
魔王ダンテ	全2巻	イタリア グラナタプレス	91
鋼鉄ジーグ	全1巻	香港 キング洋行	82

OVA海外販売

国名	タイトル	巻数	年代	メーカー
イタリア	カーマスートラ	1巻	96	YAMATO
	新キューティーハニー	[illegible]巻	96~97	ダイナミックイタリア
	手天童子	2巻	-	-
	花平バズーカ	1巻	-	-
	デビルマン	2巻	-	-
	マジンガー劇場版	5巻	-	-
	CBキャラ	3巻	-	-
	けっこう仮面	[illegible]巻	-	-
	おいら女蛮	1巻	-	-
	黒の獅士	1巻	-	-
フランス	新キューティーハニー	4巻	96~97	ダイナミックビジョンズ
	手天童子	2巻	-	-
	デビルマン	2巻	-	-
	マジンガー劇場版	5巻	-	-
	CBキャラ	5巻	-	-
	けっこう仮面	3巻	-	-
	おいら女蛮	2巻	-	-
	黒の獅士	1巻	-	-
スペイン	バイオレンスジャック	3巻	95	マンガエンターテインメント
	デビルマン	2巻	-	-
	新キューティーハニー	4巻	96~97	ダイナミックイタリア
	手天童子	2巻	-	-
ドイツ	バイオレンスジャック	[illegible]	[illegible]	マンガエンターテインメント
	デビルマン	2巻	96	-
	新キューティーハニー	4巻	96~97	ダイナミックドイッチェランド
	手天童子	2巻	-	-
NAFTA	けっこう仮面	[illegible]巻	95	マンガエンターテインメント
	新キューティーハニー	4巻	-	-
	[illegible]ばしり一家	1巻	-	-
	バイオレンスジャック	3巻	-	-
	デビルマン	2巻	-	-
	花平バズーカ	1巻	96	AD Visions Inc
	手天童子	[illegible]巻	-	-
イギリス	バイオレンスジャック	3巻	95	マンガエンターテインメント
	デビルマン	2巻	-	-
	カーマスートラ	1巻	96	Western Connection
オーストラリア	バイオレンスジャック	3巻	95	マンガエンターテインメント
	デビルマン	2巻	-	-

『鬼』が掲載された『epic』

米誌に描きおろした『鬼』のトビラ

ゴルドラックが『MATCH』表紙に

海外出版社向『デビルマン』

戸川　純

「永井豪はバランスである」

対極をなすふたつの事柄。たとえば善と悪。あるいは理性と野性。戸川純は二元論的なものの融合が永井豪の魅力であり、みずからのテーマでもあるという。女優であり、シンガーでもある彼女の確固たるバランス感覚は、『デビルマン』で培われていった──。

──戸川さんは小さい頃から本が好きだったとお聞きしたんですが、豪さんのマンガではどの辺りから読まれているんですか？

戸川　昔からメカものにはいってなくて。

──マジンガーとか、ですか。

戸川　好きではあったんだけどね。でも愛、と呼べるにいたるのは、もっと生身っぽいやつ。私は高度成長期の人間なんで、子供の頃は『ハレンチ学園』とか。

──少年誌も読まれてたんですか。

戸川　少女マンガも好きだったけど、昔の少女マンガってバレーかギャグか、あとはお母さんがヘビ（笑）みたいな、その3つくらいしかパターンがなくって。男の子の雑誌の方がバリエーションあったんで、少年ジャンプと少年マガジンは必ず読んでた、ずっと。小学校の時にね、オモチャの金庫を買ったのよ。身の回りの大事なモノとか入れて遊んでたんだけど、最後にそれをタイムカプセルにしようと思ってね。そこに万博の入場券と『ハレンチ学園』の表紙を破って入れておいたのを、なぜかすごくよく覚えてる。

──少年誌であっても生身の、それも主人公が女の子のマンガの方が好きだったんですか。

戸川　『キューティーハニー』とかね。ハニーっていろんな人になれるじゃない。小さな頃から私は女優になりたかったんだけど、それはやっぱりいろんな人になりたかったのね。だからハニーの影響もあるのかな、とか。

──女優をやりたい、っていうのは、変身願望の現れでもあったと。

戸川　それは自覚してたんだけど、一番影響を受けたのは、実は根の悪い女じゃないかって。

──ある意味、強さの象徴的な部分がありますよね、悪役って。

戸川　強さと、色気も大事だと思うのね。私、アメコミって好きなんだけど、バットマンとかには出てくるじゃない、強くて悪くてキレイなのが。キャットウーマンとか。だから『あばしり一家』も好き。菊の助って。もともと髪が短いしケンカも強い、怒ると恐いといわれつつ、恥じらいもあるのね。『ハレンチ学園』の十兵衛もスカートめくられるとキャーッて恥ずかしがるでしょう。男の強さと女の色気と、いいところだけ合わせたような、そういうのに惹かれるかな。

──永井さんのマンガって、あばしりとかハニーのような全部さらけ出して動き回るようなタイプと、『まぼろしパンティ』とか『けっこう仮面』のような匿名性の高いヒロインと、両極端にいるじゃないですか。戸川さんはどちらかというと、顔は隠さないヒロインの方が好き？

戸川　そう。顔を出してる方がシンパシーを感じる。匿名性の高いものって顔バレしてないだけで強みがあるっていうか。顔を出して裸になってるという、責任。

──覆面は責任放棄じゃないかと。

戸川　いや、まるっきりの裸よりはエプロン一枚つけてる方が、男の人にとっては色気を感じるのと同じ意味あいのものだとは思うんですけどね、あのマスクは。ただ、私だってかなり恥ずかしいことをやってきてるけど、顔出してるんだぞ、みたいな。それなりにリスク背負ってるの、ってところで。

──シンパシーは感じられないかな、と。

戸川　むしろ、あばしりに出てくる法印大子。ああいう人のほうが好き。

──３メートルある吉三の同級生、あれで小学生なんですよね。

戸川　どこからも誰からも見られてしまうわけで。顔は出してるし。それでも頬を赤らめたりするっていう。だから私もマスコミという巨大なメディアにいても、恥ずかしさを失ったらいけないんだなって。大子には学んだわけですよ。

──すごく深いですよね。

戸川　とまあ、こじつけてみたんですけどね、今(笑)。自分でも、なんであの人の味方をするんだろうと思いながら。

──男のキャラクターはどうでしょう、どんなタイプが好きでした？

戸川　永井豪の作品に出てくる男の人は、感情がある人が。人間的な怒りとか。

──そうするとデビルマンになりますかね。

戸川　名前が何とかマンて多いじゃないですか。昔からマンのつくものって、マンじゃない部分ばかり伝わってくるんだけど、デビルマンは両方あるなっていう、デビルとマンの。マンの部分もすごく感じさせる、人間的な部分を。

──悪魔と人間がひとつの個体のなかで両立してるという。

戸川　そもそも、理性のタガが吹っ飛ぶということの意味を、私らの世代はデビルマンで覚えたね。不動明がアモンに乗っ取られるためにランチキパーティーをするシーンとか、近所の人たちが牧村家に悪魔狩りだ、とかいって襲ってくるシーンとか、描写がものすごくリアルだったでしょう。理性の裏側にはこんなものがあるんだ、って初めて知ったのがデビルマンじゃないか、とか。理性の対局に本能や野性というものが存在していて、しかもその両方が同居しているってところに、観念的な影響をすごく受けてる。二元論的な構造が融合してしまう世界。それが今の私のバランス感覚になってるんで。相反する二つのものを、常に自分の中に取り入れようとしてるんですよ。たとえば強さとかわいさ？　みたいなね。ロリータ趣味って嫌いじゃないんだけど、でもこういうカワイイ服着るときは、ペーパータトゥとかリストバンドでバランスとってみたりね。まぁ、客観的にわかっててこんな格好をしてるのよ、って証でもあるんだけど。

──なにかあったら、自分のシーソーに乗せて考えてみる、と。

戸川　そうそうそう。今やってる音楽でもそうなんだけど、テクノに、いかにも肉声って声をのせてみるとか。相反するものの融合が、私にとって一貫した永遠のテーマなんですよ。それを教えて頂いたのが、デビルマンじゃないかなあと。おぼろげに思うわけです。

PROFILE　1961年3月31日生。
小学3年生から子役として芸能界へ登場。1982年のTOTOウォシュレットCM出演を機に異彩を放つ実力派としてドラマ、映画、舞台と幅広く活躍。音楽活動では自身のバンド、ヤプーズも健在。熱心な支持者を得ている。

C O M I C　W O R K

COMIC WORK

Go Nagai is a cartoonist who has produced more than 160 titles since his debut in 1969.
The total number of his comic books released by different publisers is now 580, which proves his popularity.
Here, we'd like to introduce his glorious work of 30 years through the covers of his comic books.

アラーくん

講談社・ＫＣ
1969.7.19

アラーくん

朝日ソノラマ・サンコミックス
1974.8.22

パンジーちゃん

若木書房・コミックメイト
1969.7.25

馬子っこきん太

秋田書店・サンデーコミックス
1969.7.30

馬子っこきん太 全２巻

朝日ソノラマ・サンコミックス
1972.10.9

1972.11.2

ハレンチ学園 全13巻 集英社・ＪＣ

1969.11.30

1969.11.30

1970.1.31

1970.5.31

1970.8.31

1970.9.30

1970.12.31

1971.2.28

1971.4.30

1972.6.30

1972.8.31

1972.12.31

1974.12.31

ハレンチ学園 全７巻 講談社・ＫＣＳＰ

1986.3.6

1986.4.5

1986.5.6

1986.6.6

1986.7.6

1986.8.6

1986.9.6

あばしり一家 全15巻 秋田書店・CC

1970.7.20 1970.11.10 1971.3.10 1971.10.5 1972.4.10 1972.5.10 1972.7.10 1972.8.10

1972.7.10 1972.8.10 1972.10.15 1972.11.25 1973.1.25 1973.12.10 1973.12.15

あばしり一家 全4巻 秋田書店・AC

1985.12.20 1986.5.10 1986.9.20 1987.1.10

キッカイくん 全5巻 講談社・KC

1970.8.10 1970.8.10 1970.12.10 1971.2.10 1971.4.10

キッカイくん 全6巻 朝日ソノラマ・サンコミックス

1973.10.3 1973.10.3 1973.10.16

1973.10.16 1973.11.5 1973.11.5

キッカイくん 全3巻 朝日ソノラマ・SWC

1987.6.20 1987.7.20 1987.8.20

COMIC WORK

Go Nagai [illegible] a cartoonist who [illegible] produced more than 160 titles since his debut in 1969. The total number of his comic books released by different publishers is [illegible] 580, which proves his popularity. Here, we'd like to introduce his glorious work of [illegible] years through the covers of his comic books.

ヤダモン

若木書房・コミックメイト
1970.10.10

学園番外地　全２巻

絵・石川[illegible]共作
少年画報社
1970.10.15

1971.7.1

学園番外地　全２巻

絵・石川[illegible]共作
若木書房・コミックメイト
1974.12.25

1975.1.15

スイートちゃん

若木書房・コミックメイト
1970.12.10

じん太郎三度笠

集英社・JC
1971.5.31

ガクエン退屈男

朝日ソノラマ・サンコミックス
1971.10.5

ガクエン退屈男　全３巻

1971.11.30

1972.1.27

ガクエン退屈男　全２巻

ガクエン退屈男

朝日ソノラマ・SWC
1985.7.30

ガクエン退屈男

1985.8.20

ガクエン退屈男　全２巻

角川書店・YCS
1990.11.7

1990.12.7

鬼 -2889年の反乱-

朝日ソノラマ・SMC
1971.10.25

鬼 -2889年の反乱-

朝日ソノラマ・改訂版
1979.1.30

まろ　全３巻　若木書房・コミックメイト

1972.2.15

1972.3.25

1972.4.25

まろ

勁文社・コミックス傑作[illegible]
1989.6.28

ズバ蛮　全３巻　朝日ソノラマ・サンコミックス

1972.5.06

1972.6.23

1972.8.15

ズバ蛮　全２巻　朝日ソノラマ・SWC

ズバ蛮

1985.11.20

ズバ蛮

1985.11.30

デビルマン 全5巻 [illegible]社・KC

1972.10.20

1972.10.20

1973.4.18

1973.7.10

1973.9.10

デビルマン 全3巻 講談社・KCSP

1983.7.6

1983.7.6

1983.8.6

デビルマン 全5巻 講談社・[illegible]華愛[illegible]版

1987.9.17

1987.9.17

1987.10.17

1987.11.17

1987.12.17

新デビルマン

講談社・KC
1981.12.18

新デビルマン

講談社・KCSP
1987.1.7

あにまるケダマン 全3巻 朝日ソノラマ・サンコミックス

1973.1.30

1973.2.15

1973.3.30

A MEMORY

読者代表だった、ボンクラ編集者でーす

清水憲[illegible]

きゃしゃで公家顔の永井豪さんを見知ったのは、30年以上前の石森プロでした。彼はチーフのアシスタントとして、一心不乱に背景処理に打ち込んでいたと記憶していますが、その彼が、週刊少年マガジンから、月刊ぼくらに異動した私の目の前に現れたのは、それから1年足らず後のことでした。私はマンガ編集の成りたて、永井さんはマンガ家の卵ということもあり、同年代の気安さもあって。読み切りギャグ「目明かしポリ吉」の打合せは誠にスムースに進みました。編集後の人気も上々で、ただちに次回作の検討に入るはずだったのですが、当時、月刊ぼくらは、週刊誌化を目指してばたばたとしている最中でした。この雑誌は、昭和44年秋に週刊ぼくらマガジンとして。再発足し、昭和46年6月に休刊するという、短命に終わりました。週刊ぼくらマガジンに、惜別の情を持ちつつ、古巣の週刊少年マガジンにもどったころには、永井豪さんはすでに「ハレンチ学園」で、巨大な存在になっていたと記憶しています。

「デビルマン」を引っさげて、永井豪さんが週刊少年マガジンに登場し、その担当を拝命したのは、担当者としては僥倖というべきでしょう。毎週原稿を拝見するときには、読者と同じく、ドキドキしたのを覚えています。同時に、この大きな作品のすべてが、永井さんのなかで完成していることもわかりました。内容に関わる打ち合わせはほとんどなく。細部にいたるイメージまで、永井さんの頭のなかで、発酵し熟成されていたのです。私は、編集者というよりは、原稿を真っ先に読める読者代表ともいうべき存在でしたが、充分に満足しておりました。シレーヌの持つ叙情性にホントにシビレていたのですから。

永井先生、ありがとうございました。お礼を申し上げると同時に、この時代（どこかおかしくてあやしい）を打ち抜く、新たな永井ワールドの創出をお願いする次第です。

COMIC WORK

Go Nagai is [illegible] cartoonist who has produced [illegible] than 160 titles since [illegible] debut in 1969. The total number of his comic books released by different publishers is [illegible] 580, which proves his popularity. Here, we'd like to introduce his glorious work of 30 years through the covers of his comic books.

マジンガーZ 全4巻 集英社・JC

1973.2.28

1973.4.30

1973.5.31

1973.7.31

マジンガーZ 全5巻 朝日ソノラマ・サンコミックス

1974.4.20

1974.4.20

1974.4.25

1974.5.13

1974.5.13

マジンガーZ 全5巻 講談社・KC

1975.11.25

1975.11.25

1975.11.25

1976.1.16

1976.1.16

マジンガーZ 全5巻 立風書房

誕生篇1980.8.25

怒涛篇1980.8.25

激突篇1980.9.15

死闘篇1980.9.15

完結篇1981.1.10

マジンガーZ 全3巻 朝日ソノラマ・SWC

1985.4.30

1985.5.25

1985.6.25

マジンガーZ

中央公論社・[illegible]版
1989.3.25

MAZINGER

トレヴィル
1992.5.25

マジンガーZ 全3巻 大都社

1996.12.5

1996.12.30

1996.12.30

魔王ダンテ　全3巻　朝日ソノラマ・サンコミックス

1973.6.15

1973.6.20

1973.7.25

魔王ダンテ　全2巻

朝日ソノラマ・SWC　1984.10.15

1984.11.30

魔王ダンテ

中央公論社・愛蔵版　1991.6.5

オモライくん　全2巻

講談社・KC　1973.7.20

1973.7.20

オモライくん　全3巻　朝日ソノラマ・サンコミックス

1978.3.19

1980.3.19

1980.4.21

オモライくん

JICC
1992.7.20

よくふか頭巾

青林堂
現代漫画家自選シリーズ
1973.10.10

キューティーハニー　全2巻

秋田書店・CC　1974.1.30

1974.4.20

キューティーハニー

秋田書店・AC
1985.3.25

キューティーハニー

中央公論社・愛蔵版
1992.7.20

Cutieハニー

扶桑社
1993.11.30

ドロロンえん魔くん　全3巻　若木書房・コミックメイト

1974.4.5

1974.5.5

1974.6.25

ドロロンえん魔くん　全2巻

朝日ソノラマ・SWC
1985.9.20

1985.10.25

ドロロンえん魔くん

中央公論社・愛蔵版
1991.7.20

なんでもちイ子

朝日ソノラマ
サンコミックス
1974.4.10

COMIC COMIC COMIC COMIC COMIC COMIC

COMIC WORK

Go Nagai [illegible] a cartoonist who has produced more than 160 titles since [illegible] debut in 1969. The total number of his comic books released by different publishers [illegible] [illegible] 580, which proves his popularity. Here, we'd [illegible] to introduce his glorious work of 30 years through the [illegible] of his comic books.

バイオレンスジャック 全7巻 講談社・KC

1974.4.20

1974.4.20

1974.8.15

1977.6.20

1977.10.30

1978.5.25

1978.12.15

バイオレンスジャック 全6巻 講談社・KCSP

1984.10.6

1984.10.6

1984.11.6

1984.12.6

1985.1.10

1985.2.6

バイオレンスジャック 全7巻 講談社・[illegible]愛蔵版

1990.7.17

1990.8.17

1990.9.17

1990.10.17

1990.11.17

1990.12.14

1991.1.07

A MEMORY

小さな手の天才

永井先生の担当をさせていただいたのは、23年前、『バイオレンスジャック』の頃です。当時、私は駆け出しの編集者で、先生は週刊誌3本と月刊誌に連載を持つ超売れっ子作家。それなのに、子供のような笑顔で、新米の私に接してくれて。意見の言えるような立場でない私の言葉も真面目に聞いてくださり、今から思えば顔から火が出ます。本当に優しくて素敵な方です。

“画から音が聞こえる”という体験も、その頃、初めて味わいました。先生の仕事場で原稿待ちをしている所に、出来上ったばかりの『バイオレンスジャック』20頁の画稿が届きました。さっそく読み始めたのですが。何故か読むうちにドキドキしてきまして、後半の10数頁めの画稿を開いた時に、ふるえがきました。その頁はジャックの大ゴマなんですが、画からジャックの心臓の音が聞こえました。正確には、聞こえた気がしたと書くべきなのでしょうが、その時、あきらかに音がしました。永井先生の手の平は子供のように小さくて、でもあの手の平から、この画が生まれるんだと感動しました。その時から、私は、永井先生を、心の中で“小さな手の天才”と呼んでいます。

COMIC WORK

Go Nagai is [illegible] cartoonist who [illegible] produced more than 160 titles since his debut in 1969. The total number of his comic books released by different publishers [illegible] [illegible] 580, which proves his popularity. Here, we'd like to introduce his glorious work of [illegible] years through the [illegible] of his comic books.

永井豪傑作選 全3巻 朝日ソノラマ・サンコミックス

1974.11.15

1974.12.2

1974.12.20

おいら女蛮 全7巻 小学館・SSC

1975.3.1

1975.5.1

1975.7.1

1975.9.15

1975.12.15

1976.2.15

1976.4.15

おいら女蛮 全7巻 朝日ソノラマ・サンコミックス

1980.8.30

1980.8.30

1980.9.25

1980.9.25

1980.10.25

1980.10.25

1980.11.20

おいら女蛮 全4巻 朝日ソノラマ・SWC

1987.3.20

1987.3.20

1987.4.20

1987.5.20

グレート・マジンガー 全2巻

講談社・KC 1975.4.8

1975.9.28

グレート・マジンガー 全2巻

立風書房 雷[illegible] 1980.11.25

[illegible] 1980.11.25

グレート・マジンガー 全2巻

大都社 1986.1.20

1986.1.20

グレート・マジンガー

大都社・STC
1989.9.10

グレート・マジンガー

大都社・[illegible]版
1995.11.10

イヤハヤ南友　全7巻　講談社・KC

1975.6.20　1975.6.20　1975.10.30　1975.11.20　1976.2.10　1976.4.15　1976.7.20

イヤハヤ南友　全7巻　双葉社・PC

1980.2.20　1980.4.20　1980.6.20　1980.8.25　1981.2.25　1981.4.9　1981.6.9

イヤハヤ南友　全4巻　朝日ソノラマ・SWC

1986.5.20　1986.6.20　1986.7.18　1986.8.20

けっこう仮面　全5巻　集英社・JC

1976.4.30　1977.1.31　1977.7.31　1978.1.31　1978.7.31

けっこう仮面　全3巻　集英社・JCDX

1990.8.15　1990.10.15　1990.12.9

バクラツ教室

双葉社・PC
1975.9.10

心霊探偵オカルト団　全4巻　原作・高円寺博／絵・石川賢共作　秋田書店・SC

1976.7.25　1976.8.25　1976.9.25　1976.10.20

心霊探偵オカルト団　全2巻

原作・高円寺博／
絵・石川賢共作　大都社
1991.12.10

1991.12.10

COMIC COMIC COMIC COMIC COMIC COMIC

COMIC WORK

Go Nagai [illegible] cartoonist who has produced more than 160 titles since his debut in 1969. The total number of his comic books released by different publishers is now 580, which proves his popularity. Here, we'd [illegible] to introduce his glorious work of 30 years through the covers of his comic books.

へんちんポコイダー　全2巻

講談社・KC　1977.2.25

1977.7.15

混乱列島

原作・筒井康隆
朝日ソノラマ・サンコミックス
1977.3.20

手天童子　全9巻　講談社・KC

1977.4.5

1977.5.10

1977.7.20

1977.8.20

1978.3.25

1978.6.25

1978.7.25

1978.9.20

1978.11.25

手天童子　全5巻　講談社・KCSP

1985.8.6

1985.8.6

1985.9.6

1985.10.5

1985.11.6

手天童子　全6巻　講談社・豪華愛蔵版

1988.9.17

1988.9.17

1988.10.17

1988.11.17

1988.12.17

1989.1.17

無頼・ザ・キッド　全５巻　小学館・MC

1978.1.5　1978.3.5　1978.5.5　1978.8.5　1978.9.5

無頼・ザ・キッド　全３巻　朝日ソノラマ・SWC

1986.2.25　1986.3.25　1986.4.30

無頼・ザ・キッド　全３巻　角川書店・YCS

1991.1.7　1991.2.7　1991.3.7

キングボンバ　全２巻

小学館・てんとう虫コミックス　1978.3.25　1978.7.25

キングボンバ

大都社　1986.2.20

永井豪ＳＦ傑作集　全８巻　講談社・KC

1978.4.20　1978.4.20　1978.6.20　1978.8.5　1978.11.25　1979.4.25　1979.8.4　1983.2.20

A MEMORY

永井豪さんと『ハレンチ学園』

阿部[illegible]人

新進気鋭の永井豪さんが『少年ジャンプ（月２回刊）』に登場したのは、昭和43年７月10日発売の創刊号でした。その少しまえ、永井さんは講談社や秋田書店の雑誌に『目明かしポリ吉』、『馬子っこきん太』など、従来のギャグ漫画には見られない強烈なパンチ力のある作品をひっさげて颯爽とデビューしていました。

この頃、少年誌界の情勢は週刊誌の世を迎えつつあり、集英社も『月刊少年ブック』のほかに週刊誌的なものを模索しはじめていました。ただ人員的に新編集部をつくる余裕がなく。最初は『少年ブック』の編集者が２誌をかけ持ちしていました。

清新な誌面は新しい感覚の漫画から生まれる……という初代編集長の方針で、『少年ジャンプ』の初期に大家は登場していません。まさに永井さんは『少年ジャンプ』にピッタリの漫画家でした。西巣鴨の実家にぶっつけ本番で飛び込み、執筆を快諾してもらえました。そのとき交換した名刺の肩書きには“まんが家ちゃん”とあります。

こうして『ハレンチ学園』は誕生したわけですが、タイトルのハレンチというのは“破廉恥”ではなく。当時、女子中高生の間で流行っていた“すごい”とか“いけてる”という意味を持たせてつけました。しかしアイデア倒れだったようです。

内容は期待以上の出来映えでしたが、オチは悪人の首がすっ飛ぶというギャグ漫画らしからぬもので、永井さんのもう一つの路線—バイオレンス路線が、すでに萌芽しているのではないでしょうか。

『ハレンチ学園』は永井さんの代表作であると同時に、本宮ひろ志さんの『男一匹ガキ大将』とともに二枚看板として、『少年ジャンプ』躍進の原動力ともいうべき漫画史上にのこる大傑作だと思います。

COMIC WORK

Go Nagai [illegible] cartoonist who has produced [illegible] than 160 titles since his debut in 1969. The total number of his comic books released by different publishers is [illegible] 580, which proves his popularity. Here, we'd like to introduce his glorious work of 30 years through the covers of his comic books.

バイオレンスカー炎の鷹　全2巻

秋田書店・SC　1978.5.10

1978.6.30

ハマグリどっせ〜!!　全2巻

双葉社・PC　1978.10.20

1979.2.1

若バカさま　全2巻

秋田書店・SC　1978.11.5

1978.12.30

黒の獅士　全4巻　講談社・KC

1978.12.25

1979.1.20

1979.4.20

1979.7.25

黒の獅士　全4巻　朝日ソノラマ・サンコミックス

1984.5.18

1984.6.18

1984.7.10

1984.6.18

黒の獅士

中央公論社・[illegible]版
1992.1.20

超マン　全2巻

集英社・JC
1979.1.31

1979.6.15

永井豪ギャグ傑作集　全3巻　講談社・KC

1979.5.25

1979.6.25

1979.7.25

シャーヤッコ・ホームズ

講談社・KC
1979.7.5

シャーヤッコ・ホームズ

朝日ソノラマ・サンコミックス
1984.2.29

スペオペ宙学　全3巻　秋田書店・SC

1979.8.15

1979.9.15

1979.10.30

COMIC WORK

Go Nagai is [illegible] cartoonist who has produced [illegible] than 160 titles since his debut in 1969. The total number of his comic books released by different publishers is [illegible] 580, which proves his popularity. Here, we'd [illegible] to introduce his glorious work of 30 years through [illegible] [illegible] of his comic books.

ビバ！女子プロレス

集英社　1980.12.25

UFOロボ グレンダイザー　全2巻

立風書房　風雲篇1981.1.15

[illegible]1981.1.15

UFOロボ グレンダイザー

大都社　1986.2.20

UFOロボ グレンダイザー

大都社・新装版　1995.11.10

青春一番　全2巻　原作・高円寺博

講談社・YMKC 1981.7.10

1981.8.10

青春一番　全2巻　原作・高円寺博

講談社・YMKCSP　1987.11.17

1987.12.17

まいるど7　全3巻　秋田書店・CC

1981.10.5

1981.12.10

1982.2.20

チェンジ！さぶ

朝日ソノラマ・サンコミックス
1981.12.30

ガルラ

朝日ソノラマ・サンコミックス
1982.1.30

まぼろしパンティ　全3巻　原作・高円寺博　集英社・JC

1982.3.15

1982.7.15

1982.10.15

真夜中の戦士

講談社・KC
1982.7.20

真夜中の戦士

講談社・KCPX
1997.5.23

シンデレラ騎士　全2巻

朝日ソノラマ・サンコミックス
1983.2.18

1983.3.25

鉄戦士ムサシ　全2巻

朝日ソノラマ・サンコミックス
1983.4.20

1983.5.20

鉄戦士ムサシ

大都社　1992.1.10

アイアンマッスル　全５巻　原案・鈴木光　講談社・ＫＣ

1983.8.18

1983.8.18

1983.9.17

1983.11.18

1983.12.17

アイアンマッスル　全３巻　原案・鈴木光

講談社・ＫＣＳＰ　1988.4.6

1988.5.6

1988.6.6

鉄の処女ＪＵＮ

朝日ソノラマ・サンコミックス
1984.1.25

鉄の処女ＪＵＮ

大都社　1992.2.10

超少女ＵＦＯ

朝日ソノラマ・サンコミックス
1984.3.30

ゴッドマジンガー　全４巻　小学館

1984.5.15

1984.6.15

1984.8.15

1984.9.15

ゴッドマジンガー

中央公論社・愛蔵版
1995.9.25

魔神伝説　全３巻　角川書店・ＹＣ

1986.10.7

1986.12.7

1987.1.7

A MEMORY

「手天童子」取材裏話

酒呑童子をイメージしたタイトルからもわかるように、「手天童子」は異界の住人たる鬼をテーマにした冒険譚である。資料をあさるうちに、飛騨に鬼の首が保存されていることを知った。そして、取材に出かけた私たちは、なんとも不思議な体験をすることになった。もう二十年も前のことだが、その時の記憶はいまでも昨日のことのように鮮明である。

念興寺というお寺の本堂の一隅、明るいガラスケースの中に確かに鬼の首はあった。やや小ぶりな真っ白なしゃれこうべに、五センチほどの真っ白な角が二本はえ、目を凝らして見てもとても作り物とは思えない。写真撮影にも快諾を得たが、温和そうなご住職は、以前撮影した鉄道員が家族も巻き込んでの大変不運な目にあっているので、十分注意するようにとの忠告をつけ加えられた。大きな交通事故やらなにやらが続発したらしい。

取材を終え無事帰京したその夜から、私たちの身の回りが騒がしくなった。我が家の三[illegible]の娘が深夜いきなり高熱を発し、直撃は免れたものの、永井家では深夜けたたましい音とともに位牌が枕もとに落下したという。同行した永井先生のマネージャー氏の奥さんは階段で足首を捻り、永井先生の仕事場によく遊びに来ていた犬と猫が相次いで怪死した。

やがて写真が出来上った。なんということ! すべての鬼の首の写真のどこかに、鮮血を思わせる真っ赤な染みがくっきりと付いている。私たちは写真の使用を諦め、お祓いを受けた。件の鬼の首の写真の前での長い読経の後、僧侶が告げた。「普通これだけお経をあげますと、体が火照ってまいります。ですが、きょうは背筋が寒くなるばかりでした」。写真は寺の奥深くに納められ、それから二十年以上、私の身辺には何も怪異な事件は起きていない。読者を熱中させるばかりではなく、周囲の全部を異界に誘い込むような、そんな強烈無比なエネルギーを永井先生はもっているに違いない。

COMIC WORK

Go Nagai is a cartoonist who has produced [illegible] than 160 titles since his debut in 1969. The total number of his comic books released by different publishers is now 580, which proves his popularity. Here, we'd [illegible] to introduce his glorious work of 30 years through the covers of his comic books.

バラバンバ 全2巻

講談社 1984.10.26

1984.10.26

バラバンバ 全2巻

スコラ
[illegible]編 1987.12.17

[illegible]編 1988.5.23

バラバンバ2 全2巻

スコラ 1987.12.17

1988.5.23

ぼくたちドーテー隊

[illegible]書店 1985.1.1

凄ノ王伝説 全7巻 角川書店・YC

1985.8.7

1985.9.7

1985.10.7

1985.11.7

1985.12.7

1989.12.7

1990.9.7

翼の人

原作・団龍彦 角川書店・YC
1986.2.7

永井豪SF傑作集 全4巻 講談社・KCSP

真夜中の戦士 1987.2.6

電送人バルバー
1987.3.6

霧の扉
1987.4.6

鬼
1987.5.6

This is 大介

朝日ソノラマ・SWC
1987.2.20

骨法伝説 夢必殺拳

講談社・KCSP
1987.8.6

永井豪漫画大全集 全3巻 大陸書房

1987.10.8

1987.11.12

1987.12.10

ランボーセンセー

角川書店・YCS
1988.12.7

マシンガン刑事さぶ

大都社 1989.12.10

獣神ライガー　全2巻

勁文社　1990.1.16

1990.2.15

カーマスートラ　全4巻　構成・長谷邦夫　徳間書店・書き下ろし

1990.3.31

1990.6.30

1990.9.30

1990.11.30

株式会社徳川家康　全5巻　作・新宮正春　集英社

1991.4.24

1991.5.22

1991.6.24

1991.7.24

1992.7.22

スーパー西遊記

角川書店　1991.11.1

マジンサーガ　全3巻　集英社

1991.12.17

1992.3.24

1992.5.24

永井豪自選集 SF怪奇編

朝日ソノラマ・SSC
1992.4.25

永井豪自選集 ナンセンスSF編

朝日ソノラマ・SSC
1992.8.25

ゲーム戦士 アニマード

アスキー1992.9.22

ミスト ストーリー

集英社・JC
1992.10.7

ロボチョイA　全2巻

小学館・コロコロコミックス
1993.9.25

1993.10.25

酒天童子異聞 闇の宴

中央公論社　1984.8.20

ザ・バード　全2巻

集英社・YJCS　1994.8.24

1994.10.24

COMIC COMIC COMIC COMIC COMIC COMIC

COMIC WORK

Go Nagai is [illegible] cartoonist who [illegible] produced [illegible] than [illegible] [illegible] since his debut in 1969. The total number of his comic books released by different publishers is [illegible] 580, which proves his popularity. Here, we'd like to introduce his glorious work of [illegible] years through the [illegible] of his comic books.

ダンテ神曲地獄編 上下巻

講談社・書き下ろし
1994.9.22

1994.9.22

ダンテ神曲 浄罪編/天国編

講談社・書き下ろし
1995.10.23

大牙 全2巻

徳間書店・MBC　1995.2.28

1995.7.25

一発百万申し受け候

作・高橋三千綱
双葉社・アクションコミックス
1995.3.28

永井豪 ホラー短編集

日本文芸社　1995.4.10

勇士ダンダン

光文社・少年王コミックス
1995.9.10

ドラグ恐竜剣

光文社・少年王コミックス
1995.11.10

メモリーグラス 全2巻

秋田書店・CJC
1995.11.20

1996.3.20

神話大戦~ラーマヤーナ編 全2巻

徳間書店・書き下ろし
1996.1.31

1996.3.31

ハレンチ紅門マン遊記 全2巻

大都社　1996.5.10

1996.5.10

ラブリーエンジェル 全5巻 光文社

1996.10.10

1996.10.10

1997.2.20

1997.2.20

1997.8.10

永井豪のサムライワールド1 豪談児雷也

中央公論社　1997.4.25

永井豪のサムライワールド2 豪談霧隠才蔵

中央公論社　1997.5.25

永井豪のサムライワールド3 豪談猿飛佐助

中央公論社　1997.6.25

永井豪のサムライワールド4 豪談後藤又兵衛

中央公論社　1997.7.25

魔王ダンテ 全3巻
朝日ソノラマ
1976.10.20～11.20

ハレンチ学園 全12巻
集英社
1976.11.30～1977.5.31

あばしり一家 全8巻
秋田書店
1977.6.20～1978.12.20

まろ 全2巻
朝日ソノラマ
1977.7.20、8.10

デビルマン 全5巻
講談社
1977.12.20～1978.3.31

ゴエモン先生 全2巻
集英社
1980.6.25、8.25

マジンガーZ 全4巻
中央公論社
1994.12.18～1995.1.18

黒の獅士 全3巻
中央公論社
1995.2.18

魔王ダンテ 全2巻
中央公論社
1995.4.18

ハレンチ学園 全7巻
[illegible]書店
1995.5.31

キューティーハニー 全2巻
扶桑社
1995.6.30

イヤハヤ南友 全5巻
扶桑社
1995.8.30～12.30

キューティーハニー 全2巻
中央公論社
1995.10.18

怪奇短編集 鬼／霧の扉
中央公論社
1995.11.18

キッカイくん 全4巻
竹書房
1995.12.18

オモライくん
竹書房
1996.2.12

ドロロンえん魔くん 全2巻
中央公論社
1996.3.18

けっこう仮面 全3巻
角川書店
1996.4.25

あにまるケダマン 全2巻
扶桑社
1996.7.30

手天童子 全6巻
扶桑社
1996.8.30～1997.1.30

酒天童子異聞 闇の宴
中央公論社
1997.1.18

ミスト ストーリー
中央公論社
1997.2.18

デビルマン 全5巻
講談社
1997.4.11～6.12

Over Sea
海外の永井 豪作品

DEVILMAN 1～14
Granata Press
1991～93 ITALY

MAZINGA Z 1～11
Granata Press
1992～93 ITALY

IL GRANDE MAZINGA 1～5
Granata Press
1993 ITALY

MAO DANTE 1～2
Granata Press
1992 ITALY

MAZINGER
First Publishing
1988 USA

鉄甲萬能俠 1～4
自由人 1993 香港

暴力傑克 1～3
大然 1995 台湾

闘魔王傑克 1～6
大然 1995 台湾

恐竜剣
東立出版社
1996 台湾

【HIS HISTORY 1945~1997】

1945（0歳）
4月　永井一家、中国・上海より日本へ帰国。
9月6日　石川県輪島市に生まれる。永井芳雄・富士子の四男(男五人兄弟のうち)。

1952（6歳）
4月　輪島町立輪島小学校入学。
7月　上京。豊島区立大塚台小学校編入。

1958（12歳）
2月4日　父・芳雄病没。
4月　豊島区立巣鴨第二中学校入学。

1961（15歳）
4月　東京都立板橋高校入学。

1964（18歳）
3月　同校卒業。漫画に専念し始める。

1965（19歳）
4月　石森プロダクション・石森章太郎(当時)氏のアシスタントになる。3カ月でチーフアシスタントに。

1967（22歳）
11月　石森プロ退社、独立。

1968（23歳）
7月　“ハレンチ学園”連載開始により各方面で議論百出。このころ蛭田充がアシスタントとして参加。

1969（24歳）
4月　豊島区南大塚にて有限会社ダイナミックプロダクション設立。社長に就任。この年、石川賢がダイナミックプロに入社。

1970（25歳）
2月　株式会社ダイナミックプロダクション設立。
4月　永井豪ファンクラブ設立。初代会長・筒井康隆氏。
5月　日活映画“ハレンチ学園”公開。
10月　東京12チャンネル(当時)“ハレンチ学園”放映(～'71年3月)。

1971（26歳）
1月　SF劇画と銘打たれる作品を次々発表。この頃ファンクラブの高千穂遙、団龍彦らとプロレス観戦に足繁く通うようになる。

1972（27歳）
7月　NET(当時)“デビルマン”放映。
12月　フジテレビ“マジンガーZ”放映。

1973（28歳）
7月　東映映画“マジンガーZ対デビルマン”公開。この頃からコミックのアニメ化が続々。

1974（29歳）
3月　ダイナミックプロダクションを現在地・新宿区西早稲田に移す。

1975（30歳）
1月　“マジンガーZ”がスペインで放映。以降、アニメ作品が次々とヨーロッパで放映される。

1977（32歳）
“ゴルドラック”(グレンダイザー)がフランスでオンエアされ、80%を越える視聴率と共に一大社会現象を起こす。
「パリ・マッチ」誌の表紙にも登場し、日本でもその狂乱ぶりが報道された。

1978（33歳）
4月　小松左京、豊田有恒らとメキシコ旅行。この年、漫画界としては手塚治虫についで2人目のSF作家クラブ加入者となる。

1979（34歳）
8月　“Xボンバー”の取材でNASA見学ツアーに出かける。

1980（35歳）
3月“凄ノ王”が第4回講談社漫画賞を受賞。ロサンゼルスで報せを受ける。

1982（37歳）
9月26日　結婚。新婦は肥後純子さん。

1986（41歳）
フランス・コルシカ島の映画祭・第2回ベデ・シネ・フェスティバルにフェデリコ・フェリーニらとともに招待される。

1987（42歳）
2月　堂ヶ島温泉ホテルへ永井豪ファンクラブその他と旅行。デビュー20周年を記念して、高千穂遙、辻真先らも参加。

1988（43歳）
2月　フランス、アボリアッツの国際ファンタジック映画祭に審査委員として招かれる。フランスに再び“ゴルドラック”旋風が吹き荒れる。
帰途、アンカレッジ上空でUFOをビデオカメラで収録。
8月　TBSテレビ“TV探偵団”出演。

1989（44歳）
初の監督作品「永井豪のこわいZONE」発表。

1993（48歳）
北陸放送「エネルギーぶらり旅」で初のテレビレポーターを勤める。

1996（51歳）
日本ＳＦ作家クラブの会長に就任。

1997（52歳）
漫画家生活30周年を迎える。
6月　日本ＳＦ作家クラブ主催の30周年記念パーティが東京ヒルトンにて行われる。
9月　銀座の文藝春秋画廊にて記念個展を開催。

EXPLAIN GO's WORLD

―永井豪を読む―

HARUKA TAKACHIHO
GOSAKU OHTA
SHOICHI INOUE
SHO FUJITA
KENICHI YAMAOKA
YASUMI KOBAYASHI

——そして私は考える
彼こそが滅びさろうと
していた関東に降り立った
〝神〟ではなかったかと……

謎の巨人
バイオレンスジャック
彼こそが荒ぶる神の姿
ではないかと……!!

私にはもはや……
バイオレンス
ジャックの顔すら
思い出せない……
おぼろげな姿を
思い出すのみ
なのだが……

いつか
また……

比類なきロマンの大作

高千穂 遙　が読んだバイオレンスジャック
（作家）

「ロマン」という言葉がある。

『バイオレンス　ジャック』は、タイトルに「暴力（バイオレンス）」という言葉があるためだろうか、その暴力描写ばかりが注目を集めることが多い。

しかし、それは間違っている。木を見て森を見ずの類だ。作品を作品として考察していないことになる。

作品は、まず作品そのものが鑑賞されなくてはいけない。表現やキャラクターへのアプローチは、そのあとの話だ。

『バイオレンス　ジャック』において表現として用いられている素材は、たしかに「暴力」である。だが、描かれているのは「ロマン」だ。あらゆる意味でのロマンが、この作品の中にはびっしりと詰めこまれている。まずそれを見つめよう。

胸高鳴る大ロマン。

これこそが『バイオレンス　ジャック』に、もっともふさわしい謳い文句だ。

血と暴力に埋めつくされた物語が、なぜロマンたりえるのか。

それを知るには、人間とは何かを知らなくてはならない。

人間にはふたつの本質がある。

ひとつは本能に基づく「獣性」であり、もうひとつは脳髄の進化に伴って生じた「知性」である。後者は人間のみ有することのできた資質なので、傲慢にも「人間性」などとも呼ばれている。

このふたつの性質、どちらがより根元的かと問えば、それは言うまでもなく前者の「獣性」のほうである。

すべての生命体は、他者を排除する。また、常に自身が優先して生存することを求める。

この原則は、遺伝子が定めた。

遺伝子の最大の目的は、種の保存である。種の保存のためにのみ遺伝子は存在しているといっても過言ではない。

種の保存の要諦は、生と死の管理である。生命体をやみくもに生みだすだけでは、種の保存は成立しない。居住域が単一種であふれてしまったら、そのあとにくるのは大滅亡である。種を保存するためには新世代の登場とともに、前の世代はすみやかに消え去ってもらわなくてはならない。それがゆえに遺伝子は自身で自身を殺す。

もともと遺伝子というのは自己複製で世代をつないできた。いわゆる無性生殖というのがそれで、この方法によれば、次世代の個体と前世代の個体は厳密に同一生命体となる。したがって、前世代が死んでも自己は死なない。遺伝子レベルでは不死身を確保しているのである。

オスとメスによる有性生殖では、ここが異なってくる。次世代種はオスとメスの遺伝子を半分ずつ受け継いでいて、自己複製にはなっていない。だが、種の保存という意味では、それはいっさい問題にならない。逆に、より強い種を確保できる可能性が高くなる。

整理してみよう。

種の保存に必要なプロセスだ。

まず増殖である。そもそも増えてくれなければ話にならないのだ。つぎに古い世代の死が欠かせない。そして、他者を排除する。そのために常に強い個体を選び、それを残していく。

これらの要素が鮮やかに調和したとき、熾烈な闘争がはじまる。そして、種は爆発的にその勢力を拡大する。

本能とは、遺伝子の意思だ。遺伝子の意思は闘争を種の裡にもたらす。誰と闘うのか。言うまでもない。「この世のすべて」とだ。

最初の敵は、自身のまわりにいる同種である。かれらは存在することだけで生存圏を狭くし、食糧を奪う。排除しなくてはいけない。遺伝子は、それを許さない。

そこで、個体は闘う。結果として、強い者が残る。何羽も生まれた雛鳥が、餌の取り合いを経て数を減らしていくという光景をテレビなどで見たことはないだろうか。あれが、このケースにあてはまる。

つぎに個体はあらたな敵に出会う。それは異種（もしくは同種異部族）の生命体だ。バクテリア、寄生虫といった例外を除けば、ひとつの空間に生存できる個体は、常にひとつきり。ある個体が自分の場所を得るためには、他の個体をそこから追いださなくてはいけない。これをテリトリーの確保という。

テリトリーの確保には、暴力が用いられる。圧倒的な暴力のみが、この問題を解決に導く。暴力は必然であり、それを回避する手段はどこにもない。遺伝子がそれを望んでいる。

ところが、ある日、とんでもない例外種が出現した。

人類である。

人類は地球46億年の歴史の中で、はじめて知性を持った生物である。知性は思考を生み、倫理をつくった。倫理とは、つまり秩序の源である。これにより、人類はかつてないほどの単一種の繁栄を手中におさめた。知性は人間にしかないから、「人間性」と呼び変えることができる。すると、それに対応する言葉として、遺伝子の命ずるがままに動く性質を「獣性」と呼ぶことが可能になる。

かくして、ここに摩訶不思議な生物が誕生した。

種は本来、その保存のみを願う。そう遺伝子が定めた。にもかかわらず、それに逆らう性質を人類は得てしまった。

曰く。暴力はいけない。貞節を守ろう。弱い種を保護する。

遺伝子が目を剥いてひっくり返るような言動だ。本来の性質である獣性を深奥に封じこめ、知性で遺伝子の使命を制圧してしまった。

しかし、これは生物の自然な姿ではない。歪んだ、不自然な姿である。

永井豪は、種としての人間のあるべきさまを堂々と描いた。それが、この『バイオレンス　ジャック』である。人間とは、こういう生物だったのだ。繁栄とは、生きていくとは、要するにこういうことだったのだ。それを永井豪はストレートに描き、われわれの眼前に叩きつけた。だからこそ、この作品はロマンになる。知性による欺瞞の呪縛から解き放たれた人びとが本能のままに激しく蠢き、割拠するこの作品は、まぎれもない人類のロマンだ。絶対にそれ以外のものではない。

最後にセックスに触れておこう。

セックスもまたロマンを彩る重要な因子である。

運命のいたずらに感謝したい。『バイオレンス　ジャック』は掲載誌がつぎつぎと変わり、最終的には青年誌に至った。これにより、正しい性描写が許されるようになった。もしも、少年誌連載のままだったら、この作品はこれほどの高みに到達することはできなかっただろう。

遺伝子の意思からセックスを切り離すことは、誰にもできない。より強い種を保存させるために無性生殖から有性生殖へと移行したとき、セックスは生まれた。セックスは暴力（及び、それに伴う死）とともに種の保存を支えている。

人間の場合、そのセックスに知性がからんだ。

知性にくるまれたセックス。それは「愛」だ。

愛は常にセックスを伴う。それを証明するためには一枚の絵があるだけでいい。後背位でつながったまま荷車に縛りつけられ、ひとつになってスラムキングのもとへと運ばれていく飛鳥了と美樹の姿である。これこそが獣性と知性との融合であり、人間だけがたどりつくことのできた「愛」による「種の保存」の具現化だ。

生と死。愛と暴力。神と悪魔。天使と野獣。

人類を人類たらしめているすべての要素が複雑に絡み合い、ひとつの壮大な物語を紡ぎだしている。

わたしはこれ以上の大河ロマンを、他に知らない。人類を本来の意味で描ききるには、これほどの時間とパワーと阿鼻叫喚が必要だったのだ。

ただひたすらに感動するのみである。

豪チャンが語るバイオレンスジャック

『デビルマン』という巨大な作品を描いた後だったので、それ以上のスケールを持つものにしたかった。

本作には「歴史の流れ」を感じさせるものが良いと思い、人間の攻防の歴史を凝縮したような戦国時代を、現代に置き換えて作れないかと考えた。

そのためには一度、現代文明を破壊する必要があり、関東地方を大地震で破滅させることにした。

ジャックとは、歴史を動かしていく巨大エネルギーの象徴である。現代の無法地帯で、ジャックという巨人と関わりながら攻防を繰り返し、無秩序から秩序を構築していく人間たちの姿を描きたかった。

イルダー
オーン

マジーンッ豪!!

桜多 吾作（マンガ家）が読んだマジンガーZ（!?）

豪ちゃん、マンガ家生活30周年おめでとう。

一口に30周年なんていうけど、すごいことだよなあ。おいらなんて何度もマンガなんかやめちゃおうかな…なんて時があったもんな。

豪ちゃんに初めて会ったのは32年前、師匠の石ノ森章太郎親分の部屋。まだ新宿区牛込のアパートに2部屋を借り、ひとつを仕事場としていた、春もまもない頃だった。

32年も前となると記憶もだいぶあやふやで、自分に都合よく歪曲しているものだが、上京してデザイン学校に入ったら、まず石ノ森親分を尋ねるのが第一目標・一大事だったため、その時のことだけはもう一人いた女性アシスタント(片桐さん……だったっけ？)の顔とともに、はっきりと覚えている。

本人は「あの頃はとってもやせてスマートだった」というだろうが、明るいコロコロとした、後の“冷奴先生”のキャラそのままの豪ちゃんが、座り机に向かって学研のコースの原稿を描いていた。

半分ドギマギしながらも、実は自信満々で描いたおいらの原稿を見てくれた。「すごい、大天才!!」とでもいってくれるかと思ったっら、ただ無言。気まずい沈黙に耐えられなくなった頃、「もっともっとたくさん描くしかないよ」と、ポツリ。あとはニコニコしながら楽しそうに仕事へと向かっていた。

親分が桜台へ移ってからも、時間を作ってはちょこちょこ遊びにいった。『佐武と市』のベタを「ぬっていいよ」と、いわれた時は、もう親分のアシスタントにでもなったような、天にも昇る最高の気分。手が震え、ベタははみ出し、仕上げの仕上げが必要だったことだろう。当然ながら、今じゃ自分の原稿のベタをぬっていても面白くも何ともない。「終わったら一杯飲める」くらいの思いしかない。ベタをぬるだけであんなにワクワクと心はずむあの頃へ、戻れるものなら戻ってみたい。

翌年夏、インチキみたいなデザイン学校を1年でやめて美術研究所へ通ったものの、毎日がつまらなく、やはりマンガでも描いてみようと親分宅へおしかけた時「こんな下手なの入れちゃダメ!!」と、一番強く反対したのは豪ちゃんだったが、「入れてくれるっていうまで帰んない!!」と、いきまいたオイラに閉口したのか、当の石ノ森親分はあっさりとアシスタント入門を許してくれたっけ。

有頂天で入ったものの、プロとアマは天と地ほどの違いがあった。さんざ苦労しても描けないバックを横あいから取上げ、いとも簡単にメリハリをつけて描かれたのには、ただただボーゼン自失。

その頃の豪ちゃんは、おいらが入門したのと入れ違いにフリーとなっていったが、その直前まで通いのチーフアシスタントと、生活のためのバイト、それに自分の作品まで描いて、いったいいつ寝てたんだろう。

入門には一番反対した豪ちゃんだったから、さんざんいじめられるだろう……と覚悟していたのだが案外に優しく、夜食の足しに、とゴッソリと缶詰を差し入れてくれたり。人を使うのも上手で「うまいうまい」とおだてられ、なんと!! 入って3日目には4色の色原稿（トッポジージョの表紙）なんかもやらされた。

それから1年と8ヵ月、とにかく月産400～600もの枚数を3人のアシスタントでこなしていたせいか、どうにか格好もついて、金のたくわえもないままに親分のところをやめたおいらに『馬子っこ金太』などを連載していた豪ちゃんは手伝え……ともいわず「晩めしでも食って、のんびりしていけば」の言葉。ついつい甘えて半居候。毎晩のように豪ちゃんの兄、(のちの）泰宇さんや謙次さんに、入れ替わり立ち変わり呑みに連れていかれるままに遊びまわり、遊び人吾作の今日の土台ができていった。

その頃、ある劇画家から石ノ森親分のところの8倍の給料を払うから専属アシスタントにならないか……と誘われた。悩んだあげく豪ちゃんに相談したところ「アシスタントになりたくて上京したのか！　マンガ家になりたくて上京したのか！　どっちなんだ!!」と、こっぴどく怒られた。それで進路が決まったのかもしれない。もうひとつ、ひどく怒られたのが、『キッカイくん』だったかな？　の色を、遊びたい一心で手抜きをした時。あの冷奴先生のような顔が真っ赤になり、爆発せんばかりに怒られ、やり直させられた。

何年かあと、「今度デビルマンてのやるんだけど企画から参加してくれない？」と誘われ、じゃあ忙しくならないうちに、と1週間くらいの予定でフラリと四国へヒッチハイクで旅行に出かけた。景色はいいし、酒はうまいし…でついつい長居。2週間も過ぎた頃、現地から電話を入れたら「行方不明だから蛭ちゃん（蛭田充）にお願いしたよ。お前の仕事なんかないよ」と怒られ、帰りづらく1ヵ月の四国一周旅行をしてしまった。

帰ってきてからは、2ヵ月に1本くらいのペースで別冊ジャンプなどに描いていた。そこへ『マジンガー』の話がもち上がった。テレビの機械獣のアイディアをだすほかに、別冊ジャンプでテレビに添った形のマンガを連載することになった。最初の頃はなるべくテレビの進行にしたがって描いていたが、だんだん脱線しはじめ、連載が別ジャンから「冒険王」へ移る頃にはハチャメチャになっていった。さらに敵キャラだけおさえ、好き勝手に描いていたのが『グレートマジンガー』で、その勢いで“UFOロボ”の頃には、キャラは使っているものの基本設定までがかわっていた。豪ちゃんも、時の編集者も太っ腹、今ならとても許してもらえないだろう。

時間が過ぎれば苦しいことはみ～んな忘れる脳天気なおいらだが、マジンガーを描いている最中に盲腸になり、オエー、オエーとやりながらもチラして、アップしたとたんに入院なんてのもあったっけ。アシスタント連中はたまらなかったろう。

作品解説を、という依頼であったが、なにか思い出話になってしまった。導入部だけで、紙枚が尽きてしまいそうなので、40周年記念、50周年記念の出版物で続きを書きたいと思う。その時でも、読者の心のマジンガーZは錆びついてはいないはずだから。超合金Zでできてるしね、マジンガーは。ってそういうことじゃないか。

怒られてば～かしのダメ吾作より

豪チャンが語るマジンガーZ

『鉄腕アトム』や『鉄人28号』を見ながら育った僕は、いつか自分もロボットものを書きたいと思い続けていた。
しかし、これまでに全く無い新しいタイプのロボットを思い付くまでは絶対に書かないと心に決めていた。
ある日のこと、交通渋滞の車の波を見ていて、ふと「前の車を跨いでいけるロボットがあったらいいナ～」と思い、すぐに会社に帰って、人間が乗り込み操縦する形の「人間操縦型ロボット」をスケッチした。
こうしてマジンガーZが誕生し、世界的規模で爆発的なロボット・ブームを引き起こす火付け役となったのだった。

正義のためなら恥も外聞もないのだ!!
その証拠に
こんなことだってできるのだ!!
わ〜〜っ!!けっこう!!

永井豪の美少女たち

井上　章一　が読んだ美少女キャラクター
(国際日本文化研究センター所長)

強い少女、戦闘をする少女のマンガを、最近はよく見かける。

ちょっとエッチな戦闘服の少女が、剣をもって男たちをなぎたおす。セックス・アピールをあらわした彼女らの武闘場面は、現代マンガの常道になっている。とくに、ＳＦファンタジー・コミックでは、すっかりおなじみの展開だ。

ルーツをたどれば、永井豪へゆきつくと思う。『キューティーハニー』、あるいは『けっこう仮面』がパイオニアだったのではないか。

もちろん、それ以前から、戦う女のマンガはあった。たとえば、『サイボーグ００９（ゼロゼロナイン）』（石森章太郎）の００３（ゼロゼロスリー）＝フランソワーズ・アルヌール。彼女も、性的な魅力があり、かつ格闘シーンをこなしていた。

だが、こと戦闘に関するかぎり、彼女が主役であったとはいいがたい。闘っていたのは、圧倒的に、００９（ゼロゼロナイン）＝島村ジョーをはじめとする男性サイボーグたちである。フランソワーズは、ややそえもの的な役割を与えられていた。

彼女ひとりに限らない。女戦士は、男たちの戦陣へ、色どりをそえる程度に描かれることが、多かった。ひとりの女が、群をぬくファイターとして描写されることは、なかったのである。

『リボンの騎士』（手塚治虫）のサファイアを、先例に思いつく人もいよう。だが、彼女は男のふりをして、闘っていたのである。すなわち、サファイア王子として。サファイア姫が、剣をふりかざしていたわけでは、けっしてない。

この点で、ハニーやけっこうのお姉さまが出現したのは、画期的であった。彼女たちは、ソロ・ファイターであり、しかも明白な女だったのである。女が闘う場の主役へおどりでる、そのさきがけをなしていた。いってみれば、男の領域であった戦闘場面へ、進出をとげたパイオニアだったのである。意外や、永井豪のキャラが、フェニミズム的実践の先陣をなしていた…。

のみならず、ハニーの場合は、ひとりの女子プロレスラーさえ派生させている。いうまでもない。ＪＷＰのキューティー鈴木がそうである。何という先見性。セクシー・パンサーを自称していたミミ萩原も、パンサー・クローからとったのか？

残念ながら、『けっこう仮面』を手本にしたレスラーは、まだ出現していない。おっぴろげジャンプを必殺技にする覆面レスラー…。うーん、これぱかりは、ちょっとありえないだろうな。

キャラクターの描き分けは、むずかしい。とくに、二枚目＝美形キャラは、どんなマンガ家でも苦労するだろう。あの巨匠手塚治虫だって、美人の描写には、キツネ顔とタヌキ顔の二通りぐらいしかなかったと思う。あとは、髪型やアクセサリーなどで、おぎなったりするわけだ。

じっさい、ひとつのコマに複数の美人を登場させるなんていうのは、かなりつらいと思う。まあ、マンガ家にしてみれば、腕の見せどころであろうか。

永井豪も、この点では、そうとう頭を悩ませていると思う。たとえば、『ハレンチ学園』の十兵衛と、『あばしり一家』の菊の助。違うマンガなんだから、同じキャラを流用してもいいのに、永井はそうしない。きちんと、描き分けている。

丸顔の菊ちゃんに、うりざねの十兵衛。ヤクザの娘という役柄のせいか、菊の助は、目が少々つりあがっている。

ハニーにいたっては、七変化などという設定さえ、もうけていた。同じ少女に、少しずつアクセントをつけて、七とおりの美形を出現させている。ちょっとした離れ技だ。

けっこう仮面が顔をかくした秘密のひとつは、ここにあるかもしれない。なんといっても、美形キャラが山ほどでてくるマンガである。これに加えて、ヒロインのけっこうも描き分けなければならない。ええい、めんどうだ。いっそのこと、覆面を被せてしまえ……。

すいません、永井先生、勝手な想像でした。そんなわけないですよね。

おもしろいのは、ブオトコ、ブスのキャラクターである。『ハレンチ学園』でも『けっこう仮面』でも、多彩なブオトコ教師に出演させている。『キューティーハニー』では、ブスの女教師。うーん、ながめてみると、学校の先生に醜形が多いんだな。

それはともかく、ブス、ブオトコの描き分けは、すごい。十人十色というが、ほんとうにブス十色。一色にそまりがちな美形とは、ぜんぜん違う。とにかく、永井マンガでは、さまざまなタイプの醜形キャラが、活躍する。けっこう、その描き分けを楽しんでもおられるようだが、どうだろう。

美形を弁別する手間のうさが、ブスの乱発で、はらされるのかもしれない。美人描写に苦心されたその反動が、醜形のたたき売りとなって、あらわれたのではないか。ほーら、ブスもういっちょう、よーし、ブオトコも、おまけにもうひとつ……。

うーん、これも、私の邪推を永井先生にあやまらなくちゃあ、いけないのかな。

マンガに、女のボディ・ラインが描かれることは、永井豪以前からあった。たとえば、スポーツもの。あるいは、バレリーナもの。スポーツ・ウェアやバレエ・コスチュームだと、どうしても、体の線がでる。その線を、色っぽく描写したマンガ家が、いなかったわけではない。たとえば、『サインはＶ！』の望月あきらも、それをひそかに楽しんでいたと思う。

しかし、登場人物が、そのボディ・ラインを恥じらうことはなかったろう。ヒロインたちは、たとえ自分が女体の曲線美を発揮していても、無自覚にふるまっていたのである。

はずかしい告白をする。私はウランちゃん（『鉄腕アトム』）のパンツに、けっこうときめいたことがある。しかし、ウランちゃん自身は、すこしも自分のパンチラを恥ずかしがっていない。じつに、あっけらかんと見せている。それにドキドキする私のほうが、なにか罪ぶかいように思わされたものだ。

作者の手塚治虫は、意図していたかもしれない。アトムはパンツいっちょうで年中裸なのに、ウランちゃんはいつも洋服を身につけている。それは、パンチラの効果を、作者がどこかで戦略的に狙っていたからではないか。

いずれにせよ、作中のウランちゃんは、それに無頓着。まあ、幼かったということだろう。

この点でも、永井美少女キャラは、画期的であった。彼女たちは、見られることの恥ずかしさを、じゅうぶん意識している。そして、だからこそ、見せることの力も知り尽くしていた。性的挑発と羞恥の両方を、ともにわきまえながら、ふるまっていたのである。顔をかくして全裸になるけっこう仮面は、そのゆきつく先であったといってよい。

高校時代の永井青年は、体操部員であったという。もちろん、レオタード姿の女子部員も、すぐそばでながめていた。活発に動きまわるヒロイン像のイメージは、そこで培われたのかもしれない。おっぴろげジャンプのルールも、体操の開脚とびあたりではなかったか。見る／見られることの葛藤も、そこで学習されたのかもしれない。

かつての同窓女子体操部員が、永井豪を読んだ時、何を思うのだろう。

「やーね、永井クンったら、こんなふうにあたしたちを見ていたの」。

昔から永井青年の視線を知っていたはずの彼女らも、今はじめて知ったふりをするのだろうか。

豪チャンが語るけっこう仮面

一応『月光仮面』のパロディーではあるが、まさに恥ずかしいはずの「体」を隠さずに、隠さなくっても良い「顔」を隠すとどうなるかという「逆転の発想」から始まり、人間の羞恥心というものをあざ笑うものを書きたかった。
本当は、一話完結の読み切りの約束だったのだが、人気が良かったので連載になり、トントン長引いていった。
まさか後で実写ビデオまで作られることになるとは、当時思いもよらなかった。
「ひょうたんから駒」「青天の霹靂」とはまさに、この『けっこう仮面』のことであろうと思う。

あれっ
オモライくんの
アカばらに
穴があいて
います

すこし拡大して
なんの穴か
しらべましょう

うーん
これはかなり
ふかそう・・・・!?

あーっ 穴のおくに
なにか うごいてる
ものが!

アリです!

どうやら
オモライくんの
おなかの中に
アリが巣をつくって
いるようです

ぎっしり
つまったアカ

オモライくんの
からだ

これが問題の
アリの巣!

オモライくん断面図

悪くておかしい笑宇宙

藤田 尚＆中田 雅喜 が読んだギャグ

（マンガ評論家）　（マンガ■）

ずいぶん前に読んで、笑って、う～むと唸って、忘れられなくなってしまった（たぶんアメリカの）小咄があります。

先生「悪いこととは何ですか？」

生徒「はい、やってみておもしろかったら、それは悪いことです」

あれやこれや思い浮かべてみると、なるほど、ほとんどその通り。実に見事な定義（？）といえるでしょう。そこで、永井■のギャクマンガはおもしろい！――といったら、まるで永井マンガには悪いことが描かれているかのようですが、もちろん悪いことだらけです（笑）。

デビュー５作目にして、あの赤塚不二夫先生に呼び出されて怒られたというマンガ界の問題児は、それが逆効果だったのか、確信犯となってさらに過激さをエスカレートさせていったのでした（笑）。

ただ実際は、悪いことがこれでもかとばかりに描かれてありさえすればおもしろいかというと、決してそんなことはなく、あーおもしろかったといえるマンガには、読後の爽やかさ、後味のよさが不可欠なのです。

永井ギャグの後味が爽やかなのは、作品自体が明るいからであって、その明るさは三種類のあかるさのブレンドによるものだと思われます。

ひとつめのは、ＳＦ的な明るさ。

もともとＳＦが好きだったという作者の資質に、師事した石森（当時）章太郎先生の、やはりＳＦ的なモダンさが加わったおかげか。

ふたつめの明るさは、パロディの明るさ。

個人的にもっとも印象に残っているのが『豪ちゃんのふぁんたじいーわらうど バン』（「ＣＯＭ」68年４月号）でした。これは、手塚治虫の『火の鳥』などとともに「ＣＯＭ」に載って話題になっていた石森章太郎の青春実験コミックポエム（…とでもいいますか？）『章太郎のファンタジィワールド ジュン』の、まるっきりのパロディ。地平線に大きくかかった月をバックに、かわい子ちゃんを追いかけていた主人公はそのまま月に激突…しょんぼり座っている主人公の上空に昇っていった月の表面に、ちゃんと人型の跡が残っているコマなど、ギャグとファンタジィの両方が感じられ、「ＣＯＭ」に載ったとき作者が書いた弁解（？）の「じつは“ジュン”のパロディからはいり、ファンタジック・ギャグマンガという新分野を開拓しようというこころみなのでありますです」も、けしてその場かぎりのジョークとばかり言えないような魅力がありました。

ぼくが初めて（しかもリアル・タイムで）読んだ永井マンガが、この「バン」で、当時、パロディの楽しさと妙な何かが心に残って、何度も何度も読み返したことを覚えています。「ジュン」の表現している、ちょっと恥ずかしくもあるポエジーを、パロディでぶち壊しているわけですが（ヒロインも、ラストで「ばか ばか　ギャグマンガの主人公はすぐムードをこわすんだもん　きらい」と怒ってます）実は、永井さん自身にも少年的なテレのかげにポエムな心はしっかりあって、それがのちのシリアスな作品群、特に『デビルマシ』の感動として開花したように思います。パロディのほうは、のちに「けっこう仮面」というタイヘンな作品で開花、もとい開脚したことは、ご存知の通りです（笑）。

みっつめの明るさは、ヒロインの明るさ。

かわいくてイロっぽいヒロインは、実はけっこう主人公より強くてたくましく、はじらいながらもどんどん裸になって、助けられたらお礼にキスして、いっしょについて来てくれたりするハッピーエンド。子供にとってもホントは重大問題、モテるかどうかには触れずに、笑いのための笑いだったギャグが多かったなかで、ハッキリ、主人公が戦いに勝ったら、かわい子ちゃんをゲットできる―― 外国映画を見るような永井ギャグのセクシーな明るさは、何よりの快感なのでした。しかも、主人公はスケベなくせに、いざ女のコのほうから迫られると真っ赤になってしまう純情なヤツだったりするところも、男の子の読者の共感を呼んだのでした。

テレ屋でオクテなヒーローと、そのスケベな心をわかってくれて積極的なセクシー・ヒロイン―― これは（いつだって）少年の夢でしょう。性的なことが悪いことだと思われていた時代（今も？）だったので、しょうがなく寝たふりをしていた子供たち（男の子だけでなく女の子も！）にあっけらかんとエッチの楽しさを教えてくれた永井マンガ。“豪マニズム”というより、自然体の“豪イング・マイ・ウエイ”の世界なのでした。

しかし、こーゆー、明るくエッチでバイオレンスなギャグマンガが読みたかったんだよ――と、永井マンガに高いシンクロ率を示していたぼくが、読み続けることができなかった作品が、ただひとつ―― それは、究極のフケツと至高のフケツをきわめてしまった『オモライくん』!!

おもしろくても、ついて行けない悪いこともあるんですねェ。これに関しては、ぼくと同世代で、『オモライくん』をバイブルにしている女性漫画家の中田雅喜さんに、バトン・タッチいたしましょう。

○『オモライくん』のころ

まだ「コジキ」が放送禁止用語ではなかった時代---。コジキが「浮浪者」でなく、寒山拾得の頃から続く「乞食」という神聖な職業であった頃の物語だ。

舞台は、その名も清潔学園というごく一般的な小学校。そこにごく当たり前にコジキスタイルの小学生、オモライくんが存在している。その不潔さはもはや凶器で、顔を拭くと蒸しタオルは一瞬にして真っ黒。帽子をとればフケの濃霧。廊下まで悪臭。机の代わりにゴザ（死語！）を敷いて教室に座っている。もちろん教科書もノートも持っていない。音楽の授業に笛が買えなくて、自分の身体に何重層にもへばりついた垢を削り取って（一見太って見えるオモライくんの身体も顔もすべて垢の層！）、それを口の中に入れ唾で柔らかくして粘土細工のようにこねあげ、垢コネ笛をつくってしまう（ハァハァ…）。

こうやって思い出し出し書いているだけでも気持ち悪いのに、その笛をまた、音楽の教師がとりまちがえたりして…。まちがえで吹いているうちに教師の唾で笛がガムのように粘ってきて…。オチは当然「教師発狂」だったりする。

私はこの作品をリアルタイムで読んだ。クラスメートの家で。私の少女時代はまだ街角にコジキはいたし、一般の人々も貧しかった。その「少年マガジン」を買ってたクラスメートも、長屋に住んでいた。私の家は一般的な公務員で、うちの二階から裏の長屋の共同生活が良く見えた。物干しもトイレも井戸（！）も共同。風呂はなし。六畳一間の沈んだ畳に親子５人が寝起きしている家族も多かった。

みんな泣くのも笑うのも大声で元気いっぱいだった。かと思うと、ぐるりと一町内分白い壁に囲まれた噴水付の豪邸……の娘も、しっかりおんなじクラスにいたりした。もしオモライくんのような子がクラスにいても、たぶんそれほど不思議ではなかったろう。そういう少女時代をおくったから、だから、『オモライくん』に共感できた。私の家も当然貧乏だったから、長屋の友人と『オモライくん』を読んで笑った笑った。大声で笑いあった。

さて、５年ほど前、本屋でＪＩＣＣ出版局から出た『オモライくん』を見つけ、懐かしさのあまり飛びついて買ってしまった。うちの７才の娘に「おもしろいから読んでごらん」と読ませようとしたが、「よくわからない」と突き返された。そして「アカってなに？」と聞かれて、あぜ～んとした。別に私が潔癖症なわけではない（潔癖症のマンガ家がいるはずもないが）。ただ、娘は赤ん坊の頃から保育園育ちで、汗をかいたら着替え、汚れたら着替え、毎日入浴の習慣がついている。

これでは垢など知ろうはずもない。こいつ！　垢ってもんが解るまで、サバイバルキャンプにたたき込んでやる！　土の上で寝起きしてこい！

そのためにはキャンプ費用ン万円が…

お金を払わねば垢も体験できない…そんな時代になった。

私は『オモライくん』が好きだ。

豪チャンが語るオモライくん

今や、禁止用語になってしまったコジキの世界。コジキのキャラクターが、実に人間社会の中で一番気楽で純粋で人間的なんじゃないかと思い、主人公にした。
オモライくんたちが幸せなら幸せな程、普通の人間たちがちっぽけでつまらない存在に見えてくるんじゃないか。またその両者のギャップが笑いを生むんじゃないかと考えた。
体は汚くても、心は最高に美しいオモライくんは天使であり、汚いことを汚いと思わないことは、逆にスーパー！だと思うのだ。
『デビルマン』をやるために、残念ながら途中でやめてしまった作品の一つである。

『手天童子』研究序説

—または永井豪作品における「鬼」の研究—

山岡 謙一 が読んだ手天童子
(永井豪ファンクラブ代表)

○はじめに

『手天童子』について書くようにとの編集部からのご下命である。気安く引き受けたものの、よく考えてみたら『手天童子』について語るには「鬼」の問題を避けては通れない。永井豪作品にとって「鬼」とは何なのか？ 与えられた紙幅で、それをどこまで解明できるか、はなはだ心許ない。しかし、せめてそのアウトラインくらいは明らかにして、今後の研究の方向性を探るくらいのことはやってみたいと思う。乞うご期待！

○「鬼」に関する作品の系譜

永井豪作品には「鬼」が出てくるものが多い。そう気づいたのは、昭和50年、秋田書店発行の少女向け月刊誌「プリンセス」2月号に発表された『手天童子』を読んだ時のことだった。

まず、ギャグ漫画家としてデビュー後 3年目にして初めて描いた劇画作品が、そのものズバリの「鬼」(ただし作品のテーマとしては後の『真夜中の戦士』につながる)だった。「週刊少年マガジン」昭和45年1月1日号に掲載された作品である。

また、「週刊少年サンデー」昭和46年7月4日号から同年12月26日号まで連載された『ズバ蛮』には百鬼一族が登場する。さらに、石川賢氏との合作でアニメ化された『ゲッターロボG』では敵役に百鬼帝国が設定されていた。

「プリンセス」版『手天童子』に遅れること約1年半、「週刊少年マガジン」昭和51年9月5日号から、『手天童子』が、構想も新たに連載開始された。

その後にも、『夜に来た鬼』(昭和53年「月刊少年マガジン」5月号掲載)や、海外向けに描いた『鬼』(昭和58年「EPIC」掲載)といった作品もあるが、質量ともに、「週刊少年マガジン」版『手天童子』が、「鬼」を描いた最高峰といっていいだろう。

なお「プリンセス」版の『手天童子』は単行本収録時点で『邪神戦記』と改題されているので、この後『手天童子』と書けば、すべて「週刊少年マガジン」版の『手天童子』を指すものとする。

○『手天童子』のマルチ展開について

連載終了後19年の間に、『手天童子』は、新書版、スペシャル版、愛蔵版(ハードカバー)、文庫版と、4回にわたって単行本化されたほか、小説化されたり、ゲームブックが作られたり、OVA化もされている。

また、「手天童子」というネーミングの元となった「酒呑童子」との関係から、NHKの『歴史発見』という番組の「酒呑童子は三度死ぬ」の回に、永井豪氏は出演され、「酒呑童子」や「鬼」に関して、それまでに調べたことをまとめて発表された。

それがきっかけとなり、「小説中公」創刊号から、その後の研究成果を盛り込んだ『闇の宴』を連載することになる。

さて、『手天童子』に関する周辺のデータはこれまでとし、いよいよ「鬼」との関係に話を移すことにしよう。

○「鬼」がたたる話

「週刊少年マガジン」に『手天童子』を連載した時のエピソードとして、作者が「鬼」にたたられたというものがある。

それについては、永井豪氏自らが『鬼の首風雲録』(昭和52年「面白半分」7月号から翌年1月号まで連載されたエッセイ)に書いておられるので、詳しいことはそちらを参照していただけると幸いである。

この“たたり”は相当根が深いらしく、それまで病気らしい病気をしたことがなかった永井豪氏は、最初の劇画作品の『鬼』を描き上げた直後に、高熱を出して寝込んでしまったという。永井豪氏にとっては、まさに「鬼の霍乱」だといえる。

飛騨高山の念興寺に「鬼の頭蓋骨」の取材に行った時の話は、特に恐ろしい。実は、私はこの時の写真という物を見せてもらっているのだ。その写真は、結局、入谷の鬼子母神でお祓いを受け、焼かれてしまったようだ。

その後、『手天童子』がOVA化された時に、付録として鬼子母神のお守りがつけられたのは、そのためなのである。

また、「週刊漫画ゴラク」に『バイオレンスジャック』を連載している時のこと。この作品は、ご承知のように、他の自分の作品の主人公や主要キャラクターたちを次々とゲスト出演させることが趣向のひとつになっている。そこで「手天童子編」を描こうとして、描き始めたとたんに、またもや“たたり”が始まったため、急遽「骨法編」に切り替え、事なきをを得たという話しもある。そのためか、「アイアンカイザー編」では「鬼」は無関係(どちらかというと『ススムちゃん大ショック』の系列だと思われる)のようだ。

永井豪氏は、UFOを目撃したり、幽霊を見たり、鬼にたたられたりと、さまざまな体験をされていると聞く。不幸にして、そういった経験皆無の私としては何も言う資格はない(あえて体験したいとも思わない)が、現代科学では割り切れない何かが実在することだけは確かだという気はする。

○おしまいに

『手天童子』の連載が最終回を迎えた時、ファンの間でちょっとした騒ぎが起きた。この作品が、永井豪作品としては珍しく、きれいにまとまったからだ。牙の原での死闘から宇宙へ、未来へ、さらにはタイムマシン(ここは『鬼』と同じ)で平安時代へ跳び、最後は「鬼獄界」という1つの世界を破壊する大クライマックスに至るまで息もつかせぬ展開。それがジグソーパズルの各ピースが収まるべきところに収まるようにきれいにまとまっていき、しかも最終ページはホームドラマを思わせるハッピーエンドではないか！(アイアンカイザーの努力はどうなる？という疑問は、また別の機会に論じよう)

先述のNHK『歴史発見』の「酒呑童子は三度死ぬ」の中で、永井豪氏は『手天童子』を「鬼の悲しい魂を慰めるレクイエムのような物語になってしまった」と語っておられたが、永井豪作品をリアルタイムで追いかけてきた者にとっても、この作品は、まさに見えざる「天の手」に導かれて描かれた作品のように思われてならない。

だとすれば、『手天童子』は、鬼たちもまた平和を望んでいるのだという、鬼たちからのメッセージだったのかもしれない。

豪チャンが語る手天童子

最初は、アメリカの「コナン」シリーズのようなヒロイック・ファンタジーを、日本独自の感性で作れないかと思い、「鬼の世界」のヒロイック・ファンタジーを描くつもりで始めた作品だった。

ところがタイトルのイメージに引きずられたのか、ストーリーが暴走し、ヒロイック・ファンタジーというより、主人公の「自分探し」の旅、人間の内面を探る物語になっていってしまった。

最終回を描いてるとき、ものすごい量の涙が溢れ出て止まらなかった。前世の記憶だろうか？ 何か、僕自身の深い心の闇と関係あると思う。

おれは！

おれは！

悪魔人間（デビルマン）だ！

荒ぶる英雄

小林 泰三　が読んだデビルマン

（小説家）

『デビルマン』はなぜこうも我々の心を虜にするのか？　『デビルマン』、そして、その原形となったと考えられる『魔王ダンテ』を読んでまず驚かされるのがその壮大な神話的構造だろう。しかし、秩序を体現するべき「神」は断片的あるいは無個性な存在としてしか扱われない。そこで生き生きと描かれるのは方向を持たないエネルギーを持て余す「悪魔」たちと、それに翻弄される愚かな人間たちである。

両作品に登場する「悪魔」のイメージの元になっているキリスト教・ユダヤ教神話に関して我々日本人が持っている知識量は今では仏教神話や日本神話のそれを遥かに越えてしまっている。少なくとも1960年代以降に生まれた者たちにとっては、日本神話における人類の始祖「イザナギとイザナミ」よりも、「アダムとイヴ」の方がずっとポピュラーである。また、キリストの母がマリアであることを知らない者は珍しいが、釈迦の母が摩耶夫人であることを知る者は物知りの部類に属する。永井豪氏が「悪魔」の基本的なイメージをキリスト教・ユダヤ教神話から借りているのは「悪魔」を題材とするに当たっては当然のことである。しかし、その神話構造はキリスト教・ユダヤ教のそれとは完全に異質である。

キリスト教・ユダヤ教神話では「神」・「人間」・「悪魔」は完全に隔絶し、それぞれの位置は確固としており、互いに入れ替わることが不可能な不可逆的構造を持っている。正義とはすなわち神であり、神に反逆するものが悪である。それは文字どおり、天下りに人間に与えられ、疑われることすらない。神の言葉はすなわち宇宙の法則なのだ。

それに対し、永井豪氏の神話世界では「神」と人間と「悪魔」は互いに入り交わり、境界は曖昧となる。互いに区別することすら難しく、時に大きな逆転を見せる可逆的構造を持っている。

「魔王ダンテ」の前半ではふたつの組織の間の戦いが描かれる。ひとつは魔王ダンテの復活を目論む悪魔崇拝者たち、そしてもう一方は魔王の復活を阻もうとする神に仕える者たち。通常なら、物語はこのふたつの組織の戦いを軸に進んでいくと考える。ところが、実際には両組織とも魔王ダンテ登場とともに裏方に回ってしまい、その後ほとんど物語には登場しなくなる。注目すべきはこのふたつの組織が見かけ上、区別がつかないということだ。指導部の人間たちはなぜか人相が悪く、陰謀を巡らしている。部下たちは自分たちの組織の理想のためにはいとも簡単に自分の命を捨て、他人の命を奪い取ってしまう。ふたつの組織は互いに相手の鏡像になっており、その違いは相対的なものに過ぎない。

『デビルマン』において、「悪魔（デーモン）」たちは同族を殺戮し合う闘争心だけの異形の怪物であることが冒頭近くで強調されるが、最後に同族を殺し合うのは「悪魔（デーモン）」たちではなく、猜疑心により理性を失ってしまった人間たちである。そして、理性を失わなかった僅かな人間たちは人間の心を持ったまま、「悪魔（デーモン）」の肉体を持つ悪魔人間（デビルマン）へと変化してしまう。ここでも、人間と悪魔の区別は曖昧だ。

さらに、衝撃的なのは神の正体である。

『魔王ダンテ』では「神」は平和に暮らしてきた「悪魔」たちを突然に襲った侵略者である。しかも、「悪魔」の醜い姿の原因は「神」のエネルギーによるものとされている。「悪魔」は徹底的に被害者だ。「神」は「悪魔」から地球を奪い取った後、無数に分列し、人間になる。つまり、人間とは「神」の分身であり、「神」とは人類のことに他ならない。「神」・人間・「悪魔」は相対化され、区別がなくなってしまう。

『デビルマン』においてはやや趣が違う。「神」についての明確な描写はなく、「神」を親と呼ぶ魔王サタンにより、「小宇宙に命を吹き込んだ」創造主として語られるのみである。「悪魔（デーモン）」は神の予定になかった存在であったため、滅ぼされようとしたのだという。「神」の子であるサタンは弱き「悪魔（デーモン）」たちに同情し、彼らと共に神に反旗を翻す。「神」が地球から去った後、「悪魔（デーモン）」たちは二百万年の眠りにつく。目覚めた時、地球は「悪魔（デーモン）」たちにとって予定外の存在である人間に支配されていた。サタンに率いられた「悪魔（デーモン）」たちは人間を滅亡させることに決める。しかし、サタン自らがラストで述懐するように、「サタンが『神』から『悪魔（デーモン）』を守るために戦ったこと」と「デビルマンが『悪魔（デーモン）』から人間を守るために戦ったこと」は相似である。

我々は善悪に関する多くの事柄をあたかも数学における公理のように疑ってはいけないものとして受け入れてきた。「（いわゆる）自然保護は善である」（本当に自然を破壊したり、保護したりすることができるかどうかは別にして）、「人類の存続を妨害するものは悪である」、あるいは「人間の命はすべてに優先させなければならない」などと。

永井豪氏はこの思い込みを簡単にひっくり返してくれる。世の中には無条件に決まっていることなどなにもない。すべてのことは生存のための死に物狂いの闘争の果てに獲得したものばかりなのだ。最近の戦いにたまたま勝った方を「神」と呼び、たまたま敗れた方を「悪魔」と呼ぶ。残酷なほどの明快さだ。

「神」や「悪魔」は絶対的な存在ではなく、容易に入れ替わる相対的な存在であるという発見は大変な驚きであった。そして、永井豪氏に刺激された物語の作り手たちの多くは「悪魔は神の被害者であった」というテーマで大量のエピゴーネンを生み出すことになった。

二大神群間の闘争は多くの神話に共通する普遍的なモチーフである。キリスト教・ユダヤ教神話をはじめとする不可逆的構造を持つ神話の中では勝った側のみを「神」とし、負けた者は「悪魔」になる。しかし、可逆構造を持つ神話では勝った側と負けた側はそれぞれ別々の機能をもった「神」になる。例えば、日本神話では、皇祖神の一人であるイザナミや民間で大黒天と習合されているオオクニヌシなどは実は敗れた側の神なのである。

そして、二大神群の狭間で、荒ぶる神や英雄たちが生み出されていく。スサノオ、ヤマトタケル、雄略天皇、天武天皇、阿修羅王、鬼子母神……。神話や古代史の英雄たちの多くは荒ぶる英雄たちなのだ。

秩序を破壊する虐殺者から新たな秩序を担う救世主に豹変し、強烈なエネルギーを周囲にまき散らす。人々は彼らの物語に震え、そして魅了される。

『デビルマン』、『魔王ダンテ』、『凄ノ王』、『バイオレンス　ジャック』、……永井豪氏の作品に我々の心が引きつけられてやまないのは、彼らが荒ぶる者たちの系譜に連なるからではないのか？　そう、デビルマンこそは現代の荒ぶる英雄（ヒーロー）である。

豪チャンが語るデビルマン

とにかく、エネルギーのいる作品だった。
書いている時の緊張感はものすごかったが、普通の5～10倍の力を必要としたので、他の連載を次々と切りながらやっていき、これ一本に精神を集中させていった。
それでもまだ辛くて、書いては休み書いては倒れ、完成させた時には自分が燃え尽きてカスになったような気がした。
当時、自分が書いた原稿の内容を見て、自分でビックリすることがよくあったが、「まるで何か見えない力によって書かされていた」気がするこの作品は、「未来戦争への警鐘」の役割を負っているように思える。

❶『アイアンマッスル』の西脇美智子のジムを訪問
❷社員旅行で行った猿が京温泉にて　70年
❸初めてのグアム旅行にて　71年
❹ひとり雄叫びをあげる豪ちゃん　77年頃
❺スプラッタ豪ちゃん、人柄ですね
❻メキシコ旅行中、藤子F先生と　70年代後半
❼兄、泰宇氏との兄弟愛？雑誌のグラフ撮影にて　80年
❽雑誌グラフ撮影のため『ハレンチ学園』の扮装パート1　68年
❾特別手配中の男？永井豪　袋田温泉駅前にて　97年
❿『けっこう仮面3』の完成発表会でニンマリ　93年
⓫体操で鍛えた肉体美　63年

⑫『ハレンチ学園』を描いていた頃の仕事場風景
⑬初監督作品『ドス竜』では生首役を熱演(!?) 90年
⑭ダイナミックの屋上にて 77年
⑮吸えないタバコをくわえてポーズ in グアム 71年
⑯『手天童子』の取材で訪れた役行者像と 76年
⑰『ハレンチ学園』の扮装パート2 68年
⑱第1回夕張国際冒険ファンタスティック映画祭。モンティ・パイソンのTilly Jones監督と竹中直人氏 90年
⑲珍獣豪ちゃん 68年
⑳豪ちゃんのゴルフ好きは有名（本人談：ヘタだけど…）

studio GO-chang

永井豪写真館

永井豪の写真を見ていると、その人柄がよく分かる。高校生の頃の笑顔と52才の笑顔はまったく同じである。
そんな"豪ちゃん"の回りには常に人が集まる。永井豪作品の魅力は"豪ちゃん"の、人となりがあってこそ生まれるのでは。
そう思う。いや、そうなのだ。30年の歳月をたった2ページで紹介してしまう愚かさをお許しください。

DYNAMIC POLAROID GALLERY

●東京は新宿区西早稲田に建つ、ダイナミックプロダクション＆ダイナミック企画。
●漫画家、アシスタント、マネジャー、プランナーなど総勢30人の
●有能(ですよね！)なスタッフが、日夜、陰となり日なたとなり永井豪作品を支えている。
●蔦のからまる不夜城に一台のポラロイドカメラが潜入した——。

PHOTO・SHINOBU KAZE (DYNAMIC)
NAME・SHINOBU KAZE &
IKUYA KOUMORI (DYNAMIC)

出版企画部
休憩している人が多いようだ
社長自ら社員の昼の注文をとる。
社長「えーっカツ丼とざるソバ、カレーライスに、うな重ですね。」
幸森「うな重にミソ汁」社長「ハイ」

幸森氏 社長

石川先生
真ゲッターが出ますよ。
〈双葉社〉ラブラドールレトリーバー「ロボ」朝ばんお散歩。

豪班
背景をやっている。
「SF(近未来)漫画を描いてみたいです」という岩井君
ギャグマンガ家志望の奈良君
最近、永井先生の奥様からセンプー機をいただく。カラオケ得意

ダイナミック入口の「ディスプレイ」
階段を上ると制作部へ

玄関のドアを開けるとアムロちゃんが出迎えてくれるけど本物ではないゾ。念のため。

経理部
ポッターロボにあわせて赤い服を着てきた深沢さんもステキ♥(右)
車が好き、いままで無事故
カローラⅡに乗っているが
将来はワーゲンがいいという藤村さん(左)

社長室にある「ディスプレイ」
時をつげるすぐれもののキカイだ！
これも
絵が沢山のっている本だ。
オマケに字もついてるゾ。

14年前にダイナミックプロで生まれた、
とてもおとなしい猫、年のせいで
牙が4本とも、とれてしまいました。

ニャ〜

豪先生が飼っている
猫のおはぎ

社長室で仕事をする
社長
最近いい酒を飲んでいるので二日酔いが少なくなりました。

仕事をしているふりの
幸森専七氏
サングラスが怪しい
温泉、スキーが好きです。

漫画家しのだ佐々木和志先生
コロコロでキューティハニーF
を描いている
うしろ姿です。(秋田出身)
少女マンガを描いてみたいです。
セーラームーンが大好き。

豪先生のアシスタント
平岡君
最近、運動不足のせいで
足腰がいたいそうです。

アシスタントの
丸山君
仕事は手を抜かない！
ホット、時代劇のマンガを描きたい。
エロスを追求する男だ！

ダイナミック企画のフェデリコ・コルピさん
イタリアんです。
98年にイタリア、フランスで、グレンダイザー20周年、イベントを準備中！
イタリアでアニメの「グレンダイザー」
「ジーグ」を見てから日本に興味を
もち、今では日本語はペラペラです。
イタリアの[illegible]は日本で3倍で売られているそうです。

ダイナミック外観
ツタがうっそうと茂っている

出版企画部の荻野さん
ゲームをしている画面がみえる
荻野さんの実家では織物
デザインをやっています。ご注文を…
父、カズオ　母キヨコ　よろしくネ♥
ライブコンサートが好き。

豪班チーフ
安田達矢氏　仕事は
マジメだが家事もこなす。
パチンコ、カラオケ大好きだ。
酒も飲みはじめたらグラスを
はなさないゾ。鋼鉄ジーグを描いて
ました。

国忍先生
短編集「ガバメントを持った少年」
（太田出版）が最近でました。
そのサイン会で沢山の方がきていただきカンゲキ！

アシスタントの
丸山君
フィギュア作りが得意
デビルマンレディ、ビンテージ漫画
館のペン入れ、企画の仕事で
キューティーハニーのデザインなどでプロに
泊り込みで大忙し。

豪班
原稿がムゾウサに置いてある。

バイオレンスジャックの
目線から仕事ぶりを
見る。

経理の国政さん
上武カントリークラブで
一九九七・一・三に
エイジ
一二〇ヤード　ヤッタネ

ダイナミック企画の徳原君。
版权担当
机のまわりを整理しろ！

ダイナミック入口の
ディスプレイ
フィギュアなどいっぱい

ダイナミック企画
白鳥くん
コルピさんのお手伝い

出版企画部
大越君　サッカーが
好きです。
パソコンで遊んでいる
ところ

ダイナミック企画の
永井兼次常務
書類が好き
←
カワイイ孝昌くん（三才半）に
毎日ベッタリというパパさん
です。

豪班の國取　星君（左）
学園もの、時代劇マンガを描き続ける。
ダイナミックで一番いい男
寺田君、格闘技大好き
人間です。（右）

アシスタントもやっている
田中成治先生
デビルマンレディの下描きをしています。
格闘技ファンであり
セーラー服マニアでもある。
新婚です。オメデトウ！

list of his work

1967……………………………………………………1976

全ては「目明しポリ吉」からはじまった。

1967

目明しポリ吉　（ぼくら・11月号）
ヤダモン（原作：うしおそうじ・ぼくら・12～'68.7月号）

1968

夕日の剣マン　（別冊少年マガジン・1月号）
ちびっこ刑事ちゃん　（別冊まんが王・1/15号）
じん太郎三度笠　（少年マガジン・2/4～3/3号）
ハナの三四郎　（別冊少年マガジン・2/20号）
三匹の剣マン　（少年マガジンコミックス・春の特大号、初夏号、夏季号）
豪ちゃんのふあんたじい・わらうどバン（COM・4月号）
地獄の剣マン　（別冊少年マガジン・4、8、9号）
馬子っこきん太　（まんが王・5～'69.12月号）
いざり市物語　（COM・5月号）
荒野の剣マン　（少年マガジン・6/23～7/14号）
展覧会の絵　（COM・7月号）
ハレンチ学園　（少年ジャンプ・7/25～'72.9/25号）
アラー君　（ぼくら・8～'69.10月号）
電撃四郎イナズマ作戦　（別冊まんが王・8/15号）
風天忍法帳　（少年ジャンプ・8/22号）
ラ・サムライ　（COM・9月号）
ブラボー!! 先生　（少女フレンド・9/7～10/1号）
ウスラセブン　（少年ジャンプ・9月26号）
会心作　（COM・10月号）
新撰組そまつ記　（少年ブック・10月号）
パンジーちゃん　（なかよし・11月号）
くいしんボクちゃん　（小学一年生・12月号）
レシーブちゃん　（なかよし・12月号）

1969

なぞなぞぼうやXくん　（小学1年生・1～3月号）
ウルトラスパイヒゲゴジラ　（少年ブック・1月号）
ゆめの世界のマリちゃん　（なかよし・1月号）
ごうけつミカちゃん　（なかよし・お正月増刊号）
わんぱく野郎のメカニック大戦争　（少年マガジン・1/1号）
目明しポリ吉　（COM・1月号）
ファイティングパンツくん　（少年ブック・2月号）
キッカイくん　（少年マガジン・2/2～'70.11/8号）
ダイマチ先生　（なかよし・2月号）
きまぐれ教室　（りぼんコミック・2月号）
女番長ほういん大子　（少年画報・3月号）
ハンサムくん　（なかよし・3月号）
みがわりパンジーちゃん　（なかよし・3月号）
ハンターくん　（少年ブック・3月号）
コイビトくん　（少年ブック・4月号）
スイートちゃん　（少女フレンド・4/22～5/27号）
ファニーボーイ　（ファニー・5月号）
猛烈デタラメ漫画シリーズ　（ジョーカー・5/9～8/4号）
ピンキーの恋のキゼツ　（りぼん・6月号）
スイートちゃん　（少女フレンド・7/8～12/25号）
あばしり一家　（少年チャンピオン・8/10～'73.4/9号）
学園番外地　（少年画報・9/8～'70.9/22号）
西部の用心棒マカロニちゃん（別冊まんが王・9/15号）
豪ちゃんのハーレーざんこく笑　（少年マガジン・9/28～12/21号）
大盗賊　（別冊まんが王・秋季号）
チャンクン　（ぼくらマガジン・11/18～12/26号）

1970

さすらい学徒　（まんが王・1～5月号）
鬼　（少年マガジン・1/1号）
こまっチャーム　（少女フレンド・1/6～6/23号）
ひどい巨塔　（ビッグコミック・1/10号）
すきすきスキーちゃん（少女フレンド・1/20、1/27号）
怪傑ウルトラスーパーデラックスマン　（ぼくらマガジン・2/17～9/22号）
GO! GO!GOちゃん笑（別冊少年マガジン・2～7月）
ガクエン退屈男　（ぼくらマガジン・2/17～9/22号）
GO!豪!ナンセンス　（少年サンデー・3/22～7/5号）
吸血鬼狩り　（別冊少年マガジン・4月号）
人類の進歩と不調和（サンデー毎日増刊劇画・5/9号）
小説・天国と地獄　（プレイコミック・6/27号）
豪ちゃんのふしぎな世界（少年サンデー・7/12号）
まろ　（少年サンデー・7/19～'71.6/27号）
ボーイハンター　（女学生の友・8～9月号）
天国と地獄　（ぼくらマガジン・8/11号）
社員はV　（週刊読売・9/11号）
かいじゅうはかせポコペンちゃん　（小学一年生・9～'71.1月号）
三四郎　（漫画サンデー・9/12号）
キャプテンパースト　（SFマガジン・11月臨時増刊号）

［ＴＶ］

ハレンチ学園　（東京12ch・10～'71.3月）

［劇場］

ハレンチ学園　（にっかつ）
ハレンチ学園 身体検査の巻　（にっかつ）
ハレンチ学園 タックル・キッスの巻　（にっかつ）

1971

魔王ダンテ　（ぼくらマガジン・1/1～5/31号）
ゴルゴ17（ハイティーン）・18・19　（ビッグコミック・1/10号）
チャカぽこ　（幼稚園～小学六年生・2～8月号）
野牛のさすらう国にて（少年マガジン・1/24、1/31号）
百円病院シリーズ　（別冊少年マガジン・4月号）
幻想恐怖絵噺　（少年マガジン・4/11～4/25号）
永井豪読み切りシリーズ　（少年ジャンプ・6/29～7/19号）
やっこらショ　（COM・7月号）
ズバ蛮　（少年サンデー・7/14～12/26号）
ネッけつ団　（少年ジャンプ・8/2～8/16号）
江の島ドジラ　（少年マガジン・9/5号）
白い世界の怪物　（少年マガジン・12/19号）

［劇場］

新ハレンチ学園　（にっかつ）

1972

オモライくん　（少年マガジン・1/1～6/4号）
あにまるケダマン　（少年サンデー・1/16～10/22号）
がんばれスポコンくん(少年キング・1/9、1/16～2/13号)
雷人サンダー　（たのしい幼稚園・5～7月号）
デビルマン　（少年マガジン・6/11～'73.6/24号）
マジンガーZ　（少年ジャンプ・10/2～'73.8/13号）

［ＴＶ］

デビルマン　（ＮＥＴ・7～'73.3月）
マジンガーZ　（フジ・12～'74.9月）

1973

ドリーマン　（少年サンデー・2/18号）
廃人20面チョ　（少年ジャンプ・3/12号）
もーれつガリベンくん　（少年サンデー・4/22号）
霧の扉　（少年マガジン・5/13号）
ちょっとだけよ！　（劇画ゲンダイ・6/3号）
白雪姫　（少年チャンピオン・6/4号）
はれんちレンコンマンちゃん(少年サンデー・6/24号)
バイオレンスジャック　（少年マガジン・7/22～'74.9/30号）
ドロロンえん魔くん（少年サンデー・9/30～'74.3/31号）
キューティーハニー　（少年チャンピオン・10/1～'74.4/1号）
マジンガーZ　（テレビマガジン・10～'74.9月号）

［ＴＶ］

ドロロンえん魔くん　（フジ・10～'74 .3月）
キューティーハニー　（ＮＥＴ・10～'74.3月）

［劇場］

マジンガーZ対デビルマン　（東映動画）

1974

真夜中の戦士　（少年ジャンプ・4/22号）
女子大生　（週刊サンケイ・4/26～5/3号）
快ケツ平社員　（週刊ポスト・4/27号）
ドンケツ王　（少年サンデー・5/19号）
バクラツ教室　（少年チャンピオン・7/22～8/5号）
イシャシャしゃん　（問題小説・8～10月号）
おいら女蛮（少年サンデー・8/4～'76.1/18、1/25号）
けっこう仮面　（月刊少年ジャンプ・9～'78.2月号）
グレート・マジンガー　（テレビマガジン・10～'75.10月号）
イヤハヤ南友　（少年マガジン・11/3～'76.4/28号）
ダイガク無籍人（週刊プレイボーイ・11/12～'75.9/2号）

［ＴＶ］

グレートマジンガー　（フジ・10～'75.9月）

［劇場］

マジンガーZ対暗黒大将軍　（東映動画）

1975

シャーヤッコ・ホームズ　（月刊少年マガジン・1月、'77.2月、'79.2～9月号）
手天童子(邪神戦記)　（プリンセス・2月号）
ハゲ髪鬼毛毛一発　（少年ジャンプ・4/21号）
ドキドキどし～ん!!　（マーガレット・6/1号）
リョコー少年団　（増刊少年キング・8～'76.7月号）
心霊探偵オカルト団（少年キング・8/18～'76.5/24号）
UFOロボ グレンダイザー　（テレビマガジン・10～'76.5月号）
シャーヤッコ・ホームズ（フォーライフ・12月号）

［ＴＶ］

鋼鉄ジーグ　（ＮＥＴ・10～'76.8月）
ＵＦＯ ロボグレンダイザー（フジ・10～'77.2月）

［劇場］

グレートマジンガー対ゲッターロボ　（東映動画）
グレートマジンガー対ゲッターロボG空中大激突　（東映動画）
宇宙円盤大戦争　（東映動画）

1976

女賊ふろとかげ　（少年ジャンプ・3/29号）
ビバ!!女子プロレス（週刊プレイボーイ・4/17号）
混乱列島　（原作：筒井康隆・週刊小説・4/26～9/13号）
チェンジ！さぶ（少年アクション・5/17～7/12号）

list of his work

1976……………………………………………………1987

新境地を開拓。視線はさらに深く鋭く。

へんちんポコイダー (テレビマガジン•6、10、'77.1月号)
キングボンバ　（てれびくん・6～'77.7月号）
ハマグリどっせ～!!（週刊明星・6/13～'78.6/4号）
ガルラ　（テレビマガジン・7～'77.2月号）
どんがら三銃士　（小学二年生・7～'77.3月号）
手天童子　（少年マガジン・9/5～'78.4/23号）
ビバ！女ターザン　（週刊プレイボーイ・10/12号）
いちもつクン　（女性自身・10/20～'77.3/3号）
怪傑痴仮ン面（プレイコミック・10/28、11/25 号）
ハレンチ学園　（月刊少年ジャンプ・11月号）
無頼・ザ・キッド（マンガくん・11～'78.4/25号）

［ＴＶ］

グロイザーＸ　（東京12ch・7～'77.3月）
バトルホーク　（東京12ch・10～'77.3月）
プロレスの星 アステカイザー　（NET・10～'77.3月）

［劇場］

グレンダイザー対グレートマジンガー（東映動画）
グレンダイザー•ゲッターロボＧ•
グレートマジンガー決戦大海獣　（東映動画）

1977

氷壁の母　（増刊少年ジャンプ・1月号）
バイオレンスジャック
（月刊少年マガジン・1～'78.12月号）
ファンタじい　（月刊少年ジャンプ・3月号）
電送人バルバー　（テレビマガジン・4～10月号）
あばしり一家•ゴエモン星人 (プレイコミック•4/7号)
おさかん家族（プレイコミック・4/21号～'78.4/13号）
豪ちゃんのあら？えっ！さっさ～
（サンジャック・7～'78.1月号）
遺品　（女性セブン・8/31号）
バイオレンスカー炎の鷹
（少年キング・10/3～'78.1/23、1/30号）
超人間現わる　（マンガ少年・12月号）

1978

カス闘技世界一決定戦 キッカイ対オモライ
（少年マガジン・1/1号）
ガリキュラろぼちゃーど・キーン
（少年ジャンプ・1/30～2/6号）
若バカさま　（少年キング・2/20～7/13号）
鏡の中の宇宙　（単行本収録・3/30）
第三時中華大戦　（月刊ジャンプ・3月号）
超マン　（月刊少年ジャンプ・4～'79.3月号）
おちこぼれクン　（少年ジャンプ・4/24号）
黒の獅士　（少年マガジン・5/28～'79.6/10号）
永井豪フェスティバル（月刊少年マガジン・5～7月号）
スペオペ宙学　（少年サンデー・8/10～'79.5/20号）
へんきんタマイダー（マンガくん・8/10～'79.3/25号）
魔人戦車バルドス　（少年キング・9/5号）
炎魔地獄　（マンガ少年・9月号）
ビバ！スターウォーズ（週刊プレイボーイ・11/3号）

［ＴＶ］

魔女っ子チックル　（テレビ朝日・3～'79.1月）

1979

都市M1　（増刊少年マガジン・1/15号）
新デビルマン　（バラエティ・2月号）
ゴエモン先生（月刊少年ジャンプ•4～'80年7月号）
新デビルマン　（原作：第1話・辻真先 第3話・高円寺博・
増刊少年マガジン・5/25、'80.1/25、9/15、'81.3/16、5/8号）
花平バズーカ　（原作：小池一夫・ヤングジャンプ・
6/7～'82.1/7、1/14号）
00学園スパイ大作戦（少年チャレンジ•6～'81.7月号）
凄ノ王（どくろおう）　（少年マガジン・7/22～'81.4/8 号）
[illegible]の館　（女性セブン・7/27～9/26号）
UFOから来た少年ムー　（ムー・8～'80.春季号）
いや～んハニー　（プレイボーイ・10～'80.5月号）
思い出のＫ君　（少年ワールド・12月号）
シューマン夫人とブラームス・愛のコンチェルト
（サウンドレコパル・12月号）

1980

ゴロンボ探偵社　（プレイコミック・1/24号）
蟲　（増刊少年マガジン・4/15号）
グッバイ・ボーイ（少年マガジンヤング別冊・4/16号）
青春一番　（少年マガジンヤング別冊・6/5号）
Ｘボンバー　（月刊少年ジャンプ・6月号）
青春一番　（ヤングマガジン・7/7～'81.5/18号）
マーダー　（リュウ・9/1号）
ある日少女は…（原作：高円寺博・漫画ゴラク・11/20号）

［ＴＶ］

Ｘボンバー　（フジ・10～'81年3月）

1981

まぼろしパンティ（月刊少年ジャンプ・1～'82.5月号）
まいるど７　（少年チャンピオン・5/1～10/30号）
魔法人形ペンドラ　（よいこ・6～'82.8月号）
魔獣大陸（原作：川又千秋・野生時代・6～'84.1月号）
ハレンチ学園vsトイレット博士（ヤングジャンプ）
花の独身チョンガーマン　（増刊ヤングジャンプ）
マリコ・ワイルド　（原作：川又千秋・ヤングジャンプ）
DON！　（増刊少年マガジン・7/10号）
00スパイ春太郎
（少年チャレンジ・7/10～'82.1/22号）
「族」狩り　（漫画ゴラク・8/7号）
This is 大介　（少年マガジン・8/11～12/15号）
真夜中の戦士
（増刊少年マガジン・9/11～'82.10/29号）
シンデレラ騎士（マーガレット・10/9～'82.4/23号）

1982

女子プロレス2100年（ジャストコミック・2月号）
スーパーにゃん　（コミックボンボン・3～6月号）
翼の人々
（原作：団龍彦・ヤングジャンプ・3/18～7/22号）
青春の雨　（増刊ヤングマガジン・4/26号）
鉄戦士ムサシ（コロコロコミック・4～'83.3月号）
快ケツ婦警さん　（漫画アクション・11/28号）

［ＴＶ］

ロボッチ　（テレビ東京・10～'83.6月）

1983

夢少女レイ　（ヤングマガジン・1/17号）
アイアンマッスル（少年マガジン・2/2～11/30号）
ぼくたちドーテー隊　（ヤングマガジン・3/17号）
超少女UFO　（中一時代・4～'84.3月号）
おれのロリータ　（週刊プレイボーイ・4/5号）
アブNO学園　（ヤングマガジン・4/18～6/20号）
鉄の処女JUN
（ビッグコミックススピリッツ・5/15～11/15号）
恋の傷みは超特急　（ジャストコミック・5月号）
鬼 [ONI]　（エピック・6月号）
バイオレンスジャック
（漫画ゴラク・8/5～'90.3/23号）
超能力戦士ジェネス
（原作：永井秦宇・増刊SFアドベンチャー）
バラバンバ　（スコラ・10/13～'84.8/9号）

［ＴＶ］

ゴーバリアン　（テレビ東京・7～'83.12月）

1984

超能力戦士ジェネス
（原作：永井秦宇・SFアドベンチャー・2～5月号）
ドジラセンセー（コロコロコミック・10～'85.8月号）
ゴッドマジンガー　（小学館・描き下ろし）

［ＴＶ］

ゴッドマジンガー　（日本テレビ・4～'84.9月）

[OVA]

超能力少女バラバンバ　（ＪＨＶ）

1985

先セーション　（漫画アクション・5/29～8/5号）
凄ノ王伝説・火神子（バラエティ・6～'86.3月号）
コミック郵性省　（野生時代・7月号）
ピンクのグリーン　（BIGゴルフコミック）
イソギンチャクサマー　（平凡パンチ・9/9号）

［ビデオ］

マジンガーＺ・ＴＶシリーズ　（東映ビデオ）
マジンガーＺ・劇場版１・２　（東映ビデオ）
キューティハニーＴＶシリーズ１　（東映ビデオ）

[OVA]

夢次元ハンター ファンドラ レム ファイト編
（日本コロムビア）

1986

マシンガン刑事さぶ（コミックウー・1/18～5/19号）
その後のヒゲゴジラ　（AVIC・8月号）
サムライ日本
（ビッグコミックススピリッツ・8/25～10/20号）
ランボーセンセー（少年宝島・12/19～'87.3/6号）

［ビデオ］

マジンガーＺ・ＴＶシリーズ２・３（東映ビデオ）
マジンガーＺ・劇場版３　（東映ビデオ）
ＵＦＯロボグレンダイザー・ＴＶシリーズ
（東映ビデオ）
キューティーハニー・ＴＶシリーズ２　（東映ビデオ）

[OVA]

夢次元ハンター ファンドラ２ デッドランダー[illegible]
（日本コロムビア）
夢次元ハンター ファンドラ３ ファントス編
（日本コロムビア）
バイオレンスジャック　ハーレムボンバー
（ポニーキャニオン）

1987

夢必殺拳　（月刊少年マガジン・1～8月号）
バラバンバ2（コミックバーガー・4/14～11/15号）
新・凄ノ王　（COMICハンマー・7/14号）

［ビデオ］

マジンガーＺ・ＴＶシリーズ4　（東映ビデオ）
グレートマジンガー・ＴＶシリーズ（東映ビデオ）
キューティーハニー・ＴＶシリーズ3（東映ビデオ）

[OVA]

デビルマン誕生編　（キングレコード）

list of his work

1988……………………………………………………………1997

漫画家生活30周年。そしてここから。

1988

フルメタルレディ　（ベアーズクラブ・8月号）

［OVA］

バイオレンスジャック・地獄街　（JHV）

1989

バブルエンジェル　（漫画サンデー・1/3号）

獣神ライガー　（コミックボンボン・3～'90.3月号）

凄ノ王伝説・闇の魔人編　（野生時代・4～'90.3月号）

凄ノ王伝説外伝　（コミックコンプ・5～6月号）

スーパー西遊記

（コミックGENKI・夏の号～'90.冬の号）

［TV］

獣神ライガー　（テレビ朝日・3～'90.1月）

［実写ビデオ］

永井豪のこわいZONE　（バンダイ）

［ビデオ］

マジンガーZ必殺技コレクション1～2　（東映ビデオ）

［OVA］

手天童子・憑鬼の章　（日本コロンビア）

1990

株式会社徳川家康

（原作：新宮正春・報知新聞・1月～9/28号）

ZIPANG　（ベアーズクラブ）

カーマスートラ

（構成：長谷邦夫・徳間書店・描き下ろし・3～11月）

RED STRINGS　（週刊ヤングジャンプ）

霊界探検　（ベアーズクラブ）

マジンサーガ

（週刊ヤングジャンプ・12/13～'92.3/15号）

［実写ビデオ］

空想科学任侠伝 極道忍者ドス竜　（東北新社）

永井豪のこわいZONE 2　（バンダイ）

けっこう仮面　（JHV）

［ビデオ］

バイオレンスジャック・ハーレムボンバー

（大陸書房）

バイオレンスジャック・地獄街1～2　（大陸書房）

マジンガーZ・TVシリーズ5　（東映ビデオ）

［OVA］

手天童子・降魔の章　（日本コロムビア）

デビルマン・妖鳥シレーヌ編　（講談社・バンダイ）

バイオレンスジャック・ヘルスウィンド　（JHV）

1991

感動温泉　（フロム・エー・5/28号）

ミストストーリー　（月刊ジャンプ・6～'92.9月号）

アニマード　（週刊ファミコン通信・7/26～'92.4/10号）

一発百万申し受け候

（原作：高橋三千綱・Mr.ゴルフ・8～'92.3月号）

カントクくん　（ヤングジャンプ ワーキングデビュー）

［実写ビデオ］

美少女探偵　まぼろしパンティ　（マグザム）

［LD］

劇場板マジンガーZ対デビルマン　（東映ビデオ）

［OVA］

手天童子・鉄鬼の章　（日本コロムビア）

けっこう仮面1　（日本コロムビア）

CBキャラ永井豪ワールド・

オレは悪魔だデビルマン!　（バンダイ）

CBキャラ永井豪ワールド・

オレは強いぞ!マジンガーZ　（バンダイ）

CBキャラ永井豪ワールド・

これが最後だ!バイオレンスジャック　（バンダイ）

手天童子・鬼獄の章　（日本コロムビア）

カーマスートラ　（東宝）

1992

ヒトコママンガ　（コミック産経・3/17号）

ロボチョイA

（月刊コロコロコミック・6～'93.7月号）

マジンサーガ　（ベアーズクラブ）

Cutieハニー　（週刊SPA!・7/5～'93.4/7号）

株式会社徳川家康　（原作：新宮正春・集英社・

単行本第5巻描き下ろし・7月）

石川県環境漫画

［実写ビデオ］

永井豪のホラー劇場　霧加神

（タキ コーポレーション）

永井豪のホラー劇場　マネキン

（タキ コーポレーション）

けっこう仮面 2　（JHV）

おいら女蛮　（タキ コーポレーション）

［LD］

劇場版マジンガーZ対暗黒大将軍　（東映ビデオ）

劇場版グレートマジンガー対ゲッターロボG

（東映ビデオ）

劇場版UFOロボグレンダイザー対グレートマジンガー　（東映ビデオ）

劇場版グレンダイザー・ゲッターロボG、グレートマジンガー　決戦！大海獣　（東映ビデオ）

キューティーハニー・TVシリーズ1～4

（東映ビデオ）

［OVA］

けっこう仮面 2　（日本コロムビア）

あばしり一家　（ポニーキャニオン）

鉄の処女JUN　（日本コロムビア）

花平バズーカ　（日本クラウン）

おいら女蛮　（日本コロムビア）

黒の獅士・陣内篇　（日本コロムビア）

1993

闇の宴　（小説中公・1～'94.9月号）

ドラグ恐竜剣（月刊コロコロコミック・8～'93.3月号）

バイオレンスジャック

（日本文芸社・描き下ろし・11月）

［実写ビデオ］

けっこう仮面 3　（JHV）

［LD］

キューティーハニー・TVシリーズ5　（東映ビデオ）

デビルマン・TVシリーズ1～3　（東映ビデオ）

1994

THE BIRD　（週刊ヤングジャンプ・4/14～9/1号）

平成ハレンチ学園（週刊漫画ゴラク・5/13、8/26号）

大牙　（マンガボーイズ・7～'95.5月号）

ダンテ神曲・地獄編

（講談社・上下巻描き下ろし・9月）

勇士ダンダン　（少年王・10～'95.7月号）

ハレンチ紅門マン遊記

（週刊漫画ゴラク・12/16～'95.6/2）

［実写ビデオ］

獣神サンダーライガー・怒りの雷鳴

（バンダイビジュアル）

［LD］

デビルマン・TVシリーズ4～5　（東映ビデオ）

［OVA］

新キューティーハニー1～4　（東映ビデオ）

1995

メモリーグラス　（チャンピオンJack・3/1～'96.2号）

ダンテ神曲・天国編（講談社・描き下ろし・10月）

ヴィンテージ漫画館（クールトランス・11～連載中）

平成ハレンチ学園

（週刊漫画サンデー・12/5、12/12号）

ラブリーエンジェル（週刊宝石・12/～'97.4/10号）

［実写ビデオ］

平成ハレンチ学園　（タキ コーポレーション）

［LD］

マジンガーZ・TVシリーズLD-BOX1～3

（東映ビデオ）

［OVA］

新キューティーハニー5～8　（東映ビデオ）

平成ハレンチ学園　（ピンクパイナップル）

ハレンチ紅門マン遊記　（ピンクパイナップル）

1996

神話大戦　（徳間書店・描き下ろし・1～3月）

ゴセンゾくん　（別冊コロコロコミック・8～'97.2月号）

［LD］

ドロロンえん魔くん・TVシリーズ　LD-BOX1

（東映ビデオ）

プロレスの星アステカイザー・TVシリーズ

LD-BOX（円谷コミュニケーションズ）

1997

デビルマンレディー（週刊モーニング・1/30～連載中）

buzz janx　（BUZZ・3～連載中）

吸血温泉へようこそ（コミックバズーカ・5～7月号）

サムライワールド 1～6

1.豪談児雷也 2.豪談霧隠才蔵 3.豪談猿飛佐助

4.豪談後藤又兵衛 5.豪談真田軍記 6.豪談荒木又右衛門

（中央公論社・描き下ろし・4～9月）

［実写ビデオ］

吸血温泉へようこそ　（ミュージアム）

［TV］

キューティーハニーF　（TV朝日・2/15～放映中）

［LD］

グレートマジンガー・TVシリーズLD-BOX1～2

（東映ビデオ）

●その他の作品

鬼の首風雲録　（面白半分・5～'78.1月号）

魔界水滸伝　（イラスト・野生時代'81.10月号）

GO! 豪! シアター　（エッセイ・獅子王'85年）

幻のデビュー作

ファンならご存じのとおり永井豪のデビュー作は『目明しポリ吉』。
しかしその数か月前に「ぼくらマガジン」誌上で掲載されるはずだった、いわば幻のデビュー作品が、この『ゴー・ゴー スイート』だ。
諸般の事情により日の目を見ることはかなわなかったが、テンション、スピード感、クオリティ、いずれをとっても。天才の出現を予感させるには充分な内容。
本名の永井きよしがクレジットされている。唯一の“作品”としても大変貴重な資料である。本を横にして読み進めて頂ければ。

完全収録

ゴー・ゴー スイート

永井きよし

夏休み・新人ゆかいまんが特別プレゼント

ここは、ひみつ機関ポンコツの一室。

ふーむ

ゴシゴシ

こんどのしごとはだれにやらすじゃーええのがおるかのー

英国情報部には、ジェームス＝ボンド。

アンクルは、ナポレオン＝ソロ。

そして、ポンコツには！

そうだおるぞ！

ガバッ

００１ちゃんマッタク＝スイートがいる！

するどいかんさつりょく。

じろりラーメンのやきぶたがのこっているな

そして、すばやいどうさ！

いやんいやん！

せっかくたのしみにのこしておいたのに

モグモグ クチャクチャ

ちくしょう！こんどのきけんなしごとはおまえがやれー

ギクッ

やりゃあいいんだろうやりゃあ！いちいちどなるなー

ひみつ書類をまもるしごとだできるかな

なんのひみつ書類なの？

ひみつだから作者にもわかんないよーん

あれっ書類がない！

これだろ！

あったこれはどうも……

㊙書類 コレハヒミツナノデコレヲヨンデモワカラナイ

やっおまえは！

きさまは
敵の
ひみつ結社
ブラッシュの
エージェント
だな
ほっほほ
書類は
いただ
きね
あばばば
ばー
あばよ
スイート
びっくり
したな　もう
三階から
とびおり
ちゃった
ばか!
なにを
してる
おまえも
とびおりて
おいかけろ
とったの
こうふん
なんかして
ひみつ
書類を
ぬすまれ
たんだぞ
そのことなら
しんぱい
ないよ
ついせき用の
発信器を
つけといた
わさ
でかした
スイート
ようやった
さっそく
ついせき
しろ!
キュウ
おまえに
アタッシュ=
ケースと
アストン=
マーチンを
やるぞ!
うききき
かっこいい
えへへへ
ボンドが
質入れ
したのを
かったんだ
だいじに
つかえ
あれだ
あの
ぼろ車
が……

ポンコツ
みためはほろ車だが性能はおちてないいっといで！
いってまいりまちゅ
さすがはボンドの車だ新兵器がそろっているぞ
さっそくついせき用レーダーをつけよう
これですぐわかるぞ
レーダーのかわりにテレビがついているぞ
こまったまいったついせきできないぞ
しめたっやつの車がいるぞ！
スイートめおってきたね
これでもくらえ！
へっボンドの車にはたまよけがついてらあ
えへへへこれでもうだいじょうぶだ
おかしい!?たまよけをだしたのに……

あきゃあ たまよけは うしろに ついて いるのかあ

ええい こっちも マシンガンで 応戦だ!

カチ…

シャワー

この車 なんで シャワーが ついてんだ?

パチ

マシンガンは こっちかな

カチ

あっ

きゃはは なんだ こりゃ

くちゅぐったい! 自動マッサージ器か

きゃははは

くだらん! ボンドめ なんで こんなもの つけるんだ

こんどこそ ほんとの マシンガンだろうな

カチ

ピューー!

アンディー

(これは、あーれーを、英語てきに発音したものである。)

おほほほ あの人 ばかね ばかばかね

くそっ

まだ まだ あきらめないぞ おれって しつこいんだなー

やつめ ヘリコプターを よういしていたな!

うひひひ あんたのとこ ヘリコプター ないんでしょう おねだん たかい たかい のよ

おのれ 気にしてる こと いったな!

あたし しつこい 人きらい ころしちゃ おうっと

わっ

ひゃー ○○1 ちゃん 危機一発

む、かわしたな かわしちゃ いやーん

こんどは よけちゃー いや! ねっ

カチッ

グォー!

ピューー

あれー はくりょくの ある ゆかい まんがだこと

はあ
はあ

アタッシュ＝ケースで
はんげきだ
えへへへ
おもしれえぞ

カチ

げほげほ
げほん
アタッシュ＝ケースは
まともに
あけると
さいるい
ガスが
でるんだっけ

組たて
ライフル
よし
これさえ
あれば！

きてー
ちょうだい

組たて
かたを
まちがえた
ようよ

やった
ようね
スイート！
アーメン

まだ
まだよ

よくもぼくの服をぼろぼろにしたな

くやしいーばか!

ピューー

だはー

あれえあのぼうし武器だったのか

あっ

きゃあこっちへおちてくる

いやーんこないで

あれー

きゃー

ボカ

ボカ

ボカ

うひゃーひゃー

わーい。ひみつ書類はとりかえしたぞ

この作品を出版社に持ち込み、力量を認められて、マンガ家デビューが決まりました。
ボクは本来ストーリーマンガ家志望だったのですが、
石森プロでのアシスタント生活が忙し過ぎたため、
時間をかけずに書けるギャグマンガで勝負することにしました。
これは、アシスタント業をやりながら猛スピードで描き上げたものなので、
今あらためて見直すと、雑なところが目に付いてヒヤ汗ものです。
しかし、その後の作品に見られる持ち味や要素がたくさん入っているので、
紛れもなく、ボクのマンガ家人生はこの作品でスタートしたと言えるでしょう。

1997　永井豪

●一部文字にカスレ、ニジミ等がみられますが、なにぶん30年前の印刷、ご容赦いただければ幸いです。また、原稿を提供してくださった永井豪ファンクラブの会長・山岡[illegible]一氏には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

戦うマンガ家ここにあり　永井 豪

戦ってきた。無我夢中で戦い続けてきた。今も、そしてこれからも戦っていこうと思っている。「何と？」、もちろん「マンガ」とである。

僕がマンガ家の道に踏み込んでから、何と30年もの年月が経ってしまったそうだ。何故「そうだ」と伝聞調にしたかというと、実は当人である僕自身に、そんなにも長い年月、マンガ家をやり続けてきたという自覚がまったくないからなのだ。

確かに30年といえば、世の中が一変するに足る、充分長い時間である。僕がデビューした1967年には、ツイッギーの登場により世界中にミニスカート・ブームが巻き起こり、日本の女性たちもミニスカで街を闊歩していた。そして今、再びミニスカが流行っているが、最近の日本女性のスタイルの良さといったら、30年前のツイッギーもまっ青！である。日本人の体型一つとっても、30年という年月のもたらす変化はスゴイ。

しかし、僕は常に「前しか見ない」性格で、昨日のことさえすぐに忘れてしまい、意識はいつも明日、来週、来年のスケジュールに向いていて、思いは数十年先の方に飛んでしまっている。さらに言うと、過去に関しては良いことだけしか覚えていないし、未来についても楽しいことしか思い浮かばない。こんなオメデタイ性格だから、ここまで続けてこられたのかもしれない。

だからこの度、30年ということで頻繁にインタビューを受け、過去の出来事や当時の心境について質問される度に、意識の回路をなかなか過去モードに切り替えられず、アタフタしている。心が次回のストーリー展開や、次に描きたい作品、将来したいことの方に向いてしまっているからだ。

さて、僕にとって「30年」とは一体何を意味しているんだろう？　一つだけ言えるのは、「マンガ」という表現手段が、30年間やそこらやってきただけでは極めることの出来ない、実に奥の深い手強いヤツであるということだ。

ところで、僕はいつも「漫画」という言葉を使うときに、カタカナで「マンガ」とひらくことにいている。漢字の「漫画」には、明治時代の古い漫画を連想してしまう。漫画を「マンガ」と表記することにより、日本の漫画の枠を超えた、何か新しいインターナショナルなメディアになるような気がして、僕はかなり昔から日常的にカタカナ表記を用いることにしている。

果たして、今や日本のマンガは世界的なブームになり、ＭＡＮＧＡといえば日本製コミックスを意味する言葉として海外で通用するほど、インターナショナル文化へと成長を遂げた。これも30年の歳月がもたらした変化のひとつと言えるだろう。

僕が30年間戦い続けてきた「マンガ」とは一体なんであろう？　それは、絵で表現するドラマであり、笑いであり感動であり、アートであると思う。

表現手段としてのマンガは、極めて奥が深く、しかも幅が広い。作家一人一人によって、全く違ったアプローチの仕方が可能であり、中心となるキャラクターひとつとっても、人間を写真のようにリアルに映し出して現実的な日常を切り取ることも可能なら、とても人間の姿とは思えぬ程デフォルメされたキャラクターに、哲学的で意味深なセリフを吐かせ、大バカをやらせてそのギャップの面白さをアピールすることも可能である。つまりマンガは、映画以上にナンデモアリの表現手段なのだ。

まったく、トンデモナイ化け物、無限とも思える表現手段に、首を突っ込んでしまったものだと思う。「マンガ」を手なづけるには30年なんかじゃとっても足りやしない、というのが現在の正直な気持ちである。

それでも、僕の場合ギャグマンガから始められたのはとてもラッキーッ！　だったと思っている。もともと、ストーリーマンガ志望だったのだが、石森プロでのアシスタント生活が余りに忙しすぎて、絵の仕上げに時間のかかるストーリーマンガは描けなかったため、簡単にできるギャグマンガでデビューしたのであった。しかし、『ハレンチ学園』の大ヒット以後、数多くのギャグマンガを描き続けたことで、マンガを描くうえで、一番大切なことに気付くことができたし、ストーリーマンガを描くようになってからも、表現の幅を広げられるという意味で、とても大きな収穫となった。

「マンガを描く上で大切なこと」とは、楽しみながら描くということに尽きると思っている。ギャグマンガを描いていた頃、僕は自分のギャグがオカシくてオカシくて、大笑いしながら描いていた。『ハレンチ学園』の時も、夜中に笑いが止まらなくて困ったことも度々で、アシスタントたちも一緒になって笑い転げながらやっていた。描くのが楽しいので、死ぬほど忙しいことも、世間から非難されていることも、まったく気にならなかった。

ストーリーマンガを描くようになってからも、「楽しんで描く」という僕の基本姿勢は少しも変わっていない。ギャグとストーリーでは楽しさの要素は違うのだが、自分が楽しんで描くことが、作品をグイグイ引っ張っていく原動力になっていると思う。

楽しんでやってきたマンガの道であるが、もちろん辛いことは山ほどある。それぞれの雑誌の編集方針に従わなければならないし、読者の期待に応えなければ、アッという間に連載中止に追い込まれる。力を込めて生み出したキャラクターが充分に活躍できぬまま終わってしまうのは、自分の子供を交通事故で死なせてしまったように悲しい。そんな時には、自分の力不足を反省し、作品やキャラクターに「ゴメンネ」と謝ってしまう。

そういう辛い思いをしたくないので、僕は今日も、これからも戦い続ける。僕の持てる限りの知識やアイデア、テクニックを用いて、魅力のあるストーリー展開や画面作りをしていく努力により、自分が生み出したキャラクターを「生かし続けていく」戦いこそが、僕とマンガとの戦いなのである。

TATSUMI MOOK

“GO NAGAI All His Works”

平成9年10月10日第1刷発行
監　修 ダイナミックプロダクション
発行人 廣瀬和吉
編集人 宮入正樹
発行所 辰巳出版株式会社
〒160　東京都新宿区新宿2-15-14辰巳ビル
TATSUMI PUBLISHING CO.,LTD
TATSUMI bild, 2-15-14 SHINJUKU SHINJUKU-KU TOKYO 160 JAPAN
TEL. 03-5360-8088
印　刷 図書印刷株式会社

PLANNING Automatic inc.

MAKING DIRECTOR Shunji Koike (Automatic inc.)

EDITORIAL STAFF Hiroshi Watanabe (Automatic inc.), Takahiro Gohzu (Automatic inc.)

ART DIRECTOR & COVER DESIGN Toshihiko Kyomen (Kyomen Design Office)

DESIGNERS Riku (Automatic inc.), Tetsufumi Saitoh,Takayuki Kondoh

PHOTOGRAPHERS Luca (Automatic inc.), Takamoto Tokuhara

WRITERS Kaoru Hanai (Automatic inc.), Masahiro Haraguchi, Junk Yuji (Burst)

ADVISORY EDITOR Atsushi Yoshida (Tatsumi Publishing)

TOTAL ADVISER Kazuhiro Miyajima (Tatsumi Publishing)

SPECIAL THANKS Ikuya Koumori (Dynamic Production), Rika Ishii (Dynamic Production)
Federico Colpi (Dynamic Planning), Kenichi Yamaoka(Memory Bank)
Tamiko Arakawa, Naomi Yoshida, Yoshiko Akuzawa, Sigmac, Tatsuya Hatta
Kyo Hirai, Osamu Mizuno, Izumi Horikiri, Suzuko, Fumiyo, Akira Kasahara

COLLECTION　COMICS Memory Bank, Masaharu Tsubota
TOYS Tadao Miura, Kihei Kawamura

MAKER&SHOP
●海洋堂／06-909-1220●コスチュームパラダイス／03-3770-3551●コテメンドウ／0463-24-9005
●日本切手／052-853-0111●バンダイ／03-3847-5116●バンプレスト／0473-67-7148
●フューチャーショップ／03-3460-9742●ボークス／075-955-2087●マックスファクトリー／0471-764595
●メディコムトイ／03-3460-3933●モデルガレージ／06-458-5450●モビーディック／03-5566-3050
●ユタカ／0471-43-9671●夢工房宝島／06-382-9117●レッズ／03-3863-0576

PRESENT FOR READER

❶『永井豪サイン入りハレンチ学園テレカ』（ダイナミックプロダクション）5名 ❷1/6ソフビ『妖鳥シレーヌ』（ボークス）6名 ❸リアルアクションヒーローズ『グレンダイザーP46』（メディコムトイ）3名 ❹Tシャツ『デビルマンP76』『デビルマンP86 ②』『デビルマンP87』（コスチュームパラダイス）3名 ❺Tシャツ『デビルマンP78』『デビルマンP83上右』（フューチャーショップ）各2枚4名 ❻シルバーリング『デビルマン』『シレーヌ』『デビルマンスカルP79』（フューチャーショップ）3名
●申し込み方法　巻末に添付されているハガキに住所・氏名・年齢などを明記して、アンケートにお答えの上ご応募ください。
●締め切り　1998年8月31日（当日消印有効）。当選者の発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。